（表紙）

吉貴公
繼豐公　享保十四年　自七月　至十月
宗信公

追錄　舊記雜錄　巻六十八

2277

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ㄟ、

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿日　東叡山　御靈前

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤ㄟ、紙面之趣各申談及　上

聞ㄟ、恐ゝ謹言、

享保十四年（朱カキ）七月二日　松平左近將監　乘邑判

松平上總介殿

2278

繼豐公御譜中

嚮レ是、繼豐無下獻二生見（イキミタマノ）玉之祝規於　幕府一之先蹤上、雖レ然、今般有下令二　竹姫君一伉二儷於繼豐一之　台命上、故上二書之一、始許レ獻二微儀於　幕府一、今歳七月六日家臣土岐半助賀通（留守居役）爲二使節一登レ營、候二于柳之間一矣、執政水野和泉守忠之出席、乃賀通就二牧野駿河守忠壽一獻二上黄金一枚于

大樹吉宗公一也、同日家臣相良彌一兵衛長主（留守居役）爲二使節一登二　西城一、於二柳之間一執政安藤對馬守信友出席、乃長主就二高木主水正正陳一獻二上黄金十兩于

大納言家重公一也、

2279

正文在文庫

御生見玉之御祝儀、只今迄者差上不申ㄟ得共　竹姫君様

御入輿被　仰出ㄟ故、向後右之御祝儀

公方様　大納言様ニ獻上仕度奉存ㄟ、宜御差圖可被下ㄟ、

以上、

（朱）「享保十四年」七月　松平大隅守

（朱）「御張紙」

黄金壹枚充、明後六日朝、

御本丸　西丸ニ以使者可被差上ㄟ、

2280

仝上

爲生見玉之御祝儀黄金十兩被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐ゝ謹言、

「享保十四年」七月六日　　乘邑判

（朱）「在口裏」

松平大隅守殿　　乘邑

（朱）「在右裏」

松平左近將監

2281

仝上

爲生見玉之御祝儀黄金十兩被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐ゝ謹言、

（朱）「享保十四年」七月六日　　信友判

（朱）「在口裏」

松平大隅守殿　　信友

（朱）「在右裏」

安藤對馬守

2282

仝御譜中

正文在文庫

松平大隅守

右芝屋鋪北之方新馬場并町屋、都合四千七百坪添屋敷被下ハ、御普請奉行申談可被請取之ハ、

（朱）「享保十四年七月七日」

（朱）「在口裏」

松平大隅守ニ

2283

仝上

此度　御入輿之節、御待上臈可有之と存ハ、其人書付可被申聞ハ、

（朱）「在口裏」

松平大隅守ニ

2284

継豊公御譜中

正文在文庫

芳墨披誦、如諭雖盛暑弥堅固珎重ゝゝ、此方無吳ハ、抑竹姫君可有入輿之事被謝申處、時議快然之趣被示聞、欣幸目出思給ハ、因茲如目錄被投與、丁寧之嘉容令祝着ハ、尚期後喜ハ也、

（朱）「享保十四年」七月十一日　　（近衛家久）（花押）

薩摩少將とのへ

№4

2285

仝上

寫正文在文庫

寫

竹姫君様御入輿之儀被　仰出ゟ付、二ケ年分之上ケ米、當秋より亥春迄四度之分被遊御用捨ゟ段、先月十六日御用番酒井讃岐守様より御留主居被召呼、御書付を以被仰渡ゟ、然ゟ最初御上ケ米之儀被仰渡ゟ節ゟ當春迄、年々御上納之受取之證文、御藏方御役人衆より被相渡ゟ付、本書之儀ゟ御記錄所へ納置事ゟ得共、右之譯ニゟ、當秋ゟ亥春迄四度之御上納ゟ無之筈ゟ、此旨承知仕ゟ様、御記錄奉行ゟ可申渡置ゟ、以上、

（宋）「享保十四年」七月　（樺山久初）主計

2286

仝上

寫正文在文庫

今度、私芝居屋敷北之方新馬場并町屋四千七百坪御添屋敷ニ被下之旨被仰渡、難有仕合奉存ゟ、右之通被仰出ゟ儀を重ゟ願申上ゟ儀、憚多御座候得共、最前ゟ申上ゟ通、兩様合七千五六百坪被下度旨相願ゟ段ゟ、此坪數程無御座ゟ得ゟ、作事難調ゟ故申上候、尤此度御添被下ゟ坪數ニゟ、作事も調可申ゟ得共、左ゟゟ彼是差支難儀仕ゟ、委細ゟ左ニ申上候通御座ゟ、最初願上候坪數之通ニ、是非被下度との所存ニゟ無御座ゟ得共、願上ゟ通之坪數程ニ候得ゟ、作事等ゟ致能、御屋形等之爲締之、旁以相願候儀御座ゟ間、此上可罷成事御座候ハヽ、今度御添被下ゟ屋敷隣東之方、町屋并本多（忠昭）主税屋敷御添被下置ゟ様奉願ゟ、委細繪圖ニ記申ゟ、

一御屋形作并其外作事等之儀、御張繪圖を以被仰渡趣奉得其意ゟ、則御差圖之通可申付儀御座ゟ得共、右通相調ゟへゟ、東南之方外廻ニ差掛行止りニ罷成ゟ、屋敷中之儀晝夜一時宛之廻り番申付來ゟ、就中御屋形作相立候得ゟ、廻番等弥以堅固不申付ゟゟ不叶事御座ゟ處、行廻り不罷成ゟへゟ廻番も不相調、第一出火等之節差支申ゟ、其上御門建場之勝手悪敷、末々之者出入差支申ゟ、（補註　この箇条　抹消ンアリ）

一被下置ゟ御添屋敷ニ引續、御増地被仰付、當居屋敷一圍ニいたし、拜領地ニ掛ケ、内證構新規ニ申付、御屋形作其外作事相調ゟへゟ、御住居并末々迄之勝手能、屋敷中外廻り共堅固有之候、尤有來候家作表・勝手向

共、御屋形作取付能御座ハ付ゐ、作事も致能御座ハ、左ハへ者、表門前只今迄之往還道通り者、御添地ニ御入被下置、爲代地此度御添被下ハ屋敷裏通之方往還之道ニ被仰付度奉願ハ、然者往還之支ゑ無御座ハ、依之此節被仰渡ハ御張繪圖之趣を以、委細住繪圖相添之差出申ハ、

一嫡子益(宗信)之助幼年ハ故、當屋敷内ニ差置申度候、右ニ申上ハ通御増地被仰付、御屋形作其外之作事迄相調ハへ者、有來ハ内證構者取毀、益之助部屋迄を殘置爲相住、外ニ作事等不致樣仕度奉存ハ、

一御入輿以後者、家來共ゑ段々相増差置ハ故、以前私召列ハ人數より者相増ハ付、有來ハ長屋ニゐ者不罷成候故、新規長屋作ゑ申付ハ、

右之通何分ニゑ宜奉賴ハ、以上、

「享保十四年」七月「十八日」　松平大隅守

2287

「一(朱)右御書附前條同時ニ左近將監樣ハ本持(島津久武)參仕、御用人牧野十郎右衛門ニゐ繪圖一枚相添差出ハ處、朱引之通相除明日可差出旨、是又十郎右衛門ニゐ被仰聞ハ付屋敷行止りニ罷成行廻り難成、縱令道之分明ハゐゑ、奥圍之内を表向之者又者末々之者共難差通段、右十郎右衛門迄致挨拶ハ處、いつれ朱引之分者可相除旨、十郎右衛門より承ハ付、委細承知仕ハ、則罷歸大隅守へ申聞、書付認置可差上旨申達置、罷歸達　貴聞ハ處、弥以左近將監樣御差圖之通書改可被仰付ハ間、其通可申付旨　御意ハ付、朱引之分相除書改、翌十九日左近將監樣ハ本持參仕、右十郎右衛門ニゐ繪圖并御書付差出ハ處、御請取被成ハ由、同人ニゐ被仰聞候付、達貴聞、首尾克御受取被成ハ付ゐ者、肥後藤之丞へ御使者被仰付、左近將監樣へ御禮被　仰進ハ、

一右之通書付被差出筈之段者、酒井讃岐守樣ハ本、水野壹岐守樣へ者内匠(平岡之邑)御使者ニゐ御案内被仰進、書附二通・繪圖共被入御内見ハ處、被聞召置ハ由御返答有之、讃岐守樣ニゐ者、右兩通之御書付被留置ハ、

一右付ゐ七月廿四日、左近將監樣御用人中ゟ御留守居御用之由申來、相良彌一兵(長主)衛罷出ハ處、左近將監樣より御直ニ被仰渡ハ者、最前添屋敷ニ被下ハ外、重ゐ願之通町屋并本多主税屋敷千四百五十坪、表門前往還通りも如願入被下置ハ、伺繪圖之通

竹姫君様御屋形被申付、御作事等輕く可被申付ハ、御屋形程近くハ故、西應寺門前七百四十坪相添被下ハ、都合六千八百九十坪被下ハ、先達て添被下ハ屋敷裏之方往還道ニ成ハ、委細御普請奉行可被相談ハ、家來ゟ繪圖を以具ニ可申達ハ、其通可相心得旨被仰聞ハ故、相應ニ御受申上相下りハ、左ハて御用人牧野十郎右衛門ゟ右繪圖相渡ハ、末〻栖居之儀置繪圖之通ニて ハ由申ハ、　御守殿御圍内御藏地此節東之方増地御拜領之地面ニ御直被成ハハ、可然由、左近將監様思召之旨承知仕ハ、尤此御方様思召之所ゑ有之ハハ、重て可被仰聞旨、是又十郎右衛門申ハ、

一右御拜領ニ付て者、御勤之儀右同人ニ申達ハ得者、此程之御勤之通可被遊由申ハ、

(吉貴)總州様御勤之儀ゑ申達ハへ者、是又此程御同様と申ハ、左近將監様ニゑ其思召ニてハ由、挨拶承ハ、

右之通七月廿四日相良彌一兵衛ゟ申出ハ、

一右御添地又者西應寺門前地之内御拜領被遊ハ付て、左近將監様ゟ彌一兵衛ニ御渡被成ハ御書付、左之通ニハ、

一右付て　總州様ゟ御勤之儀、七月廿六日便御國元へ申越、八月十八日之御日付ニて、爰元調ニて御書可差出ハ、

公方様　一位様御方へ御内證御勤御文も、同前ニ爰元調可申付旨、比志嶋隼人殿(範房)ゟ被申越ハ付、調方申渡、九月十六日被差出ハ、

但　大納言様御方御内證御勤者相除也、」

2288

紙背公御諸中

寫正文在文庫

今度私芝屋敷ニ御添地被仰付、作事等之儀も以御張繪圖被仰渡ハ、表立て者難申出儀ハ得共、其段不申上ハて者、存寄之趣聊可相知様無御座ハ、當分内證向構者、私先妻不幸之所ニて、其節之居間等者取毀ハ得共、于今相殘候作事、益之助部屋外者、都て其時之家作ニて、廊下并式臺之儀者、一入不淨之作事ニ罷成、其後不相改差置ハ處、此節右之家作ニ御座所作次、御入興之御沙汰心掛ニ御座ハ、作之有來候家作者不殘取毀、惣て新規之作事ニ申付度御座ハ、左ハて此節之拜領地ニ内證向構を振替申度存、別紙并繪圖を以相願申候、右之趣御物語可被下ハ、以上、

(宋)「享保十四年」七月十八日

2289

「(朱)右御書付之通小野次郎(忠)右衛門様より松平左近將監様ハ御物語被仰上ハ筋、七月十七日次郎右衛門様此御方ハ被仰入、御賴被成ハ處御受合ニゐハ、右之御書付次郎右衛門様ハ被遣、翌十八日左近將監様ハ御持參被成、御直ニ被差出ハ處、朱引之通相除被書改、明日可被差出旨左近將監様ハ被仰ハ、其節本事者、左ニ相記ハ御願書并繪圖、左近將監様ハ持參仕扣居ハ付、右之件次郎右衛門様より本ハ被仰聞ハ付、罷歸其段達　貴聞ハ處、朱引之分相除書改ハ様ニと被仰付書改、左ハゐ又ゝ次郎右衛門様ハ被遣、翌十九日御持參ハゐ被差出置ハ處、被請取置候由、本儀も翌日左近將監様ハ罷出ハ故、右之趣次郎右衛門様より本ハ被仰聞ハ故、其段達　貴聞候、

但　此儀付最前被仰渡ハ趣、前条七月七日之座ニ有之、」

2290

全御譜中

享保十四年己酉七月二十四日有　台命、賜二東武芝宅東北隣六千八百九十坪副地一、是依下結二婚姻於　竹姫君一營中守殿上也、事詳二于後一、

全上

正文什文庫

松平大隅守

芝居屋鋪北馬場并町屋四千七百坪最前添屋敷被下ハ外ニ、重ゐ願之通、添屋鋪隣東之方町屋并本多主税屋鋪千四百五十坪相添之、表門前只今迄之往還道通りも、如願添地ニ入被下置ハ、窺繪圖之通

竹姫君様御屋形ニ被申付、勿論作事之儀輕く可被申付ハ、且亦御屋形程近ニ付、西應寺門前町屋東之方七百四拾坪相添、最前被下ハ添屋敷共ニ、都合六千八百九拾坪被下之ハ、先達ゐ添被下ハ屋敷裏之方、往還道ニ成りハ、委細之儀者御普請奉行可被相談ハ、

(朱)「享保十四年」七月「二十四日」

(朱)「在口裏」松平大隅守ハ

2292

継豊公御譜中

同年七月二十八日　上使伏見織部(篤行)使(晉)來二芝邸一、從二先規一、以下尊應所二擣擊一之雲雀上賜二於繼豐一也、即日登　レ營奉レ申二謝之一、丹羽式部少輔倚氏奏二達之一、同日登二　西城一、就二土岐丹後守賴稔一(奏者番)禮二謝之一、且詣二執政各之第一亦謝レ之、

2293

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ゟ、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

(家綱)嚴有院様五十回御忌御法事、於東叡山御執行相濟、五月

八日

御靈前　御參詣之儀被承之、恐悦旨尤ゟ、紙面之趣各申

談及　上聞ゟ、恐〻謹言、

松平左近將監

乘邑判

享保(朱カキ)十四年七月廿一日

松平上總介(島津吉貴)殿

2294

吉貴公御譜中

今茲享保十四年己酉六月四日

大樹吉宗公召二繼豐於　營中一、執政戸田山城守忠眞傳二

合命一曰、結二婚姻於竹姫君一(前大樹綱吉公養女實、清閑寺熙定卿女也)、以二今歳暮一

可レ整二婚儀一也、乃繼豐拜二謁

吉宗公

家重公一、謝二恩命之忝一矣、吉貴在レ國聞レ之、先欲レ奉レ

謝レ焉、教二家臣一階堂舍人行篤一爲二謝使一馳中於東武上、

同八月二日行篤到二元老及若年寄各館一、勤二吉貴之謝使一、

同月四日執政各授二奉書一、同九月二十三日辭武江、同十

月十二日歸二薩府一復レ命、

2295

仝上

正文在文庫

御札令披見ゟ、

公方様　大納言様益御機嫌能被成御座、目出度被存由尤

ゟ、然ゟ先比同氏大隅守被爲召、

竹姫君様御縁組之儀被　仰出之、其上　御前ゟ被召出之、

御手自御熨斗鮑頂戴ゟ段被承之、難有由得其意ゟ、依之

爲御禮被差越使者ゟ紙面之趣、各申談及　高聞ゟ、恐〻

謹言、

水野和泉守

忠之判

享保(朱カキ)十四年八月三日

松平上總介殿

2296

仝上

御札令披見ゟ、

公方様　大納言様益御機嫌能被成御座、目出度被存由尤

ゟ、然ゟ先頃同氏大隅守被爲召、

竹姫君様御縁組之儀被　仰出之、其上　御前ゟ被召出

御手自御熨斗鮑頂戴ハ之段被承之、難有由得其意ハ、依之爲御禮被差越使者ハ紙面之趣及言上ハ、恐〻謹言、

享保十四年（朱カキ）八月三日　　安藤對馬守信友判

松平上總介殿

2297

全上

御札令披見ハ、

公方様　大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、然ハ今度

竹姫君様御縁組被　仰出ハ付ヲ、同氏大隅守儀

御前ニ被召出ハ節、其方事ヌ御懇　御諚之趣相達被承之、

難有由得其意ハ、紙面之趣各申談及　上聞候、恐〻謹言、

享保十四年（朱カキ）八月三日　　水野和泉守忠之判

松平上總介殿

2298

全上

御札令披見ハ、

公方様　大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、然ハ今度

竹姫君様御縁組之儀被　仰出ハ付ヲ、同氏大隅守儀

御前ニ被召出ハ節、其方事ヌ御懇　御諚之趣相達之被承、難有由得其意候、紙面之趣及言上ハ、恐〻謹言、

享保十四年（朱カキ）八月三日　　安藤對馬守信友判

松平上總介殿

2299

継豊公御譜中

正文在文庫

竹姫君様女中格合書付并人數

御目見以上

大上臈　壹人

小上臈　壹人

大年寄　壹人

御局　壹人

御年寄　壹人

若年寄　三人

御中臈　八人
内頭壹人
御小姓　貳人
表使　三人
御次頭　壹人
御右筆　三人
御次　四人
呉服之間　六人
ご　ぜ　壹人
御三之間　五人
御末　貳人
御中居　三人
御使番　三人

御目見以下

御右筆之間小間遣　三人
御半下　拾貳人

都合上六拾四人
召仕女百四拾人

（朱）「享保十四年八月十二日」

2300

全御譜中
正文在文庫

覺

御入輿御待受、御道具等相調ハ付ゐ来、御道具相附ハ御紋、葵一色相調可申哉、奉伺ハ、且又、先達ゐ伺置ハ御供之御女中上下御人數之儀ゑ、被仰聞度奉存ハ、以上、

（朱）「享保十四年」八月　松平大隅守内　相良彌一兵衛（長主）

（朱）「御張紙」
葵之御紋一色可被相用ハ、

2301

全御譜中

同年八月十一日普請奉行稲葉出雲守率二支配有司於芝邸一

來、所レ副二賜于繼豐一地悉以二繪圖一被レ附二與之一、國老島津木工久豪(武)・平岡内匠之品、用人山澤十太夫盛香・向井四郎右衛門友榮等接二待之一、委見二于國老書一矣、

仝御譜中

正文在文庫

御待請御道具品書

(朱)「御張紙」

一幸菱御小袖　二重

加賀守時之通可被致候」

外御小袖六重

一御夜物　大中　八通

(朱)「右同斷」

幸菱御夜物共

一御帶　幸菱　二筋

(朱)「右同斷」

内壹筋白

壹筋赤

一御つほ袖　二

内一　紅

一　白

一御蒲團　幸菱御蒲団共　四

一御枕　一對

(朱)「右同斷」

但純子

(朱)「御張紙」

一御とんちやう　一釣

加賀守時之通可被致候」

但純子

一御褥　幸菱御褥共　六

(朱)「右同斷」

一御簾

(朱)「右同斷」

但御上段・御下段共

一御掛物

(朱)「右同斷」

但御屋形作御座御床ニ應シ相調可申ハ哉、

一御軸物

(朱)「右同斷」

一右盆　梨子地蒔繪

一御手鑑

(朱)「右同斷」

一文鎭

(朱)「右同斷」

一御花瓶

但御屋形作御座御床ニ應し相調可申ハ哉、

一御花臺　梨子地又者黑塗

但書同斷

一御香臺　梨子地又者黑塗

但書同斷

一御薄板　黑塗

但書同斷

一御文臺　梨子地御紋蒔繪金具交角金物金七子御紋卦彫　一通

但御硯箱添、

一御料紙箱　梨子地御紋蒔絵 金具交松梅之模様　一通

但御硯箱共、

一御香盆　右同断

一御香合　右同断

一御香爐　右同断

一御焚から入　右同断

一銀御香匙火箸

（朱）「御張紙 加賀守時之通可被致候」

右五行御床棚ニ應し相調可申ハ哉、

一御廣蓋　梨子地御紋ちらし 金具入交金ふくりん　二

一御たはこ盆　御小道具共梨子地蒔絵　一通

一御たはこ盆　御小道具共黒塗高蒔絵　一通

（朱）「右一通り用意ニ而可然ハ、」

一御臺子　梨子地御紋蒔絵金具 交御小道具共　一飾

（朱）「御釜・水指之外ニ銀道具ニ不及ハ、」

但御釜・御水指其外御道具銀卦彫、

一御臺子覆　黒塗朋黄もんしや 張　金物金めつき

一御茶筅筒　梨子地御紋蒔絵 金具交　一

但御小道具添梨子地蒔繪、

一御衣桁　梨子地御紋蒔絵　一

一御耳手洗　梨子地御紋蒔絵　二

一御手洗　梨子地御紋蒔絵　一

一御うかい茶碗　右同断 蓋共　木碗　一

一御うかい茶碗臺　梨子地御紋 蒔絵　一

一御湯とう　右同断　一

一御手拭掛　右同断　三

但銀御手拭押添御上段御寢所御化粧之間

御用、

一御楊枝箱　右同断

一御火鉢　大小

内一臺　梨子地唐草蒔絵

二　黒塗蒔絵

（朱）「御張紙 不及蒔絵候、数者御座所見計可被申付候、御次向者唐銅ニ可被致候」

一御燭臺　黒塗蒔絵

（朱）「右同断」

一御手燭臺　右同断

右貳行御座ニ應し相調可申ハ哉、

（朱）「御張紙

一御屏風　十雙

白絵御屏風者可為此通候、其外者御座敷向入候程用意可被申候、数多ニ者無用ニ候、白絵屏風二双之

内二雙　白絵大小六枚折

一雙　大　六枚折
外三雙計も用意可然候」
一雙　中　六枚折
一雙　小　六枚折
五雙　貳枚折
(朱)「御張紙
可為此通候、毛彫ニ者不及候、御次向者鉄銅懸行燈可被致候」
一御行燈　しんちう卦彫
但御座ニ應し相調可申ハ哉、
御客座入附
一御臺子　黒塗蒔絵御小道具共　一飾
一御衣桁　黒塗蒔絵　一
一御手拭掛　右同断　二
但鈴御手拭押添
一御茶簞笥　右同断　御小道具共　一通
一御たはこ盆　右同断　御小道具共　二通
一御耳手洗　黒塗蒔絵　一
一御うかい茶碗　右同断　一
但木碗蓋共
一御うかい茶碗臺　右同断　一
一御手水手洗　右同断　一通
一御湯とう　右同断　一
一御火鉢　薩黒塗めつき　金物　二
一青貝御料紙箱　一通
但御硯箱共
御膳所入附
一御掛盤　梨子地御紋蒔繪　金具交　一通
御本二三迄諸道具共不殘
(朱)「御張紙
右御本膳七組相調可申候哉、又者五組ニ相調可申ハ哉、
加賀守時之通可被致候」
一銀御簡鍋　御紋卦彫　一對
(朱)「右同断」
一同御湯次　右同断　二
(朱)「右同断」
一同御湯せん　一對
(朱)「右同断」
(朱)「御張紙　承置候」
一折目之御規式御道具之儀者、此方家格之通相調可申ハ、
(朱)「大久保下野守江可被承合候」
一御客部屋御用之猫足御膳道具、御幾人前相調可申ハ哉、
(朱)
「右付札無之、蒔絵御道具之分者、此方ニ而出来ハ御道具、
塗・蒔絵等之格を以結構過不申様ニ可被仕ハ、委細大久保
下野守江被承合可被申付ハ、
享保十四年八月十八日」

2303

仝上

鳥居丹波守(忠利)儀、此節在所ニ御暇被下置ハ、就夫　竹君様御入輿之節之用事申合置ハ、可罷成儀御座ハ者、御入輿御祝儀相濟ハ迄、丹波守儀滞府被仰付被下度奉賴ハ、以上、

(朱)「御張紙」

丹波守儀願之通滞府候様相達候」

(朱)「享保十四年」八月十八日　松平大隅守

2304

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様　大納言様益御安泰被成御座、恐悦旨尤ハ、然者今度御入輿之儀被　仰出ハ付ゐ、同氏大隅守増上寺火之番御免、將又上米二ケ年分御用捨之段相達、且又嶋津但馬(忠雅)守参府之儀伺之通相濟、難有由得其意ハ、兩通紙面之趣各一覽之事ハ、恐ゝ謹言、

享保十四年(朱カキ)八月十九日　水野和泉守忠之判

松平上總介殿

2305

仝上

御札令披見ハ、

公方様　大納言様益御安全被成御座、恐悦旨尤ハ、然者今度御入輿之儀被　仰出ハ付ゐ、同氏大隅守増上寺火之番御免、將又上米二ケ年分御用捨之段相達、且又嶋津但馬守参府之儀伺之通相濟、難有由得其意ハ、兩通紙面之趣令承知ハ、恐ゝ謹言、

享保十四年(朱カキ)八月十九日　安藤對馬守信友判

松平上總介殿

2306

仝上

御文のやう披ろう致しまいらせハへハ、御滿そくに思しめしハ、何も御念入まいらせられハ御事ニ思しめしハ、御手まへさま御ふしの御事ニ御座被成、めてたく思しめしハ、何もよく心得ハて申せとの御事ニ御さハ、めてかしく、

七月十三日之御文下されハ、まっ〳〵

公方様

大納言様御機嫌よくならせられ

一位様ニも御機嫌よく成らせられハ御事、御めて度思しめし被成ハ由、さやうに御座ハへ者、御入輿の事　仰出

されけこ付、御同性大隅守殿増上寺火之番御めん、其上上米二ケ年分御用捨被遊ケ由　仰渡され、誠に御念比成御事と忝思しめし被成ケ由、御禮仰上られ、めて度かしく、

享保十四年（朱カキ）

松たいら
上總介さま　御返事　　秀小路
人〻御中　　梅その
　　さくらゐ

2307

継豊公御譜中
正文在文庫

御入輿以後

公方様　大納言様に、松平大隅守并隠居上總介より、獻上物仕、御禮可申上と奉存ケ、依之、松平加賀守（前田吉徳）様御方承合候處、　御入輿以後　御本丸　西之御丸に、加賀守（前田綱紀）様御父子より眞御太刀被獻、且亦前加賀守様より茂

公方様に御腰物御大小を茂被獻候由、別册之内申來ケ、弥以此節之儀茂、大隅守并上總介より、　御本丸　西之御丸に、眞御太刀獻上仕、上總介より茂

公方様に御腰物御大小茂獻上仕、御禮可申上ケ哉、此外獻上物并贈物等之儀、委細加賀守様御方承合ケ處、別册之通申來ケ、

（朱）「御張紙　此方より相渡候別帳之通可有獻上候、上總介よりハ其節一類之内以名代、御礼被申上獻上物可被致候」

右之内、眞御太刀御道具之儀茂、御拵等手當仕事御座候付奉伺ケ、以上、

（朱）「享保十四年」八月「二十三日」　松平大隅守内（長主）
相良彌一兵衛

2308

仝上

御入輿以後御禮申上候節、同性益之助儀茂幼少、其上御目見茂未申上事御座ケ故、獻上物仕ケこ及申間敷ケ哉、從同性上總介妻茂、

公方様　大納言様に從御内〻獻上物仕來、且又從公方様拜領物茂被仰付事ケ間、獻上物爲仕度奉存ケ、

御入輿被仰出ケ御禮之節茂、右之通奉得御差圖ケ處、益之助より（朱）「御張紙　此方より相渡候別帳之通、以使者表立可被差上候」獻上物こ不及ケ、上總介妻より茂表立ゐ差上物こ不及、從御内〻差上ケ儀茂可爲勝手次第旨、御張紙を以被仰渡ケ、此節茂格別之儀ケ間、　御入輿以後御禮申上候節、上總介妻より表立ゐ獻上物爲仕、且又御待上薦阿部伊勢守（正福）妻より茂獻上物可仕哉、御差圖可被下ケ、以上、

（朱）「享保十四年」八月廿三日　　松平大隅守

2309

仝上

（朱）「御張紙　別紙之通可被差上候」

一小次郎様（田安宗武）　小五郎様（一橋宗尹）は及献上物可仕ハ哉、

（家茂夫人）　（家継生母）

一一位様　月光院様　瑞春院様（綱吉側室）　養仙院様（綱吉養女）は及格別之儀

（朱）「一位様・養仙院様江者此方より相渡候別帳之通、可被差上候、其外御女中様方江者不及其儀候」

ハ間献上物可仕ハ哉、

右献上物御差圖可被下候、　御入輿被　仰出ハ御禮申上ハ節及、献上物奉伺ハ得共不及其儀、

一位様ハ表御内々より差上物可爲勝手次第旨、以御張紙被仰渡ハ、　御入輿以後御禮申上ハ節表、献上物仕度、重而奉得御差圖ハ、以上、

朱カキ享保十四年　八月廿三日　　松平大隅守

2310

吉貴公御譜中

扣正文在右筆所

一筆致啓上候、

公方様　大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦奉存ハ、將又私病氣聢と無御座ハ付、參府難仕之段、去ル午冬、從同氏大隅守以使札申上ハ處、御用捨被下、緩々遂保養、難有仕合奉存ハ、然表此度竹姫君様大隅守ハ御紐組被　仰出、不存寄仕合冥加至極奉存ハ、此節病氣少々快方御座ハ表、參府之儀相窺　御入輿以前出府仕、右之御禮を及申上、竹姫君様ハ御目見仕度所存御座候得共、今以氣分相勝不申、度々眩暈差發難儀仕ハ、唯今之様子ニ而表、參府可仕躰無御座ハ、此砌御斷申上ハ段、別而迷惑至極奉存ハ、此上得と致養生、病氣快方罷成ハ節、參府相伺ハ様仕度奉存ハ、何分ニ及

御前可然様御執成所仰ハ、依之以使者申上候、恐惶、

朱カキ享保十四年　八月廿五日

水野和泉守様

松平左近將監様

酒井讃岐守様

2311

継豊公御譜中

正文在文庫

（朱）「御張紙

御入輿翌日五百八拾之餅献上之儀ニ付、松平加賀守様御方ハ承合候處、別册之通申來候間、帳面之通家老役を以献上可仕ハ哉、此段奉伺ハ、以上、

五百八十之餅、十種十荷、伺之通以家老可有献上候」

「享保十四年」(朱)八月「二十五日」　松平大隅守内　相良彌一兵衛

継豊公御譜中

寫正文在家老座

一去ル九日稲葉出雲守(正房)様ハ御用付、佐久間九右衛門(盛村)罷出ル處、今度御拜領之御添屋敷、十一日ニ出雲守様御越御引渡可被成旨、被仰聞ル由、九右衛門申出ル付、十日ニ以御使者、拜領屋敷爲御引渡御越可被成旨、家來之者ハ被仰聞、委細致承知ル、何時御出可被成哉、旁以使者申達候様ニと、御口上ニゐ被仰進ル、

一表御門向御拜領地之内ニ輕幕構相調、出雲守様御座之分十帖敷・次之間十帖敷相調、此御方御家老・御用人罷居、且又出雲守様御家來并御支配之人罷居ル所、十六帖敷ニ相調、屏風構致置、十一日四時過、御拜領地町屋之分ハ町御奉行御支配之人差越、出雲守様御支配之衆へ引渡有之ル、其節ハ此御方ゟ誰そ出合不申ル、九日ニ九右衛門出雲守様ハ參上仕ル節、町御奉行より引渡之節ハ此御方ゟ罷出ニ不及旨、被仰聞ル故、右之通出會不申ル、

一山澤十太夫(盛香)・向井四郎右衛門(友光)儀、出雲守様御越前以、幕構之場所へ差越、彼御方御家來、且亦出雲守様御同役鈴木伊勢守(直武)様御家來も、被差越置ル付、右之面々ハ十太夫・四郎右衛門出會致挨拶ル、夫儀ハ出雲守様御出前以、右之所ハ差越居申ル、其外土岐半助・曽木權之助・五代傳左衛門罷出、御家來之衆へ致挨拶ル、尤御留守居付三人・御歩目付・横目・御普請方檢者・惣大工も罷出ル、其外右幕構之所へ役々相詰ル、

一御定杭此方ニゐ致用意置、右幕構之所ハ遣置ル處、出雲守様御支配之衆之内ゟ間數書調、御拜領地之東西南北ニ建之、此御方御普請奉行ハ御引渡相濟申ル、

一出雲守様ニハ赤はね(羽)植木屋へ御扣被成御座ル付、九右衛門事右御扣所迄被遣置ル、左ルゐ、町奉行御支配之人より引渡相濟、右御定杭迄建調ル段、出雲守様へ御支配之人より御案内申上、追附御越被成、柳生備前守(後方)様御屋敷角より御下乗、直此節新規ニ被相立ル道御通、東之方外廻り一通り御見分被成ル付、九右衛門・半助事ハ相附參ル、夫より御本門前御通、直幕構之所ハ御出被成ル、其節十太夫・四郎右衛門幕構外御通筋ニ罷出、幕構之内ハ御案内仕候、其節ハ儀御入口迄御出會申候、左ルゐ御茶・御たはこ盆差上、ハより一通り御

挨拶申上、引次十太夫・四郎右衛門罷出御挨拶申上ル、右御引渡相濟ル付テ、御拜領地繪圖面被相調、右繪圖面御定杭之通御引渡相請取申ル段、彼御方より書附御認御持せ、出雲守様御前ニテ彼御方御家老竹内佐次郎讀ルテ、直十太夫致印形、佐次郎ハ御渡被成ル、右扣之由ニテ、佐次郎より十太夫ハ相渡ル、右繪圖面并奥書寫之爲御見合差越申ル、右爰元御記錄奉行ハ一通、御用人方ハ壹通、尤御家老座ハ壹通差置申候、

一右相濟、内匠罷出　太守様御挨拶之趣、今日ハ拜領屋敷爲御引渡御越御太儀存ル、罷出可得御意之處、持病差起罷出躰無御座ル故、内匠を以此段申達ル、本宅へ及御越御休息被成ル様と存候旨、被仰進ル處、御返答入御念被仰下趣承知仕ル、御持病氣ニテ御出不被成段御尤存ル、御本宅ハ可罷出由を及被仰下忝奉存ル、尤可致伺公ル得共、直御用筋及有之、罷出ル付テ其儀無御座ル、何様重テ參上仕旁可申上ル、此旨宜申上ル様と被仰聞ル、右相濟御菓子・染物差上ル得共、御斷ニテ不被召上ル、左ルテ杢・内匠ハ、今日ハ御引渡も首尾能相濟目出度被思召ル由、御挨拶有之、御立被成ル付、杢・内匠御座御入口迄御送申ル、十太夫・四郎右衛門・九右衛門・半助事ハ、幕構外最前之所迄罷出ル、出雲守様御支配之人數并御家來・伊勢守様御家來も罷歸ル付、相應ニ致挨拶ル、出雲守様ニハ御歸以後、爲御禮御使者被遣ル、

一御立以後、杢・内匠・十太夫・四郎右衛門・九右衛門・半助、御屋敷廻り出雲守様御見分場所、一通り致見分ル、

一御引渡相濟、早速外廻り板圍被仰付ル、公儀御繪圖面外廻小路六間幅ニテ候處、右外廻板圍六間幅ニ相調ルテハ、外廻下水等相調ル節相障候付、一往四間幅之小路ニ御かこい被成置、追テ六間幅ニ可仕旨、御留主居名書之書付相調、十日ニ道御奉行神保四郎右衛門(忠正)様ハ、御留守居付山元仁右衛門致持參差出ル處、御逢被成被聞召置ル、御勝手次第外圍可被仰付旨、被仰聞ル由申出ル付、當分ハ先四間道ニ被相立、板かこい被仰付置ル、

一去ル九日出雲守様ハ九右衛門罷出ル節、御拜領地御引渡之當日御勝手次第、此中之往還ハ御屋敷中ニ圍入、御願之新道及御立被成ル方可然旨、被仰聞ル旨、九右衛門申出ル付、右之通早速外かこい被仰付ル、表御門

前辻番所を、御拜領地北東之角明地有之ゟ付、右明地ニ假辻番所被相直、尤重ゐ本辻番所之儀ゑ、右假辻番所へ被相立度旨、御目付北條新(氏慮)藏様へ御留守居名書ニゐ、十日之刻御留守居付佃新右衞門を以差出候處、被得其意ゟ、御見分之者可被差越由御挨拶有之、其當日新藏様より御歩目付一人・御小人目付兩人被差越、見分有之ゟ間、御留守居付山元仁右衞門・入江清左衞門出會ゟ處、假辻番所弥御申出之場所ゟ御勝手次第御立可被成ゟ、本辻番所之儀ゑ御目付衆ゟ申出、五日中御挨拶可有之旨申聞罷歸ゟ旨申出ゟ付、十一日之晩より右之所ゟかり辻番所被相建ゟ、然處去ル廿四日、御徒目付早川庄次郎、御小人目付野中新五右衞門・木村丈助本辻番建所爲見分差越ゟ付、山元仁右衞門・入江清左衞門差出ゟ處、當分之假辻番所邊ニ相立可然ゟ、左ゟゐ辻番所普請相濟ゟ節、新藏様ゟ首尾申出ゟゑ、其節致見分、番人引移之儀可申渡由被申聞ゟ、且又番人廻場之内倒者等有之ゟ節、此御方引受可仕ゟ、尤向屋敷雨打下水ニ倒込ゟ者ゑ、向屋敷引渡可申ゟ、左ゟハ、其御方ゟ御引受可有之由此方ゟ可申聞旨、新藏様被仰ゟ由、右三人より承ゟ旨申出ゟ、

一此節新規ニ被相立ゟ表御門前通小路、向後道作・掃除等之儀如何取捌可申ゟ哉之旨、道御奉行神保四郎右衞門様ゟ、相良彌一兵衞罷出申上ゟ處、向御屋敷之儀ゑ御小身、殊裏通ニゟ得ゑ、此御方御一手に御取捌被成間敷哉之旨、御挨拶有之ゟ付、弥其通可仕旨申上置ゟ、此儀御拜領地御引渡一巻ニゐゑ無之ゟ得共、新道掃除・道作等之儀、右之通被相究ゟ故爲御納得申越候、

一御拜領地御引渡相濟ゟ段、則日松平左近將監様ゟ相良彌一兵衞を以御屆被仰上、鈴木伊勢守様ゟゑ表方御使者を以御案内被仰進ゟ、出雲守様・伊勢守様御家來且又棟梁都ゐ十一日御引渡場所ゟ罷越候人數左之通ニゟ、

稲葉出雲守様御家老

竹之内佐次郎

鈴木伊勢守様御用人

益田傳左衞門

中村三左衞門

中村半治

平野善三郎

上野彌太夫

御用人

牧野吟藏

御普請方棟梁

五孫(百カ)子友助

安川善太夫

清水喜兵衞

富山久右衞門

宇野豐次郎

服部勘右衛門

右之人數罷越候、

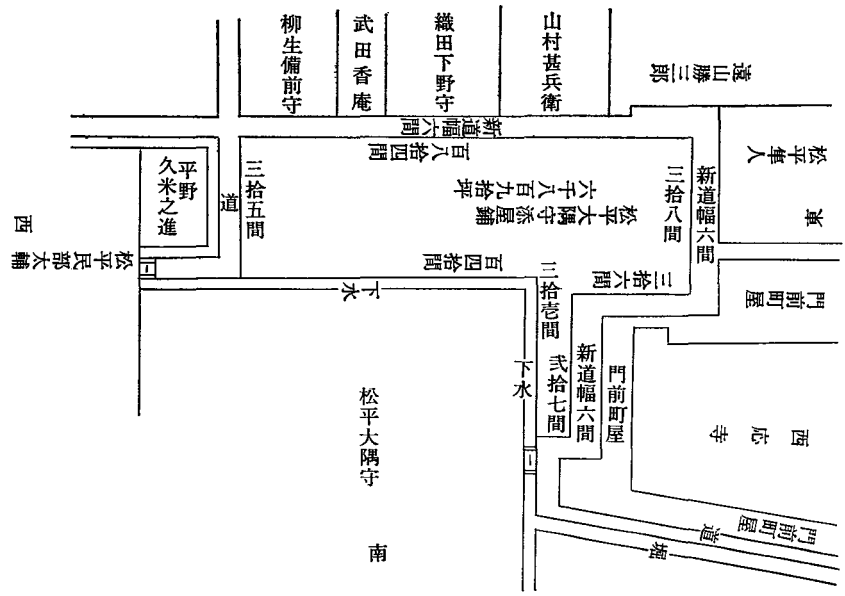
一出雲守様十一日御出、御引渡相濟ハ以後、御書院ニ被仰入御料理被進、御支配之人ニ茂御料理等被下筈ハ處、前晩九右衛門迄段〻御斷被仰越ハ付、被任其意御馳走不被仰付ハ、

右茂御拜領地去ル十一日御引渡相濟ハ、委細之儀茂追而可申越旨先頃申越置ハ、御引渡之次第且又此御方御手當之次第右之通御座候、假辻番所并外かこい等之儀前以手當申附置ハ故、御引渡相濟早速取建被仰付ハ、此段爲御納得申越ハ、　總州様ニ可被申上儀茂御考次第可被成ハ、以上、

（朱）「享保十四年」八月廿六日　　平岡内匠
伊集院藏人
嶋津　杢
嶋津中務

嶋津大藏殿
樺山主計殿
種子嶋彈正殿
比志嶋隼人殿

2316



芝本多主税(忠昭)殿上ケ地、同新馬場并同朋町西應寺門前町上ケ地、松平大隅守爲添屋鋪御渡之被成、四方間數坪數右繪圖之面、御定杭之通相違無御座請取申候、爲後日仍如件、

松平大隅守内

享保十四己酉年八月十一日　山澤十太夫(盛香)印

稲葉出雲守渡之

2314

(朱)「雜抄中」

高持成願御格式之事

一外城衆中之儀、惣ゐ百斛以上ニゑ高上り御免被成間敷ゟ、以前ゟ衆中筋ニゐ三四代差立勤來ゟ者之子孫ゑ、百斛迄高上り御免可被成ゟ、代々衆中筋ニゐゑ、所衆並迄之御奉公相勤ゟ者ハ、五拾石以上九拾九石餘之高上り御免被成、百石高上りゑ御免被成間敷ゟ、祖父・曽祖父代御赦免者之子孫、當時衆並ニ勤居ゟ者ハ、五拾石迄之高上り御免可被成旨、被定置ゟ得共、自今以後ゑ右躰家筋之者ニゐゑ、其身之器量、行跡不宜、又ゑ下輩之家業等致ゟ者ハ、高上り御免被成間敷ゟ、往々屹と役目をゑ可相勤程之家業宜ゟハヽ、御法之通高上御免可被成ゟ間、高上之儀申出ゟハヽ、右之趣を以曖致吟味、其上地頭前ニゐ委細相しらべ、願取揚ゟ樣と可相心得旨、諸地頭・月番御用人ハ享保十四酉八月申渡ゟ事、

2315

継豊公御譜中

正文在文庫

御待請御道具品書

(朱)「御張紙ニ而　黒塗村梨子地若竹之模樣御紋ちらし」

一御軸物盆　梨子地蒔絵

一御花臺　梨子地又者黒塗

(朱)「花臺黒かきふち平蒔絵天人唐草」

但御屋形作御座御床ニ應し相調可申ゟ哉、

一御香臺　梨子地又者黒塗

但書同斷

(朱)「黒塗村梨子地若竹之模樣御紋ちらし」

一御薄板　黒塗

(朱)「黒塗御紋ちらし平蒔絵」

但書同斷

一御文臺　梨子地御紋蒔絵金具交角金物金七子御紋卦彫　一通

但御硯箱添

(朱)「御文臺惣地濃梨子地御紋并若竹之模樣高蒔絵御硯箱内蒔絵松・樅・岩・峯をあいしらひ尤梨子地同節」

一御料紙箱　梨子地御紋蒔絵金具交松ニ梅之模樣　一通

但御硯箱共

(朱)「惣地濃梨子地御紋丼若竹之模様高蒔絵内
蒔絵松・梅・峯ニ流をいたし遠山に小松あひしらい」
一御香盆　梨子地御紋蒔絵金具
交松ニ梅之模様
(朱)「惣地濃梨子地御紋丼若竹之模様高蒔絵」
一御香合　右同断
(朱)「右同断」
一御香爐　右同断
(朱)「右同断」
一御焚から入　右同断
(朱)「右同断」
一御廣蓋　梨子地御紋ちらし金具
入交金ふくりん　二
(朱)「惣地濃梨子地御紋丼若竹之模様高蒔絵」
一御たはこ盆　御小道具共梨子地
蒔絵　一通
(朱)「黒塗村梨子地若竹之模様御紋ちらし」
一御臺子覆　黒塗朋黄もんしや張
金めつき　一
(朱)「可為此通候」
一御茶筥笥　梨子地御紋蒔絵
金具交　一

但御小道具添梨子地蒔繪

(朱)「黒塗村梨子地御紋中高蒔絵内村梨子地計」
一御衣桁　梨子地御紋蒔絵　一
(朱)「黒塗村梨子地若竹之模様御紋ちらし」
一御耳手洗　梨子地御紋蒔絵　二
(朱)「内一ソハ黒塗御紋笹唐草高蒔絵
一ツハ黒塗村梨子地中高蒔絵」
一御手洗　梨子地御紋蒔絵　一
(朱)「黒塗御紋笹唐草高蒔絵」
一御うかい茶碗　右同断木碗
蓋共　一
(朱)「黒塗村梨子地御紋中高蒔絵」

一御うかい茶碗臺　梨子地御紋
蒔絵　一
(朱)「黒塗御紋笹唐草高蒔絵」
一御湯とう　右同断　一
(朱)「右同断」
一御手拭掛　右同断　三

但銀御手拭押添御上段御寢所

御化粧之間御用

(朱)「内一ソハ黒塗御紋笹唐草高蒔絵
一ツハ黒塗村梨子地御紋中高蒔絵
一ツハ黒塗蠟色御紋中高蒔絵」
一御楊枝箱　右同断　一
(朱)「黒塗御紋笹唐草高蒔絵」
一御火鉢大小　三

内　一臺梨子地唐草蒔絵

二　黒塗蒔絵

(朱)「黒塗蠟色中高蒔絵御紋ちらし
御火箸柄蒔絵同断」

御客座入附

(朱)「御客前之御道具不残伺之通可然候、
但御臺子小道具銀ニ不及候、唐銅」
一御臺子　黒塗蒔絵御小道具共　一飾
一御衣桁　黒塗蒔絵　一
一御手拭掛　右同断　二

但鈴御手拭押添

一御茶筥笥　右同断
御小道具共　一通

一御たはこ盆　右同断御小道具共　二通
一御耳手洗　黒塗蒔絵　一
一御うかい茶碗　右同断
　但木碗蓋共
一御うかい茶碗臺　右同断　一
一御手水手洗　右同断　一通
一御湯とう　右同断　一
一御火鉢　臺黒塗めつき金物　二
一青貝御料紙箱　一通
　但御硯箱共
　御膳所入附
一御掛盤　梨子地御紋蒔絵金具交　一通
（朱）「黒塗村梨子地若竹之模様御紋ちらし」
御本二三迄諸御道具共不残、
（朱）「享保十四年八月二十八日」

2316

吉貴公御譜中
正文在文庫
御札令披見ﾚﾊ、
公方様　大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ﾚﾊ、然
ﾊ先比同氏大隅守儀此度之御禮申上ﾚﾊ處、御懇之
上意、殊御引渡御雑煮御吸物其上　御盃頂戴之、御腰物
拜領、且又於　西丸　大納言様　御目見被　仰付、御懇
之　御諚、御手自御熨斗拜戴之、重疊難有由得其意ﾚﾊ、
依之爲御禮被差越使者ﾚﾊ紙面之趣、各申談及　上聞候、
恐〻謹言、
朱カキ享保十四年八月廿八日　水野和泉守忠之判
松平上總介殿

2317

仝上
御札令披見ﾚﾊ、
公方様　大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ﾚﾊ、然
ﾊ先頃同氏大隅守儀此度之御禮申上ﾚﾊ處、御懇之
上意、殊御引渡御雑煮御吸物其上　御盃頂戴之、御腰物
拜領、且又
大納言様　御目見被仰付、御懇之　御諚、御手自御熨斗
拜戴、重疊難有由得其意ﾚﾊ、依之爲御禮被差越使者ﾚﾊ紙
面之趣及言上ﾚﾊ、恐〻謹言、
朱カキ享保十四年八月廿九日　安藤對馬守信友判
松平上總介殿

2318

仝上

御表へ御使御あけ被成ゟへとも、なを又御念入せられゟ御文のやう、よろしく申上ゟへくゟ、めてかしく、

七月十八日付にて御文下されゟ、

公方様

大納言様ます〳〵御機嫌よく被爲成、御めて度思しめしゟ由、扨は先月廿一日御同氏大隅守様、此度の御禮仰上られゟ處　御前におゐて御懇の　上意、殊ニ御ひき渡御雑煮御吸物そのうへ御盃御頂戴、御腰物御拜領被成、且又西丸へ御出被成ゟ處、

大納言様　御目見　仰付られ、御懇之　上意、御手つから御のし御頂戴、忝思しめしゟよし、めてたくかしく、

朱カキ
享保十四年　　b

松平　上總介様　御返事　人〻申給へ

三室
豐岡
高瀬
外山
おのへ

2319

仝上

有かたく思しめし被成ゟよし、右御禮仰上られゟ御ふミのやうひろふ致しまいらせゟへ共、御念入まいらせられゟ御事、めてたさ御滿足ニ思しめしゟ、なにもよく申せとの御事ニ御さゟ、めてたくかしく、

七月十八日の御ふミ下されゟ、まつ〳〵

公方様

大納言様御機嫌よくならせられ、

一位様御機嫌よくならせられゟ、御心易思しめし被成られゟ、さやうに御座ゟへハ、六月廿一日御同性大隅守殿此度の御禮御登城被成ゟ處、御念比の　上意ニて、御引渡御そうに御吸物其上御盃御ちやうたひ被成、御腰もの御拜領、西之丸へも御禮仰上られゟ處、

大納言様へ御目見へ仰上られ、御手つから御のし御拜領被成、めてたくかしく、

朱カキ
享保十四年　　b

まつ平　上總介さま　御返事　人〻御中

秀小路
梅その
さくらゐ

2320

吉貴公御譜中

嚮是、竹姫君有下可レ嫁二乎繼豐一之　台命上、吉貴在レ國聞レ之、先馳二二階堂行篤於東武一、謝二釣命之辱一、雖レ然復爲レ奉二申謝一焉、遣二島津玄蕃久典于東都一、同年八月二十五日久典詣二元老及若年寄各館一、述下所二含來一之旨趣上奉レ謝レ之、同二十八日應レ徵久典登　レ營、進二呈吉貴之幣物一、奉レ拜二謁吉宗公一、同日登二　西城一、稟二吉貴之謝詞一、同九月二日徵二久典於　江城一、於二檜之間一元老水野和泉守忠之手自授二奉書一、忝拜二惠紗綾三卷于久典一、同月四日登二　西城一、踵伺二候元老安藤對馬守信友之館一、信友手自授二奉書一、越同十二月二十六日久典發二東武一、翌年二月二十六日歸二薩府一復レ命、

2321

継豊公御譜中

正文在文庫

今度　御入輿之儀被　仰出候付、御屋形作之儀御繪圖面を以被仰渡置候、然共右御繪圖ニ　御化粧之間御下段と御座ハ付　御化粧之間共　御上段ニ相調申筈御座ハ、(朱)「御張紙」且又　御寢間御次之間と御座ハ、左ハ得共　御寢間共御寢間上之間御上段、次之間御下段

御上段ニ相調申ニ共及不申事御座候哉、此段奉伺ハ、何分ニ為御差圖被成可被下ハ、以上、右之通たるへく候」

(朱)「享保十四年」九月「二日」　松平大隅守内(基儁)肥後藤之丞

2322

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様　大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、然共今度

竹姫君様御入輿之儀被　仰出之、難有由得其意ハ、依之爲御禮以嶋津玄蕃(久典)目錄之通被獻之ハ、紙面趣令承知ハ、恐々謹言、

(朱カキ)享保十四年九月朔日　戸田山城守忠眞判

松平上總介殿

2323

仝上

御札令披見ハ、

公方様　大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、然共今度　竹姫君様御入輿之儀被仰出之、難有由得其意ハ、

依之爲御禮以嶋津玄蕃目錄之通被獻之ゟ、遂披露ゟ處、御前ゟ被召出之、入念ゟ段御喜色之御事ゟ、恐〻謹言、

九月二日　酒井讃岐守忠音判
松平左近將監乘邑判
水野和泉守忠之判

松平上總介殿

2324

全上

御札令披見ゟ、

公方様　大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ゟ、然ゟ今度

竹姫君様御入輿之儀被　仰出之、難有由得其意ゟ、依之爲御禮以嶋津玄蕃目錄之通被獻之ゟ、遂披露ゟ處、一段之御仕合ゟ、恐〻謹言、

九月三日　安藤對馬守信友判

松平上總介殿

2325

吉貴公御譜中

正文在文庫

返〳〵御表よりも御禮御申上被成ゟへとも、なをまた仰上られゟよし、よろしく申上まいらせゟ、めてたくかしく、

七月十六日付にて御ふミ下されゟ、

公方様　大納言様益御機嫌よく御座なされ、御めてたく覺しめしゟよし、しれはこのたひ（か脱カ）

竹姫君様御入輿の御事仰出され、かたしけなく覺しめしゟよし、それに付、御禮のため御使御さし上なされゟよしにて、御ふミのやうよろしくひろういたしゟへくゟ、めてたくかしく、

b

三室
豐岡
たかせ
外山
尾のえ

まつ平
上總之介様
人〻
申給へ
御返事

2326

吉貴公御譜中

正文在文庫

なを〳〵何もよろしく申上まいらせゝ、かしく、
八月二日付ニて御ふミ下されゝ、
公方様　大納言様益御機けんよく御座なされ、御めてたく覺しめしゝよし、しかれハ
大納言様へ御手まへ様おくさまより、暑寒のけん上物被成、御機けん御うかゝひ被成たきよし、先比御願被成ゝ處ニ、向後
公方様御同様に、けん上もの被成ゝやうにと　仰出され、かたしけなく覺しめしゝとの御事、御禮おほせ上られゝ御ふミのとをり、よろしくひろう致ゝへくゝ、めてたくかしく、

享保十四年（朱カキ）

三室
豐岡
たかせ
とやま
尾のゑ

松たいら
上總介様
御返事
人〻
申給へ

2327
吉貴公御譜中
正文在文庫

なを〳〵御手まへさまにも御ふしの御事に御座被成、めて度思しめしゝ、なにもよく心得ゝて申せとの御事ニ御さゝ、めてたくかしく、
八月五日之御ふミ下されゝ、まつ〳〵
一位様御機嫌よくならせられ、御めてたくおほしめし被成ゝ由、さやうに御座ゝへ共、先のころハ御奥方へ暑氣御尋まし被遊ゝ御事まてニ、御もく錄之通參らせられゝへハ、御手前さまニもきかせられ忝思しめし被成ゝ由、右の御禮仰上られ文のやう披露いたしまいらせゝへハ、御念入參らせられゝ御事ニ思しめしゝ、めて度かしく、

享保十四年（朱カキ）

秀小路
梅園
さくらゐ

松平
上總介さま
御返事
人〻御中

2328
継豊公御譜中
正文在文庫

爲重陽之祝儀小袖一重到來歡覺候、委曲水野和泉守可述ゝ也、

（朱）「享保十四年」九月七日　吉宗公墨印

薩摩少將殿

2329

全上

爲重陽之御祝儀以使者御小袖一重被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐ゝ謹言、

（朱）「享保十四年」九月七日　安藤對馬守信友判

松平大隅守殿

2330

継豊公御譜中

正文在文庫

松平大隅守儀

竹姫君様御入輿被　仰出ゟ付、御茶口切并御肴一種差上可申ゟ哉、松平加賀守様（前田吉徳）・松平陸奥守様（伊達吉村）・松平出羽守様（浅野吉長）・松平安藝守様・上杉彈正大弼様（宗憲）・立花飛彈守様（貞俶）・有馬中務大輔様・丹羽左京太夫様（高寛）・南部修理太夫様（利視）此御方ゝ様より、御茶口切并御肴被成御獻上ゟ由奉及承ゟ、如何様之譯ニゐ被成御獻上來ゟ哉、其儀ゟ相知不申ゟ、依之從大隅守獻上儀奉伺ゟ、以上、

（朱）「享保十四年」九月「七日」　松平大隅守内　堀萬右衛門（貞紀）

（朱）「御張紙」不及差上ゟ、

2331

継豊公御譜中

寫正文在家老座

覺

一益之助様高輪ゟ御引移之儀、又ゟおかく殿（益之助生母、渋谷氏）御國元ゟ被差下ゟ儀付ゐ、去ル御方様ゟ御内談之趣有之、彼御方ゟ御挨拶之趣、且又爰元御治定之次第、去ル七月廿六日飛脚便委細　御意之趣申越ゟ處、

總州様被達　貴聞、右付ゐ段ゝ　總州様思召之趣委細被仰進ゟ付、先月十八日其許被差立ゟ飛脚、去ル五日爰元到着、紙面之趣相達、則御直　太守様達　貴聞ゟ處　總州様思召一ゝ御尤至極之御儀被思召ゟ、依之左之通可被仰付ゟ間、此段可申越旨被　仰出ゟ付、委細之趣左ニ申越ゟ、

一益之助様高輪ゟ御引移之儀ゟ、此涯一往とても御無用ニゟ、

竹姫君様に御對シ如何之儀こけ、追ゐ未

竹姫君様に御目見をも御願被仰上、萬端御親被遊ケ様有之方宜筈御座ケ旨、段々之思召去御方様より被仰聞、其通こ　太守様こ及御落着被成、私共こ及去御方様思召御尤こ奉存ケ付、其段　太守様に及申上、先頃御添地御願之節及　益之助様御幼稚被成御座ケ付、御同屋敷こゐ御生立被成ケ様被成度旨を及、御願書こ被相加ケ、右段々之次第　總州様被聞召、爰元御治定之趣一通り未相聞得候得共、總州様右之儀を御願こ被遊ケハ、　益之助様芝御屋敷に被成御座ケ筋之儀未、被仰上間敷ケ、其譯未段々御添地御願こゐ御拜領被成儀上こ及御厄害之儀、且又被召上候面々及迷惑存筈之儀こケ得未　益之助様御同屋敷に被成御座ケ筋之儀未、御差扣　姫君様御屋形作付ゐ御差支之譯を以、御添地御願之儀未可被　仰上と被思召候付　益之助様こ未高輪に御移、おかく殿こ未御國元に下り之筋こ被成思召こゐケ、最早右付ゐ未爲相濟事こゐ、無詮事ケ得共　總州様こ未右之通被　思召御事ケ故　思召迄之事を被仰進事ケ旨　御意之趣被申越、私共奉承知　太守様に申上ケ處、御尤至極被思召ケ、右　總州様思召之筋こ未御心付及不被成御座、去御方様こ未專　公邊之儀も平日御取扱被成事ケ得未、段々分ゐ　思召寄被仰ケ處、高輪に御引移被成ケ筋こ被遊ケゐ、萬一　姫君様御入興を御よけ被成ケゐ、御引移なと丶御沙汰も有之候ゐ未如何之御事ケ、只今迄

公義向萬端御首尾能、御願事其外之儀も無御滯、每物此御方　思召寄及首尾好相濟ケ處、萬一　上こゐ及御沙汰儀共有之ケゐ未、別ゐ御氣之毒こ被　思召ケ譯迄を以、去御方様　思召こ被任ケ處、此節右之通分ゐ

總州様思召寄之儀被仰進ケゐ社、其通こ被遊ケ未、第一　總州様思召こ及御叶、前後御首尾宜筈ケ處、早竟右　思召之儀　御心付無之、今更御氣之毒こ　思召ケ、依之今度之儀不限此儀　公邊こ相懸り重キ御用筋計こゐケ得共、御用之時々　總州様に御相談及被遊ケ上、何れ之筋と、御落着被成度御事のミ有之ケ得共、其段未往返及有之不叶儀こケ故、此御方こゐ難被決儀未、

讃岐守様・壹岐守様・去御方様抔に被仰談

公義向御首尾宜筋こ被取計御事御座ケ、　益之助様高輪に御移り之儀　總州様右之　思召ケ得未、只今右こゐ及　思召之通被成度被　思召ケ得共、最早此儀未御

願も被爲立、爲相濟事ハへ共、御氣之毒なから、當分之通ニ被遊外御存寄無御座ハ旨

御意ハ、私共ニ茂　總州様此節被仰進ハ思召之筋ニ、少茂心寄不申　御意と承知仕ハ而社、御尤と奉存事御座ハ、

一於かく殿下り之儀付而茂、段々被仰進趣有之、此儀ハ太守様ニ茂御幸ニ被　思召ハ、然共　大御前様御召仕之女中之筋ニ而、御實母之御沙汰なしニ御手形等相濟ハ筋ニ有之様被遊可然ハ、此儀ハ去御方様抔ハも御家老中ゟ御内談仕ハ様ニと、最前木村四郎左衞門ニ而思召之程被仰越ハ譯茂御座ハ付、其通可致旨被仰出、去御方様ハ御内談申上ハ處、去年　益之助様御誕生之節、御妾腹御男子御出生之段御届茂有之、御實母御當地ハ被爲居ハ儀ハ　公義ハ茂爲相知事候處、御實母之御沙汰なしニ御國元ハ被爲越ハ様ニハ、曾而不罷成事ハ、　益之助様御實母此度御國元ハ被遣度旨、屹御願茂不被相立ハ得ハ不罷成筈ハ、此砌何そ故茂無之、右躰之御願被仰上ハ儀

上之　思召茂如何ニハ、　益之助様御幼少ニハ得ハ、被附置御養育有之ハ様被遊度と、御願を茂可被相立筈ハ處、御國許ハ可被遣との儀ハ、差當可申儀ニハ旨、段々　思召寄被仰ハ付、是又　太守様被聞召、右付而ハ私共ニ茂、去御方様思召御尤奉存ハ付、先此涯おかく殿被差下ハ儀ハ、御差扣可被遊儀と申談、其趣達貴聞、去御方様思召之通ニ被遊筈ハ、乍此上　思召寄も御座ハハヽ、幾度茂被仰進候様ニと　御意之趣申越ハ得ハ　總州様被達　貴聞ハ處、右付而　御意ハハ、去御方様ハ御相談も有之候様ニと、四郎左衞門ハ　御意被遊ハ儀ハ、おかく殿下り付而ハ御手形等、且又右付而御願様之儀共を可及御相談かと　御意爲被遊事ハ、おかく殿下り付而ハ、屹御老中様ニ御届ニハ不及方ニ可有之かと被　思召ハ、御手形等之儀ハ、御留守居御方ニ而相濟事ハ故、右之通思召ハ、然共此段ハ爰元ニ而專吟味茂可有之事ハ得ハ、其御方ゟ究而此筋とハ難被仰進ハニ付、ケ様之儀共御相談も可有之儀かと被思召、被仰進ハ、此段分而四郎左衞門ハ爲被仰付儀ニハ無之、御相談ニ茂可及かと爲被仰進事ハ得共　思召ハ右之通ハ、去御方様ニ茂御書出シ抔之御案文等ニ付而ハ、被仰通ニ可有之事ハ、被仰ハ事毎ニ付、皆々其通宜筋と申程ニハ有之間敷儀と、被　思召ハ、おかく

殿下り之儀、中務・四郎左衛門は　御意被遊ゟ思召ス、左之趣之　思召を以下り有之ゟ様ニと　御意爲被遊事ゟ、上ツかた下々ニ至り、妾有之儀ス本妻ニス別ゐ不悦事ゟへス、おかく殿同御屋敷は被差置事ス　姫君様ニ及御快無之筈之事と被　思召ゟ、以前ニ及　智性院（光久女）様御事　陽和院（光久継室）様御猶子ニ被遊ゟゐより　智性院様御袋ニス一向御對面不被遊　陽和院様を　智性院様ニ及御實母様と被思召居、御成人ゟゐ右之譯被聞召御存爲被成事ゟ、早竟御同屋敷は御實母被差置ゟ儀ス　姫君様は御無禮之儀と被　思召ゟ付　益之助様ニ及高輪は御移り、おかく殿ニ及御國元は被遣、芝御屋敷は姫君様御方相勤ゟ女中迄ニゐ、外ニ女中不被差置様有之方可宜事と被　思召ゟ、他御屋敷御國元ニゐゟ得ス、御妾腹ニ御子様御誕生と申ゟゐ及、不苦筈ゟ得共　御入輿二三年及不過内、御同屋敷ニゐ御妾腹ニ御子様御誕生と申ゟ儀ス、御遠慮及可有之事と被　思召ゟ付、右之通御意爲被遊事ゟ、弥おかく殿事芝御屋敷は被差置、其元は下り無之筈ゟハ、　益之助様御部屋・おかく殿部屋

太守様御方御家續無之様、格別ニ作りはなし被差置ゟ様ニ有之可然事ゟ、尤おかく殿事、乍此上御國元は被遣ゟ様ニと、強ゐ被仰進儀ニゐス無之ゟ　思召寄之儀付ゐス、幾度及被仰進ゟ様ニと　御意之趣先比委細申越ゟ付ゐ、右之通　總州様　思召之趣ス被仰進事ゟ旨、一々

太守様は申上候、右付ゐ　御意ゟス　總州様段々之思召、分ゐ被仰進趣御尤至極被　思召ゟ、早竟去御方様　思召之趣付ゐ、其通御治定有之ゟ、然共彼御方被仰ゟ儀、事毎ニ皆々其通宜筋と申程ニス有之間敷と、被　思召ゟ旨を及被仰進、御尤　思召ゟ、左ゟ得ス最前御相談之砌、此節　總州様より被仰進ゟ筋之儀を、強ゐ御挨拶被成、何れ之筋ニ及おかく殿ス被差下筈ニ御治定可有之儀ゟ處、右之儀ニス　御心付及無御座、去御方様段々分ゐ思召被仰進ゟ儀迄を御用ヒ被成ゟ儀、早竟　太守様思召事足不申儀と、今更御存知被當ゟ、右之次第ニゟ得ス、何れおかく殿御當地へ被差置ゟ儀ス不宜筈ゟ、然共何之故及無之被差下ゟ様ニ及可難被成ゟ、兎角　大御前様御召仕之女中之筋ニゐ、御手形等相濟ゟ様ニス不罷成、御實母之儀不被仰出ゟ得ス、決ゐ不罷成筋ニ、去御方様ニ及先頃御内談之節爲被仰

儀ニハ、依之、先年　於須磨様（繼豊生母名越氏）御國元ニ御引越之節之御帳面等御見合有之ハ處　於須磨様殿文字御用ヒ之内太守様御實母御國元ニ被遣度旨、御老中様ニ被相伺、御勝手次第と被仰渡、其以後御手形等相濟ハ旨、書留相見得ハ、然ハ於須磨様其節之御取持ハ、當分之おかく殿御取持、御内々ハ格別輕く御座ハへ共　公義向ニ被押出ハ有ハ、御實母と申筋ハ同前之筈ハ、左ハ得ハ、何れ去御方様最前被仰ハ通、御老中様ニ御屆無之候ハ不叶筈ハ間、おかく殿兼ハ身弱、持病ニ痞抔ハ有之ハ、爰元ニハ段々保養有之候得共、寸切と全快ハ無之時ハ再發難儀被致ハ、御國元ハ泉湯之場所ハ多々有之、歩行抔ハ自由ニ罷成ハ間、爲保養此度御國元ニ可被差越趣ニハ、御屆被仰上可被差下ハ、少々難成所迄ハ強ハ被仰立可被差下ハ、乍其上萬々一此度被差下ハ難成候ハ、外ニ可被仰付筋ハ無御座ハ間、高輪御屋敷ニ被召移、四郎左衛門ニハ　總州様より被仰進ハ通、有か無か之躰ニハ、隨分手細ニ部屋作等被仰付可被差置ハ、此儀最前　總州様思召之通ニ御落着被成、右之通ニ其節御治定ハ、何かと　總州様御心世話ハ不被遊筈ニハ得共、去御方様思召ニ被任ハ故御延引ニ罷成、今更太守様ニハ御氣之毒ニ被　思召ハ得共、右躰之儀付ハ、ハ　公邊之儀御存不被遊儀ニハ得ハ、何事ハ先去御方様ニハ被遂御内談事ハ付、其通被仰談ハ處、彼御方思召と　總州様思召とハ相違之筋ニハ、殊更姫君様ニハ被對　總州様思召御厚ク御座ハ得ハ、少々上之御滯ハ無御構、是非最初ハ被差下積りニ御治定可有之儀を、此度右之通ニ御落着被成ハ儀ハ、遲成たる様　思召ハ可有之ハ得共、早竟此度之儀ハ御伺事も多々有之、御老中様又ハ御留守居様よりハ、毎度御用筋被仰渡、何事も無御滯御首尾能相濟ハ處、右之儀若被仰出、去御方様思召之通、萬一相滯ハ儀共御座ハハ、却ハ如何之儀と被　思召ハ御事迄ニハ御延引被成、其趣爲被仰進事ハ、尤おかく殿下り之儀御屆等被仰出ハ儀付ハ、去御方様へ御内談被成、是非　思召之通相調ハ筋ニ被仰達、御案文等御調、乍其上讃岐守様・壹岐守様ニハ被遂御内談、首尾能相濟ハ様可被遊旨　御意承知仕ハ、右段々之儀付ハ　總州様思召之趣、私共ニハ承知仕御尤至極奉存ハ、早竟ケ様成儀付ハ　公邊之儀私共ニハ無切故、去御方様思召ニ御同意仕、其趣　大守様ニハ申上ハ之段ハ、別ハ事不足儀と今更存

當申ハ、

一益之助様御部屋　太守様御方御家續ニゐ無之様、格別作はなし御座被遊ハ様ニと　思召ハ旨申上ハ處、弥以其通可被仰付旨　御意ハ、然ハ芝御奥之儀（繼豐室、毛利氏）瑞仙院様御逝去以後、去年御留守中、御化粧之間・御休息所又ハ以前ゟ有之ハ御書院御上段・御下段を初、左右之御縁頰・御三之間、其外右ニ相付ハ御座不殘解こわされ、當分ハ本之三之間之跡ニ、御座一流ニ御作事有之、外ニ差立候御座ゑ無御座　益之助様ニハ　太守様御若年之節被成御座候御部屋ニ被成御座、おかく殿ハ以前岡村罷居ハ部屋ニ被相栖、右部屋之上ニ　益之助様御誕生之節、御産所爲被相調迄之儀ニハ、左ハゐ、此節益之助様、當御屋敷ハ御一所ニ被成御座ハ様被遊度旨、被仰出ハ付ゐハ、御敷臺・御廣間・上使座・御簡所其外納殿・御末向部屋方不殘取細メられ、御醫師衆御見廻之節、又ハ　御入輿以後　姫君様より、女中御使抔被進ハ節ハ、右御奥一流之御座末ニゐ　御對面有之ハ得ハ、先此涯ハ乍御手狹御用不差支、尤何ぞ御物入之儀ゑ無之筈ハ故、其通御治定有之ハ得共、格別ニ　益之助様御部屋作はなし被仰付ハ様、被仰進ハ付ゐ、是又御尤之御儀ニハ付、當分　益之助様御部屋を始、其外之御家、早速解こはし御作替被仰付、尤　太守様御方御家續ニゐ無之様、御栖居出來之筈御座ハ、勿論早速四郎左衛門ニゐ被仰進ハ通　太守様御方女中又ハ御中奥抔と申儀ハ、曽ゐ不被仰付　思召候、　益之助様當御屋敷ハ被成御座ハ付ゐハ、御守之女中其外御用相達ハ程之人數迄を被召置筈ハ、尤おかく殿下り付ゐハ、御國より罷上り居ハ女中抔、御見合を以被召付可被差下ハ、表御局事ゑ　益之助様ハ被召附置ハ、御入輿以後　御守殿ハ　太守様時々御入之節ハ　太守様御方御局ハ　御入度毎ニ御供ニ被召列、被召上物等之節ハ、時々御側ハ不相詰ハゐハ不罷成筈ハ旨、此程秀小路様よりも、委細御噂之趣有之ハ、然ハ　益之助様御方御部屋、格別ニ御作はなし候ゐハ、御局事　太守様御守殿ハ御入之度毎ニ、外より時々罷出、御供仕筈ハ、ケ様成儀ニ付ゐハ、依時宜廻り遠可有之ハ得共、段々思召寄爲被仰進儀ニハ故、左様成儀ハ成ミニゐ、御部屋解こわし等之儀、早速被仰付御事ハ、且又　御入輿付ゐハ、同御屋敷ニゐ御妾腹ニ御子様御出生と申儀ハ、御遠慮可有之儀と被　思召ハ段、專被仰進御承知被成

け、右之通おかく殿被差下事け得ハ、以後御妾腹ニ御子様御出生之儀無之筈け、先比四郎左衛門ニて、段々被仰進け　御意之内、御當地之儀ハ、外向ハ公方様ハ御奉公、御内々ハ　竹姫君様へ御奉公と被思召究、都て御勤と御落着被成け様ニと被仰進、御尤至極之御儀ニ被思召、其節御請ヲ爲被仰上置儀ニ御座け、弥其通御心得被遊御座け間、此段ヲ申上け様ニと　御意承知仕け、

一おかく殿被差下儀ハ近日被仰出筈け、左けて、十月中爰元可被差立旨被仰出け、右付て先頃大藏殿ヲ被申越け趣ヲ有之付て、專其元　御本丸・御奥栖居所等之儀付て、御考ヲ可有之と存け、おかく殿下り付て、其元ヲ迎之人數被差越ニ不及け、此御方奥向詰之人數　御入輿付て被殘置け間、先此人數を相應ニ被召付可被差下け、

右之通段々　御意承知仕け、御屆ヲ相濟け、追て早々可申越け得共、おかく殿下り之儀付て　御本丸・御奥御手當之儀ヲ、前以可被仰付儀ニけ、右付て、先頃於須磨様御意之趣大藏殿ヲ被申越け段々之譯ヲ候故、態と飛脚を以申越け筋ニヲ可有之哉と申談、達　貴聞け處、弥以飛脚ニて申越け様ニと被仰出け付、極急キ飛脚を以申越け、且又右段々之次第ハ、主計殿より被申越け得共　總州様　お須磨様ニも被申上儀け故、各連名ニて申越け筋相伺、其通被仰出け付、申越事け間、右之次第

總州様　お須磨様ハ可被申上け、以上、

（朱）「享保十四年」九月九日　　平岡内匠
　　伊集院藏人
　　嶋津中務

嶋津大藏殿
樺山主計殿
比志嶋隼人殿

追啓、おかく殿下り付て、乘船等之儀其元ヲ被差越け、若相違罷成け、當時之時節御物入之事ニけ、殊更冬向ニ相懸りけ間、中國・小倉筋可被差越旨被　仰出け條、迎船等之儀手當ニ不及け、且又村路事ハ、最早疾ニ爲被差立ニて可有之候、おかく殿下り付て、表御局一人ニて相勤、外ニ御年寄も無之け、

御入輿以後ハ、御局ヲ時々　御守殿ハ　太守様御供

致等け、左け得ゑ別ゐ差支等け間、若出足延引被仰付置け ハ、、早ゝ被召立け様　お須磨様ゟ可被申上旨　御意け、以上、

2332

吉貴公御譜中
正文在文庫

御札令披見け、

公方様　大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤け、將又今度同氏大隅守、芝居屋敷北之方新馬場并町屋添屋敷拜領之、難有由得其意け、紙面之趣各一覧事け、恐ゝ謹言、

享保十四年九月十三日　酒井讃岐守忠音判

松平上總介殿

2333

全上

御札令披見け、

公方様　大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤け、將又今度同氏大隅守、芝居屋鋪北之方新馬場并町屋添屋敷拜領之、難有由得其意け、紙面趣令承知候、恐ゝ謹言、

享保十四年九月十三日　安藤對馬守信友判

松平上總介殿

2334

吉貴公御譜中
正文在文庫

なを〳〵御おもてより御禮御申上被成けへとも、なを又仰上られけ、かしく、何もよろしく申上けへくけ、めてたくかしく、

八月九日付にて、御ふミ下されけ、

公方様　大納言様益御機嫌よく御座なされ、御めてたく覺しめしけよし、しかれゑ御同氏大すミの守様、しは御やしき北のかた新馬場并に町屋御そへやしき御はい領なされ、かたしけなく覺しめしけよし、それニ付御ふミのやう、よろしくひろういたしまいらせけへくけ、めてたくかしく、

享保十四年

三室
豐岡
たかせ
外山
尾のえ

まつ平
上總之介様
人ゝ申給へ
御返事

2335

吉貴公御譜中

正文在文庫

なを〳〵御手まへさまにも御ふしの御事ニ御座被成、めて度思しめし、なにもよく心(ママ)ゆて申せとの御事ニ御さゆ、めてたくかしく、

八月九日之御ふミ下されゆ、まつ〳〵

公方様　大納言様御機嫌よくならせられ　一位様御機嫌よく成らせられゆ、御心易思召被成まいらせゆ、さやうに御座ゆへハ、大隅守殿芝御屋しき北之方新馬場并町屋そへ御拜領被成ゆ御事、御手まへさまニも御聞被成、有かたく思しめし被成ゆ由、御禮仰上られ、御ふミのやう披露いたしまいらせゆへ共、數〻御滿足さ、御念入まいらせられゆ御事ニ思しめしゆ、めて度かしく、

享保十四年(朱カキ)　　ゟ

松平　　秀小路

上總介さま　御返事　　梅園

人〻御中　　櫻井

2336

継豊公御譜中

正文在文庫

明十五日例月之御禮無之ゆ間、不及登　城ゆ、以上、

「享保十四年」(朱)九月十四日　　酒井讃岐守

松平左近將監

水野和泉守

松平大隅守殿

(朱)「在口裏」松平大隅守家來江口上ニ而申聞趣

2337

正文在文庫

此度被申付ゆ御守殿之事、御座所并御寢間計共、地震等之事もゆ間、土瓦ニハ如何存ゆ、こけらふきに被申付ゆ共、火之用心ニ共如何ニゆ間、右御座所と御寢間計共、銅瓦ニ被申付ゐ共可然ゆ、尤其取合之廊下其外共、土瓦ニゐ不苦ゆ、且又繪之間等ニ被申付ゆ儀、加賀守方之趣等被承合ゆゐ、其通りニ被仕ニも不及ゆ、御座所上段・下段・二之間計繪之間ニ被申付、是以餘り結構ニ無之樣大概ニ被申付、其外ハ繪之間等ニ不及ゆ間、其心得被申付ゆ樣ニと存ゆ、

「享保十四年九月十四日」(朱)

「右之通松平左近將監樣御用人奥村又左衞門口達ニ而、相良

彌一兵衛江申聞ル旨、彌一兵衛申出ル」

2338

吉貴公御譜中

同十二月十一日繼豐尚ス竹姫君於芝宅守殿ニ、以故同月十五日阿部伊勢守正福代ニ吉貴ニ登營、拜ニ謁吉宗公ニ、獻ニ上御太刀一腰（来国秀）・御刀一腰（二字国俊）・御脇刀一腰（行光）・縮緬二十巻・綿五十把・馬代金十枚ニ、奉レ謝ニ繼豐整ニ婚儀ニ、

公亦賀ニ賜御脇刀一腰（来国光）於吉貴ニ、即日正福又代ニ吉貴ニ登ニ西城ニ、獻ニ御太刀一腰（備前家助）・縮緬二十巻・綿三十把・馬代金五枚于儲君家重公ニ、奉レ謝レ整ニ婚儀ニ也、

2339

繼豐公御譜中

正文在文庫

竹姫君様御入輿相濟御禮申上ル節獻上物御書附之内

公方様ヲ

眞御太刀代金十枚

白銀百枚

（朱）「御張紙　絹之代りニ

巻物三十

白糸百斤可被差上候」

絹五十疋

松平大隅守

大納言様ヲ

眞御太刀代金七枚

白銀五十枚

（朱）「御張紙

巻物二十

絹之代ニ白糸六十斤可被差上候」

絹三十疋

同人

一位様ヲ

黄金三枚

（朱）「御張紙　絹之代りニ

絹十疋

白糸弐十斤可被差上候」

三種二荷

松平上總介

右之内絹可差上旨奉畏ル、先年松姫君様松平加賀守様ヲ　御入輿相濟御禮被仰上ル節、絹御上ケ被成ル由奉承知ル、是ハ御國許之御産物之絹と奉存ル、大隅守國元ハ絹無御座ル付、何方之絹爲織差上可申ル哉、獻上之儀御座ル得ハ、爲織候ヲ差上申事御座ル條、羽二重差上ル方ハ如何可有御座ル哉、白糸之儀ハ琉球口より及相渡、京都屋敷ヲ差越置、いつも有之事ル故、直に其糸を以織調差上候得ハ、此方産物之積ニ及御座ル間、此段各様ヲ御内談仕ル様ニと、申付ル付參上仕ル、以上、

2340

(朱)「享保十四年」九月「十六日」　松平大隅守内　相良彌一兵衛(長)(主)

全上

(朱)「在口裏」　(新番頭)　(常春)

此御書付ハ、小笠原平兵衛様より

姫君様御裝束付御見せ、夫ニ準

御調方相濟ハ、十二月二日朝、

御待上臈之節裝束

一上着　幸ひし白綾

一あい着　白ねり

一帶　幸ひし白綾

御色直裝束

一上着　幸ひし紅綾

一あい着　紅ゆるし

一帶　幸ひし紅綾

右之通御座ハ、以上、

(朱)「享保十四年」九月十六日

2341

全上

御婚禮之節御召

一白あや幸菱　御裏白

一白ねりの御小袖　御裏白

一式正の御帶　白あや

一白ねり御かつき　御裏すゝし

御色直し御召

一紅あや幸菱　御裏紅

一かうはいの御小袖　御裏紅

一式正の御帶　紅あや

一りんす地くろ紅　御裏紅

すぬひ松竹龜

右之通御座候、

(朱)「享保十四年九月十七日」

2342

全上正文在琉球國國司

爲年頭之嘉儀被差渡使簡、殊目錄之表送給之、入念ハ段

令祝着ハ、猶期後喜之時ハ、恐惶不宣、

(朱)「享保十四年」九月十八日　少將繼豐御判

謹上　中山王

2343

全上

芳墨令披見ゟ、益之助誕生付ゐ、以天願親方太刀一腰・馬代黄金十兩并如目錄被相贈之、欣然之至ゟ、恐惶不宣、

（朱）「享保十四年」九月十八日　少將繼豐御判

謹上　中山王

2344

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ゟ、

公方様　大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ゟ、將又同氏大隅守、芝居屋敷最前被添下ゟ屋敷之外、願之通添屋敷拜領之、難有由得其意ゟ、紙面之趣各一覽之事ゟ、恐々謹言、

朱カキ享保十四年九月十八日　酒井讃岐守忠音判

松平上總介殿

2345

仝上

御札令披見ゟ、

公方様　大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ゟ、將又同氏大隅守芝居屋鋪、最前被添下候屋鋪之外、願之通添屋敷拜領之、難有由得其意ゟ、紙面趣令承知ゟ、恐々謹言、

朱カキ享保十四年九月十九日　安藤對馬守信友判

松平上總介殿

2346

吉貴公御譜中

正文在文庫

返〳〵おもて向より御禮御申上被成ゟへとも、なを又御申上被成ゟよし、よろしく申上ゟへくゟ、めてたくかしく、

八月十八日付にて御ふミ下されゟ、

公方様　大納言様益御機嫌よく御座なされ、御めてたく覺しめしゟ□闕、しかれは御同氏大すミの守様（芝）しは御居やしき、此ほと御添地御はい領被成ゟ所ニ、また〳〵右の外、御添地御ねかい之通御はい領なされ、有かたく覺しめしゟよし、右の御禮御申上被成たく覺しめしゟよし、御ふミのやうよろしくひろういたしまいらせゟ、めてたくかしく、

朱カキ享保十四年

ゟ

まつ平
上總之介様
人〻申給へ
御返事

三室
豊岡
たかせ
外山
尾のえ

2347

吉貴公御譜中
正文在文庫

おほせ上られ文のやうひろういたしまいらせけへハ、かす〳〵めて度御満そくニ思しめしけ、御手前さまにも御ふしの御事、めて度思しめしけ、なを〳〵御禮仰上られ、御念入參らせられけ御事ニ思しめしけ、何もよく御心得申せとの御事ニ御座け、めてたくかしく、

八月十八日之御ふミ下されけ、まつ〳〵

公方様　大納言様

一位様御機嫌よくならせられ、めてたく思しめし被成け由、さては御同氏大隅守殿芝居屋しき、此ほと添御拜領之御屋しきの外、御願之通御添やしき、その上添地御はい領被成け御事、御手前さまニも有かたく思しめし被成けよし、御禮、めてたくかしく、

享保十四年朱カキ

まつ平
上總介さま
人〻御中
御返事

秀小路
梅園
櫻井

2348

吉貴公御譜中
正文在文庫

なを〳〵御しう義おほせ上られ、御念入られけ御事、かす〳〵御満そくニ思しめしけ、御てまへさまにも御ふしの御事、めて度思しめしけ、何もよく御心得申せとの御事ニ御座け、めてかしく、

八月十八日の御ふミ下されけ、まつ〳〵

一位様御機嫌よくならせられ、めてたく思しめし被成け由、さては此たひ京都ニて　律君様御事、大學守御門跡御相續　仰出され

一位様かす〳〵御満足ニ思しめし、右之御祝義御目錄之通

一位様へ御あけ被成、ひろういたしまいらせけへハ、御満そくニ思しめしけ、めてたくかしく、

享保十四年（朱カキ）

まつ平
上總介さま　御返事
人々御中

秀小路
梅その
さくらい

b

継豊公御譜中

嚮レ是、繼豐有下結二婚姻於竹姫君一以二今歳暮一可レ修二大禮於芝守殿一之　台命上、是故繼豐榮レ賜二　嘉命一、擬二襲統任官之先蹤一命二幣使一、今茲享保十四己酉歳九月十一日、以二各白銀二十兩一於二薩府一寄二進正一位諏方大明神・正一位稲荷大明神・祇園天王・春日大明神・若宮八幡宮各神靈一（町田宇右衛門久芳、代二継豊一勤レ之）　同日獻二納御太刀一腰・御馬代銀三枚于大雄山

東照宮神靈一、以二各白銀三枚一於二南泉院一獻二納

台德院殿

大猷院殿

嚴有院殿

常憲院殿

文昭院殿

有章院殿之尊牌一（島津又七久因同上）、獻下納白銀二十兩于二福箇迫諏方大明神一、白銀一枚于二不斷光院清揚院殿一（種子島四郎助時春同レ上）、白銀十枚于二滿家院花尾權現宮一（島津周防久儔同レ上）、白銀二枚于二淨光明寺當家五代之靈牌一、青銅三百匹于中本立寺（上島津左衛門久林同レ上）、以二各白銀二枚一進下納于福昌寺中寛陽院（光久）殿・陽和院（光久継室）殿・大玄院（貫久）殿・深固院（忠國）殿大岳玄譽（島津求馬久芳同上）、進下納白銀二枚于二南林寺殿大中良等（貫久）庵主一（入来院主馬明審同レ上）、各白銀二枚于中妙谷寺殿貫（義久）明存忠庵主・隆盛院（忠隆）殿興岳隆盛・大翁妙蓮（勝久）（新納右衛門久春同上）、以二各白銀二枚一進二納于興國寺殿圓室源鑒（忠昌）・持明彭窓（喜入主膳久甫同レ上）、（久保）進二納白銀二枚于皇德寺殿一唯恕參一（町田郷九郎久儔同上）、同月二十三日以二各白銀二十兩一進二納隅州嚼唹郡霧島權現、同二十五日同國正八幡宮一、同二十七日進下納白銀二枚于二薩州吉田津友寺殿蘭窓津友一（伊勢兵部貞起同レ上）、同日白銀二十兩于二顯娃枚聞社一、白銀二十兩于二出水加紫久利大明神一・同二十七日各白銀二枚于二加世田日新寺梅岳常潤在家菩薩一（新納右衛門久春同上）・同二十八日于中水引新田宮隈之城稱名寺定山道貞、閏九月朔日市來龍雲寺節山玄忠、同月三日伊集院妙圓寺松齡自貞庵主（種子島四郎助時春同上）、同月六日進下納白銀二十兩于二日州加久藤二之宮一（町田宇右衛門久芳同上）・白銀二十兩于二同國住吉大明神一・白銀二枚于中志布志即心院齡岳玄久（島津石見久珍同上）、所以敬二愼重正大禮一也、

2350

仝御譜中

正文在文庫

島津但馬守參府之儀、先達ゐ奉願ゟ通ニ被　仰付ゟニ付、

（朱）「御張紙」

十月中旬比御當地ゟ着仕積御座ゟ、就夫參府之御禮被

定式參府之通可被心得候」

仰付儀ニ御座ゟ哉、左ゟ者定式參勤之通

御目見之儀奉願

公方様　大納言様ゟ獻上物可仕と奉存ゟ、御暇中參府仕

ゟ故此段奉伺ゟ、以上、

（朱）「享保十四年」九月「二十三日」　松平大隅守内

相良彌一兵衛

2351

（朱）「雜抄中」

高持成願御格式之事

一外城養子之儀、三代目ゟ五拾石之節ニゐ者不及伺ゟ間、

高奉行承屆、御格式ヲ以相調（シラヘ）、高直ゟ様可仕ゟ、御規

帳ニ為右之譯張紙ニゐ記置ゟ様、享保十四酉九月被定

置ゟ事、

2352

吉貴公御譜中

扣正文在右筆所

口上覺

同氏上總介儀病氣疎と無御座候付、參府難仕之段、去午

冬從私以使札申上ゟ之處、御用捨被下、緩々致保養難有

仕合奉存ゟ、然者此度

竹姫君様御縁組被　仰出ゟ付、御入輿以前參府仕、右之

御禮を為申上

竹姫君様ゟ御目見為仕度所存御座ゟ得共、今以氣分相勝

不申、度々眩暈差發難儀仕候、只今之様子ニゐ者參府可

仕躰無御座、此節御斷申上ゟ段、上總介別ゐ迷惑至極奉

存ゟ、此上得と致養生病氣快方罷成ゟ節、參府相伺候様

仕度奉存旨、從國許以使札申上ゟ付、此段從私為申上ゟ、

宜様奉頼ゟ、以上、

享保十四年（朱カキ）閏九月三日

2353

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ゟ、

公方様　大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ゟ、然

者今度

竹姫君様同氏大隅守ゟ御縁組被　仰出ゟ付ゐ　御入輿以

前參府有之ゐ　御目見被致度被存ゟ得共、今以病氣不相

勝、難被致參府ハ、病氣快ハ節參府之儀被相伺度旨、委細被申越之趣令承知ハ、依之被差越使者ハ紙面之通、各一覽之事ハ、恐〻謹言、

享保十四年閏九月四日　　松平左近將監乘邑判

松平上總介殿

2354

仝上

御札令披見ハ、

公方様　大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、然ハ今度

竹姫君様　同氏大隅守ニ御縁組被仰出ハ付ヲ　御入輿以前參府有之ヲ　御目見被致度被存ハ得共、今以病氣不相勝、難被致參府ハ、病氣快ハ節參府之儀被相伺度之旨、委細被申越之趣令承知ハ、依之被差越使者ハ紙面之通承屈ハ、恐〻謹言、

享保十四年閏九月四日　　戸田山城守忠眞判

松平上總介殿

2355

繼豐公御譜中

同年閏九月五日、先レ是所レ賜之副地始ニ經營之事一（家臣有馬刑部純庸勤二鍬初之作法一）、自レ是起二丁夫一、運二斧斤一、同十一月二十七日守殿新成、諸宇全造畢（家臣純庸為下初入二水火新營一、同日繼豐自二西裏門一出而拋通二守殿大門一（繼豐著服隨從人數同二、直至二守殿一、之機上修二御館鎮定之法一）本宅表門初通之時一矣）、祝下拋入二新殿一之慶喜上、

2356

仝上

寫正文在文庫

竹姫君様御入輿之節

御輿請取　　島津但馬守（忠雅）

御貝桶請取　　代　鳥居丹波守（忠利）

御迎　　代　松平備前守

阿部伊勢守

堀田出羽守

御入輿以後御機嫌之儀御屈　　松平備前守

但備前守御貝桶請取本人ニ成ハ、

酒井右京亮

松平筑後守

柳生𨌲負

（朱）「御張紙」
右三人之内こゐ、御入輿以後御機嫌之儀御屆、
右伺之通たるへく候」
右之通相勤可申哉奉伺ハ、以上、
（朱）「享保十四年」閏九月「十三日」　松平大隅守

（朱）
「右書付閏九月十三日、小野次郎右衛門（忠）様ニ而松平左近將監様江被差出ハ、
但右本文、御輿御受取并御貝桶御受取之御方様、御差支も有之御動難被成節者、段々御繰上ケ備前守様御動被成筈ハ、則左近將監様江御屆被仰上ハ様可仕旨、次郎右衛門様ゟ中務江御直ニ致承知ハ、
一右付而閏九月十八日、左近將監様御用人ゟ御留守居一人可罷出旨申來ハ付、堀萬右衛門（貞紀）罷出ハ處、右御張紙之通被仰渡、御用人奥村又左衛門を以御渡被成ハ旨、萬右衛門申出ハ事」

2357
仝上
竹姫君様御入輿相濟御禮申上ハ節
（朱）「御張紙
令承知候」
松平上總介名代
阿部伊勢守
右差出可申ハ、兼ゐ御聞置可被下ハ、以上、
（朱）
「享保十四年」閏九月十三日

2358
継豊公御譜中
正文在文庫
（朱）「在口裏」
松平大隅守ハ
竹姫君様ハ御入輿之當日獻上物
白銀貳拾枚
綿貳拾把　松平上總介
三種二荷
綿貳拾把　益之助
二種一荷
同斷　上總介　内室
巻物五
二種一荷　御待上臈　阿部伊勢守妻
右之通可被差上ハ、但上總介よりハ當地ニ詰合ハ家老を以可被差上ハ、御入輿相濟ハ段承知之上、爲御祝儀從國許使者被差越ハ儀者、可爲勝手次第ハ、以上、
（朱）
「享保十四年」閏九月「十八日」

2359
継豊公御譜中
正文在文庫
一御輿御請取之御方
但かちん熨斗目子持筋同色子持筋長袴

一御貝桶御請取之御方
　但右同斷
一御迎之御方
　但かちん熨斗目同色半袴
一御入輿之節御機嫌之儀御屆之御方
　但右同斷
(朱)「御張紙　承置候」
右者　御入輿之節、御勤役之御方衣服之儀、右之通相心得罷在ル、此段申上置ル樣、大隅守申付ル、以上、
(朱)「享保十四年」閏九月「二十四日」　松平大隅守内　堀萬右衛門(貞紀)

2360

全上
御入輿翌日五百八十之餅、家老以使者獻上可仕旨被仰渡候、右使者衣服、かちん子持筋熨斗目・同色子持筋長袴着用仕ル可有御座ル、加賀守樣御方承合ル處、右之衣服着用仕ル由承申ル付、此段可申上置旨大隅守申付候、以上、
(朱)「享保十四年」閏九月「二十四日」　松平大隅守内　堀萬右衛門

2361

全上

一竹姫君樣御入輿前、御道具被差越ル初日より終迄三ケ日、衣服かちん熨斗目・同色之半袴、
一御入輿當日之衣服、かちん子持筋熨斗目・同色之長袴、
一五百八拾之餅拜領仕ル節、衣服右同斷、
一御入輿相濟ル以後、登　城仕御禮申上ル節、衣服右同斷、
右之通大隅守着用可仕ル、松平加賀守樣御方承合ル處、舊記詳相見得不申由申來ル付、此方ニ而右之通相心得罷在ル、此段申上ル、以上、
(朱)「享保十四年」閏九月「二十四日」　松平大隅守内　堀萬右衛門
(朱)「御張紙」
右之趣小笠原平兵衛ニ被承合、追而可被申聞ル、

2362

全上
竹姫君樣ニ御入輿之當日、隱居上總介・益之助・上總介妻・御待上臈阿部伊勢守妻より獻上物品之儀、被仰渡ル、上總介より者、御當地ニ詰合ル家老を以可差上ル、御入輿相濟ル段承知之上、爲御祝儀國許より使者差上ル儀者、可爲勝手次第旨被仰渡承知仕ル、且又益之助・上總介妻・御待上臈より獻上物之儀者、御當地ニ罷在ル家老を以可

差上ゟ哉、右使者柄之儀、最前不奉伺ゟ付此段申上ゟ、家老を以差上儀御座ゟハヽ、御待上臈獻上物之儀ゟ、伊勢守家老之内こゟ差上可申ゟ、何分こゟ御差圖被成可被下ゟ、以上、

(朱)「享保十四年」閏九月「二十四日」　松平大隅守内　堀萬右衛門

(朱)「御張紙」何之通たるへくゟ、

2363

仝上御詰中

竹姫君様　御入輿相濟御禮申上ゟ節獻上物之儀、先頃奉伺ゟ處、別帳を以委細被仰渡ゟ、依之左之通奉伺ゟ、一隱居上總介より、一類之内以名代御禮申上、獻上物可被仕旨被仰渡ゟ付ゟ、名代阿部伊勢守差出可申旨申上候處、被聞　召置ゟ旨被仰渡ゟ、　御入輿首尾能相濟ゟ段、上總介於國元承知仕ゟ、御禮且又伊勢守を以御禮申上ゟ段こゟ、於國元承知仕ゟ上、右兩様之御禮以使札可申上哉、左ゟハヽ、右使者柄ゟ家老差上可申哉、

(朱)「御張紙」以使札可被申上候、尤家老可被差越候」

一先達ゟ被仰渡置ゟ通　御入輿相濟御禮申上ゟ節公方様　大納言様ゟ嫡子益之助并上總介妻且又公方様ゟ御待上臈阿部伊勢守妻より、表立以使者獻上物可仕旨被仰渡ゟ、右使者柄之儀ゟ、御當地ゟ詰合ゟ家老之内を以差上可申哉、家老を以差上儀ゟハヽ、御待上臈より之使者ゟ伊勢守家老之内こゟ差上可申ゟ、

(朱)「御張紙」使者柄之儀者了簡次第可被致候」

一一位様養仙院様ゟ　(編吉様女)

大隅守・上總介・益之助

上總介妻より

一右衛門督様　(田安宗武)　小五郎様ゟ　(一橋宗尹)

大隅守・上總介より

(朱)「御張紙」一位様江者只今迄差上物之通可被致候、

右之通獻上物仕筋こ被仰渡ゟ、右獻上物之儀ゟ何方ゟ可差上ゟ哉、且又右使者柄之儀こゟ家老を以可差上ゟ哉、又ゟ家老以下之者を以差上ゟ様こゟ可仕ゟ哉、

養仙院様江者松平加賀守より致差上物候節之儀承合、其通可被致候、右衛門督殿・小五郎殿江者御本丸中之口迄可被差上候、使者柄之儀者可為勝手次第候一

右先例無御座儀ゟ故奉伺候、何分こゟ御差圖被成可被下ゟ、以上、

(朱)「享保十四年」閏九月「二十四日」　松平大隅守内　堀萬右衛門

2364

仝上

竹姫君様　御入輿相濟、松平大隅守御禮申上ゟ節、隱居上總介より名代阿部伊勢守を以御禮申上、獻上物仕ゟ節、

(朱)「御張紙　承置候」

伊勢守衣服之儀ハ、無筋褐衣熨斗目・同色長袴着用仕心得ニゐ罷在ル、此段申上置ル様ニと、大隅守申付ル、以上、

(朱)「享保十四年」閏九月「二十四日」　松平大隅守(朱)「本ノマヽ」(内脱カ)

堀萬右衛門

2365

継豊公御譜中

正文在文庫

明廿八日例月之御禮無之ル間、不及登　城ル、以上、

閏九月廿七日　酒井讃岐守

松平左近將監

水野和泉守

松平大隅守殿

2366

継豊公御譜中

正文在文庫

竹姫君様御入輿之節、松平越中守儀相詰申度存ル付ゐ、(朱)「御張紙」出府奉願之旨申越ル、願之通被仰付ル得ハ別ゐ幸存申ル、不及出府旨越中守江相達候」何分ニゑ宜御差圖可被下ル、以上、

(朱)「享保十四年」十月「三日」　松平大隅守

2367

仝上

一竹姫君様御入輿前、御道具被差越ル初日より終迄三ケ(朱)「張紙　御書面之通可然存候」日、衣服かちん熨斗目・同色之半袴、

(朱)「張紙　御書面之通ニ御座候、子持節用候餘者御婚礼御祝之御座敷迄ニ而候」

一御入輿當日之衣服、かちん子持筋熨斗目・同色之長袴、

(朱)「張紙　かちん熨斗目・同色之平袴ニ而可有御座候」

一五百八拾之餅拜領仕ル節、衣服右同斷、

(朱)「張紙　かちん熨斗目・同色之長袴ニ而可然存候、子持節ニ者及申間敷候」

一御入輿相濟ル以後登　城仕御禮申上ル節、衣服右同斷、

右之通大隅守着用可仕ル、松平加賀守様御方承合ル處、舊記詳相見得不申由申來ル付、此方ニゐ右之通相心得罷在ル、衣服之儀松平左近將監様ニ相伺ル處、此御方様ニ御尋申上、追ゐ其段申上ル様ニと、御張紙を以被仰渡ル付、此段御尋可申上旨、大隅守申付ル、以上、

(朱)「享保十四年」十月「四日」　(朱)「御名内」土岐半助(賀逸)」

2366

仝御譜中

繼豊豫禀嗣嫡益之助實母(称於喜久)還レ國之事於官家ニ允ニ容之一、因今茲享保十四己酉歳十月五日發ニ東都芝邸一(納殿役人西田嘉左衛門正盈纘ニ監路次之事一、其外納殿奥大番医師等數輩隨從焉)、經ニ東海伊勢路一、十月十八日到ニ大坂一宿ニ於旅亭一矣、是行也寄下肩輿於鎌倉・伊勢・京師上、

名所舊跡共歴覽之、拜敬神宮靈蹤、仰崇紺園・妙跡、
既而出難波旅寓、過山陽・西海二驛、通行小倉路、
十二月二十九日入于出水假館、踰年著薩府矣、
嚮是繼豐就執政戸田忠眞、獻靖臺實錄於幕府、
公喜之甚矣、是時忠眞傳達　台命於繼豐曰、他日又有
珍希書則可獻進也、故渡唐之琉人所得之春秋義六
冊（入白木筐蓋裝飾朽黃絹眞田組緒書帙共包二淺黃羽二重巾）、預應執政之教諭、是歳十月十
三日使留守居土岐半助賀通齋（中）所獻之書籍（上）、登營
憑松井久慶（御坊主頭）捧呈之、執政水野和泉守忠之執達
之、因賜奉書於繼豐、見于後、

2369

仝上

正文在文庫

御書物一箱被獻之ハ、遂披露ハ處御喜色之御事ハ、恐〻
謹言、

（朱）「享保十四年」十月十三日　　忠之判

（朱）「在口裏」松平大隅守殿　　忠之

（朱）「在右裏」水野和泉守

2370

仝上

重陽之　御内書可相渡ハ間、明日五半時　御城ゟ家來可
被差出ハ、以上、

（朱）「享保十四年」十月廿日　　水野和泉守

松平大隅守殿

2371

繼豐公御譜中

正文在文庫

御滿そくニ思しめしハ、誠に幾ひさしくめて度御事
のミ仰上られハ御事ニハ、祝思しめしハ、何もよく
御心得申せとの御事ニ御さハ、なを〳〵めてかしく、
閏九月廿七日の御文下されハ、まつ〳〵
一位様御機嫌よくならせられ、めてたく思しめし被成ハ
よし、さては去月廿七日　徳川右衞門督様御元服、御官
位　仰出され、めて度思しめし被成ハ由、御祝儀おほせ
上られ御文のやう披露いたしまいらせハへハ、かす〳〵
めてたくかしく、

（朱）「享保十四年」

秀小路

まつ平
上總介さま　御返事
人〻御中

梅　その
さくらい

2372

継豊公御譜中
正文在文庫

一御入輿相濟爲御禮
公方様ハ從益之助并上總介妻獻上物之儀被仰渡、承知仕ル、

一養仙院様ハ右同斷ニ付、從大隅守・上總介并妻・益之助差上物之儀被仰渡ル、左ル㐂　松姫君様御入輿相濟ル節　養仙院様ハ松平加賀守様より何方ハ御差上ル哉、承合ル様被仰渡、彼方承合ル處、其節ハ水戸様小石川御屋敷御守殿ハ御差上之由、只今ハ駒込御屋敷ハ(朱)「御張紙　駒込御屋敷江可被差上候」加賀守様より御使者勤等有之由申來ル、左ル得ハ此度之儀、右御屋鋪ハ差上ル筋可有御座ル哉、

一右衛門督様・小五郎様ハ右同斷ニ付、大隅守　上總介より差上物之儀、中之口迄可差上旨被仰渡、承知仕ル、(朱)「御張紙」右使者柄之儀勝手次第可仕旨被仰渡ル、用人使者を以差上可申ル、此段奉伺ル、以上、
使者柄之儀可為伺之通候

2373

(朱)「享保十四年」十月「二十七日」　松平大隅守内
相良彌一兵衛

仝上

御入輿相濟ル爲御禮

一位様ハ從大隅守・上總介并妻・益之助獻上物、表立可差上旨被仰渡ル、表立差上ル先例無御座ル付、何方ハ差上可申哉奉伺ル、使者柄之儀ハ勝手次第と被仰渡ル、用人使者を以差上可申ル、以上、
(朱)「御張紙　一位様御廣敷江用人御使者可被差上候」

(朱)「享保十四年」十月「二十七日」　松平大隅守内
相良彌一兵衛

2374

仝上

御入輿相濟大隅守御禮申上ル節

公方様ハ御待上藏阿部伊勢守妻より獻上物之儀被仰渡置ル、伊勢守用人使者を以差上可申ル、此段申上ル、以上、
(朱)「御張紙　承置候」

(朱)「享保十四年」十月「二十七日」　松平大隅守内
相良彌一兵衛

2375

仝上

一五百八拾之餅拜領之節、子持筋并長袴ニハ及間敷ル、

併　上使御衣服之依御様子時宜次第着用可致ル、

2376

一御入輿相濟ハ以後爲御禮登　城之節ハ、子持筋之衣服ニハ及間敷ハ、併當時之御作法ニ而子持筋着用之儀ハ、押而及間鋪と不難被仰ハ、猶聞合不可仕哉と被仰聞ハ、右之通被仰聞、右件之趣を不可申上旨、小笠原平兵衛様より承知仕ハ、以上、

(朱)「享保十四年」十月「二十七日」　松平大隅守内　相良彌一兵衛

(朱)「御張紙」右衣服之儀者別紙書付ニ以付札相達ハ、

全上

一竹姫君様御入輿前、御道具被差越ハ初日より終迄三ケ日、衣服かちん熨斗目・同色之半袴、

(朱)「御張紙 可為此通候、」　引札 御書面之通可然存候」

(朱)「御張紙 右同断、」　引札 御書面之通御座候、子持筋用候儀者御婚礼之御座敷迄ニ而候」

一御入輿當日之衣服、かちん子持筋熨斗目・同色之長袴、

一五百八拾之餅拜領仕ハ節、衣服右同断、

(朱)「御張紙 先格御使衣服かちん子持筋熨斗目・同色之長袴ニ而候間、衣服同断たるへく候、」　引札 かちん熨斗目・同色之平袴ニ而可有御座候」

(朱)「御張紙」

一御入輿相濟ハ以後登　城仕御禮申上ハ節、衣服右同断、

先格衣服かちん子持筋熨斗目・同色之長袴ニ而候間、此度も其通たるへく候、　引札 かちん熨斗目・同色之長袴ニ而可然存候、子持筋ニ者及申間敷候」

右之通大隅守着用仕心得ニ而罷在ハ旨、先達而相伺ハ處、右之趣小笠原平兵衛(常春)様ニ御尋申上、追而其段可申上旨、御張紙を以被仰渡ハ付、平兵衛様ニ御尋申上ハ處、右附札之通承知仕、且又別紙書付之通被仰聞ハ付、此段可申上旨、大隅守申付ハ、以上、

(朱)「享保十四年」十月「二十七日」　松平大隅守内　相良彌一兵衛

2377

継豊公御譜中
正文在文庫

明朔日、例月之御禮無之ハ間、不及登　城ハ、以上、

(朱)「享保十四年」十月廿九日　酒井讃岐守　松平左近將監　水野和泉守

松平大隅守殿

2378

吉貴公御譜中
正文在文庫

御機けん御うかゝひ仰上られ、御ねんいらせられハ御事、ひろう致まいらせハへハ、御滿足ニ思しめしハ、なにもよく申せとの御事ニ御さハ、かしく、

つかる右京亮(津軽信興)殿御おく方(近衛家熙妻女)御死去被成ハ付、

一位様御機嫌御窺被成、後九月十三日之御ふみ下されハ、まつ〳〵

一位様御機嫌よく成らせられ、御障も御座あそハしけハ
すけ、御心易思しめし被成けへくけ、かしく、

享保十四年（朱カキ）

ゟ

秀小路
梅園
さくらい

松たいら
上總介さま　御返事
人〻御中

（表紙）

吉貴公
繼豐公　享保十四年　自十一月　至十二月
宗信公

追錄　舊記雜錄　巻六十九

2379

吉貴公御諸中
正文在文庫

披露致しまいらせけへゝ、御念入まいらせられけ御事ニ思しめしけ、御手まへさま、すい分御病氣御養生被成けやうニと思しめし、何もよく心えけて申せとの御事ニ御さけ、めてたくかしく、

十月三日之御文下されけ、まつ〳〵

（吉宗）公方様

（家重）大納言様御機嫌よくならせられ、御めてたさ

（天英院家宣室）一位様御機嫌よくならせられけまゝ、御心安思しめし被成けへくけ、さては此度、御同性大隅守（島津繼豐）殿御縁組仰出されけニ付、御入輿まへ御手まへさま御事御參府被成、

（綱吉養女）竹姫君様へ御めミへも被成度思召け得共、いまた御病氣御すくれ不被成、御參府被成かたく御座け故、御快時分御參府御伺被成度よし、御窺被成け處、仰上られけ通ニ御奉書ニて、有かたく思しめし被成け由、委細御ふミのやう、めて度かしく、

（朱カキ）享保十四年　　ゟ

松平
上總介さま　御返事　秀小路
人〻御中　梅その
さくらゐ

2380

全上

御札令披見け、

公方様　大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤け、將又今度德川右衛門督（田安宗武）殿元服、官位被　仰出け段被承之、目出度被存由、得其意け、紙面之趣各申談及　上聞け、恐〻謹言、

（朱カキ）享保十四年十一月四日　　酒井讃岐守　忠音判

松平上總介殿

2381

全上

御札令披見ハ、

公方様　大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、將又今度徳川右衛門督殿元服、官位被　仰出ハ段被承之、目出度被存由、得其意ハ、紙面之趣及言上ハ、恐〻謹言、

享保十四年（朱カキ）十一月四日　　安藤對馬守信友判

松平上總介殿

2382

継豊公御譜中

正文在文庫

今度　御入輿付ゐ者　竹姫君様ハ

信證院（綱貴側室、江田氏（おすま））并私實母（綱貴女）又ゐ於苑（惟久室、綱貴養女）・嶋津淡路守妻（忠就室、鳥居氏）・同但馬守妻（朱）「御張紙　祖母信證院並実母・叔母よりハ御祝儀献上物之儀、且又此以後御機嫌伺等茂可有之候、差上物品之儀者、是よりハ及差圖候間、相応ニ可被差上候但馬守妻女よりハ不及其儀候」

より御祝儀獻上物之儀、且又以後共御機嫌を茂奉伺ハ様仕度存ハ、此段相伺申ハ、以上、

「享保十四年」（朱）十一月「七日」　　松平大隅守

2383

全上

正文在文庫

（朱）「在口裏」　松平大隅守ハ

來月十日過障日可被書出ハ、

「享保十四年」（朱）十一月「十一日」

2384

全上

御入輿之節御通筋ハ被罷出ハ様可仕人數、

阿部伊勢守殿（正福）
鳥居丹波守殿（忠利）
堀田出羽守殿（正陸）
松平備前守殿（定章）
酒井右京亮殿（忠武）
松平百助殿（定英）
松平筑後守殿（定郷）
柳生甲斐守殿（後平）
酒井中務殿（忠候）
小野次郎右衛門殿（忠一）
大井新右衛門殿（政長カ）
田村主馬殿（顕清）
橘隆庵様（元孝）
林牛齋様

2385

以上

「享保十四年十一月十一日」(朱)

仝上

御入興之節本宅勝手ハ被相詰候様仕度人數、

嶋津但馬守(忠雅)
嶋津式部(久芳カ)
嶋津八郎兵衛
山元縫殿(正延)
山元大膳(正方)
松平左兵衛督殿
阿部伊勢守殿
鳥居丹波守殿
堀田出羽守殿
松平備前守殿
酒井右京亮殿
松平百助殿
津輕右京亮(信興)殿
松平筑後守殿
柳生靱負殿

京極四郎左衛門殿(高本)
水谷出羽守殿(勝英)
酒井中務殿(忠候)
阿部隼人殿
三宅彌一郎(德恩)様
堀求馬様
加藤平内(納奉)様
水谷彌之助(勝比)様
小野助九郎(忠久)様
三宅左内(德愛)様
蟐川八右衛門(親和)様
橘隆庵様
長尾文哲様
丸山昌貞(玄棟)様
平賀玄純様
林牛齋様
小川玄好様
村田長庵(昌伯)様
湯川壽三(延房)様
堀元好益(頭晴)様

丹羽壽伴殿
島津但馬守
島津式部
鳥津八郎兵衛
山元縫殿
山元大膳
小野次郎右衛門様
大井新右衛門様
田村主馬様

以上

(朱)「享保十四年十一月十一日」

2386

仝御譜中
正文在文庫　(朱)「在口裏」　松平大隅守ハ

御入輿相濟、老中始其外ハ爲祝儀贈物之事、加賀守(前田吉德)時之通可被致と存ル、併其品茂當時減少之御定之格ニ準可然ル間、爲心得相達ル、

但 御小性・御小納戸・奥醫師ハ贈物ニ茂不及ル、

(朱)「享保十四年十一月十二日」

2387

仝上

今度御入輿付　御輿・御貝桶御渡之御方様　上使之御方様ハ進達仕ル筈之道具代金、左之通御座ル、

御輿御渡之
御方様
一刀大小
(朱)「御張紙ニ而 承置候」
刀代金貳拾枚
脇指代金拾五枚

御貝桶御渡之
御方様
一刀大小
(朱)「御張紙 右同断」
刀代金貳拾枚
脇指代金拾五枚

一刀一腰宛

御入輿御禮申上候朝
公方様　大納言様より
上使被下置儀御座ル ハ、其御方様ハ
但代金貳拾枚宛

一刀大小

御入輿翌日以　上使五百八十之餅拜領被　仰付ル
節、右　上使之御方様ハ、

(朱)「御張紙ニ而 此大小者札物ニ而茂不苦候間、可被相減候」

刀代金七枚五兩
脇指代金五枚
但
五百八十之餅拜領之　上使之御方様ハ進達仕ル道具代付之儀、加賀守様御方同様ニ御座ル得共、右代金を引下ケル可き、札物ニ罷成ル故、加賀守様より被進ル通代金見合申ル、
右之通御座ル、加賀守様より右御勤之御方様ハ被進ル御道具代付、別紙差上申候、以上、
(朱)「享保十四年」十一月「十三日」　松平大隅守内
根良彌(長)一兵衛(圭)

2388
全上
御入輿之節、上總介奥召仕之年寄女中を始末々之女中迄、御守殿御勝手ハ相詰させル様仕度ル、且又大隅守方ハ年久敷相勤ル局及相詰ル様申付度ル、尤相詰ル人數等之儀付ゐき、上總介奥より
(朱)「御張紙ニ而　勝手次第可被致候、委細之儀者大奥年寄女中江被承合候上、可被取計候」
御本丸御奥御年寄様方ハ得御差圖相詰ル様可仕ル哉、此段奉伺ル様と、大隅守申付ル、以上、
(朱)「享保十四年」十一月「十三日」　松平大隅守内
土岐半助(賀通)

2389
全上
御入輿之節御杓・御見送之御女中方末々迄、大隅守・上介總并奥より贈物何様可仕ル哉、加賀守様御方承合ル處、別紙之通申來ル付相添、此段得御差圖候様ニと、大隅守申付ル、以上、
(朱)「享保十四年」十一月「十三日」　松平大隅守内
土岐半助(賀通)
(朱)「御張紙」
此儀ハ加賀守方被承合ル別紙書付ニ、以付札相達ル、

2390
全上
公方様御女中御杓常盤井様ハ
一縮緬五巻
前加賀守様より(前田綱紀)
一紗綾十巻
一干鯛一箱
當加賀守様より(前田吉徳)
御臺様御女中御加おかめ様ハ

一縮緬三巻
前加賀守様より
(朱)「御張紙ニ而
一紗綾五巻
此度者　竹姫君様之小上臈相勤候間、大隅守より贈物、
一干鯛一箱
了簡次第可被致候」
當加賀守様より
公方様御女中御配膳之衆おさち様ハ
一紗綾三巻宛
前加賀守様より
(朱)「御張紙ニ而
此度者　竹姫君様女中相勤候間、大隅守より贈物、了簡次第可被致候」
御臺様御女中御配膳之衆五人ハ
一銀五枚宛
當加賀守様より
公方様　御臺様御右筆衆四人
一銀貳枚宛
前加賀守様より
(朱)「御張紙ニ而
御本丸御右筆一人此度御先江相越候、大隅守より贈物、
一金子五百疋
可為書面之通候」
當加賀守様より
御大奥御使番衆三人
一同三百疋宛
前加賀守様より
一綿貳把宛
(朱)「御張紙ニ而
御本丸御使番一人此度者御先江参候、大隅守より金弐百疋可被相贈候」
當加賀守様より
御臺様若御年寄衆織津様ハ
一綿拾把
前加賀守様より
一縮緬五巻
當加賀守様ゟ
御表使いさの様ハ
一縮緬貳巻
前加賀守様より
(朱)「御張紙ニ而
御本丸表使一人御先江参候、大隅守より巻物二可被相贈候」
一紗綾三巻
當加賀守様より
右之通　御入輿之節御杓・御見送之御女中衆ハ被相贈
ハ由申來ハ、以上、
(朱)「享保十四年」十一月「十三日」

2391
仝上
御入輿以後　竹姫君様ハ年頭を始諸節句年中、大隅守・
上総介并奥・益之助・阿部伊勢守奥より、御機嫌伺品物

等獻上仕ル儀ハ、此方ニテ勘弁仕相調　竹姫君様御附之御用人衆ニ申談、品員數共相極、追テ首尾申上ル様可仕ル哉、此段奉伺ル様と、大隅守申付ル、以上、

（朱）「御張紙可為此通候」

「享保十四年」十一月「十三日」　松平大隅守内　土岐半助（貫通）

2392

仝上

御入輿付伺書

（朱）「御張紙ニ而可為書面之通候」

一御入輿前御道具被遣ル節、御出之御方様ニ、於本宅料理進可申ル、左ル而、初日計一門并心安御方相招、囃子致興行祝可申ル、後日ニ御道具被遣ル節、御附御出之衆ニ為、初日同前之料理進可申ル、

加賀守様御方承合ル處、御道具參ル初日計、布施長門守様御出ニ付、御料理被進、右爲御祝、御一門并御心安御方被仰入、囃子興行被仰付、後日御道具參候節ハ、囃子興行不及、御道具ニ御附御出之御方迄ニ、初日同前ニ御料理被出ル由、承申ル、

（朱）「御張紙ニ而加賀守時之通可被心得候」

一御入輿之節御輿御貝桶御請取渡之節、大隅守為其席ニ罷出、御會釋可有御座哉、加賀守様御方ニテハ、左様之儀無之由承申ル、

（朱）「御張紙ニ而可為書面之通候、幕之儀者小笠原平兵衛可被承候」

一御輿・御貝桶御受取渡之儀ハ

御守殿御使者之間二間を一座ニ仕、致幔幕構御請取渡相濟ル様ニ可有御座ル哉、御守殿之儀御差圖之通作事相調候付、外ニ御請取渡之座鋪無御座ル、且又右幕之地并色相ハ、何様ニ相調可申ル哉、

加賀守様御方承合ル處、幕色相等之儀相知不申候、

（朱）「御張紙ニ而此儀者勝手次第可被致候」

一御入輿之節、一門并兼テ心安御濱本様方別册御人數、本宅勝手ニ被相詰ル様仕度ル、

（朱）「御張紙ニ而勝手詰之衆御通筋江被罷出候ニ不及候、家老又ハ附役之分計罷出可然候」

一右勝手詰之内別紙人數、御通筋ニ罷出ル様可仕ル哉、其節家老并頭役之分、御守殿御門外御通筋、蹲踞可仕ル哉、

加賀守様御方承合ル處、家老役又ハ頭分、御通筋ニ罷出候由承申ル、

（朱）「御張紙ニ而熨斗鮑・吸物・酒計ニ可被致候、料理ニハ不及候、一類之内挨拶候様ニ可被致候」

一御入輿之節、御輿・御貝桶御渡之御方様、其外御供之御役〻様方

御守殿御勤相濟、直ニ本宅ニ御通被成候様仕、熨斗・雑煮・吸物・差味差上、銚子三篇ニテ、引次ニ料理差上候様ニ仕度ル、御守殿御座敷にてハ、右躰之御饗應為難成御座ル、其節大隅守儀ハ

御守殿江罷在筈ニ御座ハ得共、一類之内罷出御挨拶可申上哉、

加賀守様御方承合ハ處、當加賀守様ニ共其節表向ニ御出無之候故、前加賀守様御出、御老中様方江御挨拶御座ハ由、承申ハ、

一御入輿之節、大隅守儀　御守殿表向何方迄可罷出候哉、
（朱）「御張紙ニ而　加賀守時之通可被致候、御輿・御貝桶請取之人者可為書面之通候」
御輿・御貝桶受取之人共、門外迄罷出　御輿を奉見、御式臺江着座可仕ハ哉、

加賀守様御方承合ハ處、當加賀守様ニ共其節表向ニ御出無御座ハ、前加賀守様・松平酒之丞様ニ共御門外ニ御出　御輿を御見受、御式臺ニ御着座被成ハ由、承申ハ、

一御入輿相濟ハ以後、登　城仕御禮申上ハ朝　上使被下置儀ニも御座候ハヽ、御取持之次第、常式　上使御出之節之通可仕ハ哉、其節、熨斗・三汁十菜之料理・嶋臺差上、大隅守御盃御取替シ仕ハ様致度ハ、
（朱）「御張紙ニ而　吸物計被出之、盃事迄ニ而、料理ニ不及候、嶋臺之儀茂　加賀守時之通ニ可被致候」
加賀守様　御方承合ハ處　御入輿相濟　御禮被仰上候朝、上使御出之節、當加賀守様ニ共、御門内迄御出向御先達被成ハ、家老并頭分之者御門外ニ罷出候由、左ハ而、於大書院　上意御拜聽相濟、鰭之御吸物・御土器・嶋臺被差上、當加賀守様御盃事有之、御道具被進ハ由、承申ハ、

一右　上使被下置ハ御禮之儀共、則日登　城可仕儀御座ハ間、於　御城右御禮をも申上、左ハ而、退出之節直ニ　上使之御方様其外之御老中様江共罷出

上使被下ハ御禮迄共申上ハ様可仕ハ哉、

加賀守様御方承合ハ處　御入輿相濟ハ爲御禮御登城當日　御城より直ニ御老中様方江、御自身御勤被成ハ由、申來ハ、

一大納言様より共　上使被下置儀御座ハハヽ、御取持御饗應之次第ハ、前條同前仕度ハ、
（朱）「御張紙ニ而　可為書面之通候、是亦料理ニ不及候」
加賀守様御方承合ハ處、

公方様より之　上使御出之節之通御座ハ由、承申ハ、

一御入輿以後、屹立御出又ハ御慰并出火等之節　御出之刻、御供廻御行列何様可仕ハ哉、御先拂共可有之哉、
（朱）「御紙張ニ而　此等者大久保下野守江可被承合候」
且又御挑灯共御紋付ニ相調可申ハ哉、

加賀守様御方承合ハ處、相知不申ハ、

一御入輿翌日、五百八拾之餅以

上使拜領被仰付ハ節共　御守殿ニ而拜領被　仰付儀御座ハ哉、又共本宅ニ而拜領被仰付儀御座ハ哉　上使御

(朱)「御張紙ニ而」出之節ハ、常式　上使被下置ハ節之通、大隅守罷出、
(朱)「加賀守時之通たるへく候」嶋津但馬守并家老・用人、其外早晩罷出ハ役々罷出ハ
様、可仕ハ哉、
加賀守様御方承合ハ處、別册之通申來ハ、左ハ得ハ、
大隅守御出迎仕ハ儀も、加賀守様御方之通可仕候哉、
何分ニ茂御差圖次第可仕ハ、
一上使御饗應之儀ハ
(朱)「御張紙ニ而」上意之趣大隅守拜聽仕、於本宅御熨斗・木地三方出、左
(朱)「加賀守時之通たるへく候」ハ三汁十菜之料理可差上候、右御相伴之儀ハ、心安
御簾本衆御賴可申ハ哉、
一料理之上土器・木地三方出之、大隅守罷出御盃御取替
(朱)「御張紙ニ而」可仕ハ、
一右餅拜領ニ付ハ御老中様ハ御禮之儀、加賀守様御方ニ
(朱)「加賀守時之通たるへく候」ハ、留守居役を以被仰上ハ由申來ハ、弥加賀守様御
(朱)「御張紙ニ而」方之通、留守居役之者を以御禮可申上ハ哉、何分ニ茂
(朱)「加賀守時之通可被致候」御差圖次第ニ可仕ハ、
加賀守様御方承合ハ處、別册之通申來ハ、
一御入輿付ハ御役御勤之御方様ハ、左之通道具進達可仕
(朱)「御張紙ニ而」ハ、
(朱)「承置候」

御輿御渡之
御方様ハ
御貝桶御渡之
御方様ハ
一右同
一刀一腰宛
但御入輿之御禮申上ハ朝
公方様　大納言様より　上使被下置儀御座ハハ、、
其御方様ハ
一刀大小
但御入輿翌日以
(朱)「御張紙ニ而」上使五百八拾之餅拜領被仰付ハ節、右　上使之御
(朱)「承置候」方様ハ、
右之通進達可仕ハ、
加賀守様御方承合ハ處、別册之通被進ハ由、申來ハ、
一御入輿之節　御城より御見送又ハ
(朱)「御張紙ニ而」御守殿ハ御越之御女中様ハ、大隅守・上總介并妻より
(朱)「此序ニ大隅守より計贈物員數別紙ニ申達候」贈物可仕と存ハ、品員數等如何可仕ハ哉、何分ニ茂御
差圖被成可被下ハ、
加賀守様御方承合ハ處、別册之通申來ハ、

(朱)「享保十四年」十一月「十一日」

正文在文庫

松平加賀守様御方ニ承合ハ趣

一御入輿翌日五百八拾之餅拜領之節、

御守殿大御門より入

上使布施長門守様かちん子持筋熨斗目・同色之長袴ニ

ゐ先達ゐ御出被成ハ、其節年寄共右御門之内迄罷出ハ、

頭分御玄喚前白洲ニ罷出申ハ、長門守様御表座敷ニ御

通り、加賀守様御出　上意之趣拜聽、早ゐ御熨斗・木

地三方出シ、押付引之御料理三汁十菜木具、御相伴御

壹人、拜領之品左ニ記、

五百八拾之餅　十二箱

塩鯛　一折

干鱧　一折

干鱈　一折

塩ほら　一折

塩鰍　一折

鱧子　一折

熨斗　一折

昆布　一折

塩引　一折

御樽　十荷

右白洲へ取を敷、此上ニゐ積渡ハ付、御玄喚之上迄

足輕上ル、衣服小紋等之小袖・同上下着用仕ハ、夫よ

り歩組之者表座敷ニ運之、衣服花色小袖・同上下着用

仕ハ、

一御料理之上、土器・木地三方出之、挨拶之上御盃、加

賀守様御初、長門守様ニ被遣、御加有ゐ、此時御刀大

小御心安御簗本衆御持出、長門守様ニ被進之、御一禮

早ゐ加賀守様ニ御返盃ニゐ御納御濃茶迄被進候由、

一右當日、年寄并頭分御守殿ニ罷出ハ者共、かちん熨斗

目・同長袴着用、

一右拜領付ゐ、御老中様方ニ使者留守居役を以御禮被仰

進ハ、

御輿御渡

一御刀大小　秋元但馬守様

御貝桶御渡

一右同　大久保加賀守様

御入輿相濟登城之朝御祝物拜領之

上使

一御刀一腰　井上河内守様
右同斷　大納言様ゟ之
上使
一右同　小笠原佐渡守様
五百八拾之餅拜領之
上使
一御刀大小　布施長門守様
右之通、加賀守様御方こゟ被進ゞ由、申來ゞ、
公方様御女中御杓常盤井様ゟ
一縮緬五巻
前加賀守様より、
一紗綾十巻
一干鯛一箱
當加賀守様より、
御臺様御女中御加おかめ様ゟ、
一縮緬三巻
前加賀守様より、
一紗綾五巻
一干鯛一箱
當加賀守様より、

公方様御女中御配膳之衆おさち様ゟ、
一紗綾三巻宛
前加賀守様より
御臺様御女中御配膳之衆五人ゟ
一銀五枚宛
當加賀守様より
公方様・御臺様御右筆衆四人ゟ
一銀貳枚ツヽ、
前加賀守様より
一金子五百疋ツヽ、
當加賀守様より
御大奥御使番衆三人ゟ
一同三百疋ツヽ、
前加賀守様より
一綿貳把宛
當加賀守様より
御臺様若御年寄衆織津様ゟ
一綿拾把
前加賀守様より
一縮緬五巻

當加賀守様より
御表使いさの様に
一縮緬貳巻
前加賀守様より
一紗綾三巻
當加賀守様より
右之通　御入輿之節御見送御勤之御女中衆に被相贈ゟ
由、申來ゟ、以上、
(朱)「享保十四年十一月十一日」

仝上
御入輿相濟御禮申上候當日、御老中様・若御年寄様方
に、大隅守・上總介より左之通祝物進達仕心得御座候、
一御太刀・金馬代壹枚宛
(朱)「御張紙
一巻物拾巻宛、
此二品之内一品可被添候」
一白糸貳拾斤宛
御老中様方に
一御太刀・金馬代壹枚宛
一巻物五巻宛
(朱)「右同断」
一白糸拾斤宛
若御年寄様方に
右大隅守より
一御太刀・金馬代壹枚ツ、
一二種五百疋ツ、
御老中様方に
一御太刀・金馬代壹枚宛
一壹種三百疋宛
若御年寄様方に
右上總介より
(朱)「御張紙　右令承知候」
右之通以使者進達仕筈ニ御座ゟ、右之外御側衆様・御
奏者番衆様方を始、御役人様方に茂祝物進被申筈御座
ゟ、先頃御縁組之御禮申上ゟ節茂不及伺、御老中様・
若御年寄様方を始、御役人様方に段々祝物進達仕ゟ、
今度御入輿相濟御禮申上ゟ節茂、右御縁組之御禮申上
ゟ節之例を以、進達仕筈ニ御座ゟ故、此段茂不及伺差
上被申心得ニ御座ゟ得共、加賀守様御方承合相伺ゟ様
ニと被仰渡ゟ付、此段申上ゟ、尤加賀守様御方承合候
處、左之通申來ゟ、
一御太刀・金馬代壹枚宛
一綿五拾把宛

御老中様方ゟ

一御太刀・金馬代壹枚宛

一綿三拾把宛

若御年寄様方ゟ

右當加賀守様より

一御太刀・金馬代壹枚ツ、

一干鯛壹箱宛

一昆布壹箱宛

一御樽代千疋宛

御老中様方ゟ

一御太刀・金馬代壹枚ツ、

一干鯛壹箱ツ、

一御樽代五百疋ツ、

若御年寄様方ゟ

右前加賀守様より

右之通加賀守様先年　御入輿之御禮被仰上ル當日、被進ル由、申來ル、且又御輿御渡・御貝桶御渡之御方様ゟ茂、加賀守様御方承合、御道具進達仕筈ニ、先達而奉伺置ル、以上、

(朱)「享保十四年」十一月「十三日」　松平大隅守内(長良)　相良彌一(主)兵衛

2395

仝上

一御入輿相濟　竹姫君様初而

御城ゟ被爲　入ル節

公方様　大納言様ゟ御進上物、且亦　右衛門督様　小五郎様　御女姫様方ゟ被進物、其外　御本丸　西之御丸御女中方、又茂御杓・御見送之御女中方末々迄茂、被下物可有御座ル哉、

一右　御城ゟ被爲　入ル朝

上使被遣御事ル ハ、、右　上使ゟ

竹姫君様より被下物可有御座ル哉、

一御輿・御貝桶御渡之御方様、其外御供之御役人様方ゟ

御入輿以後竹

姫君様より被下物可有御座ル哉、

(朱)「御張紙」右御進上物并被下物、大隅守方ニ而用意仕儀ニル ハ右被進物并被下物之儀、大隅守方ニ而用意可被致筈ニ候、具敬筆者以別紙申、、前以被　仰渡度御座ル、加賀守様御方承合ル處、達候」

右之趣舊記不相見由、申來ル、急ニ茂手當難仕儀茂可有御座と存ル付、此段得御差圖ル様ニと、大隅守申付ル、以上、

(朱)「享保十四年」十一月「十三日」　松平大隅守内(賀通)　土岐半助

2396

全上

竹姫君様御入輿之節

御輿請取

島津但馬守

御貝桶請取

鳥居丹波守

右之通相勤候付

(朱)「御張紙

公方様　大納言様ハ献上物仕度奉存候、何分ニ茂御差圖

此儀者以別紙相達候、大納言様江ハ不及献上物候」

被成可被下ル、以上、

(朱)「享保十四年」十一月「十三日」　松平大隅守

2397

全上

御守殿方ハ本宅より相勤ル役ゝ、左之通御座ル、

一御守殿方御用人三人、兩人宛定府申付、側用人之内より　御守殿方勤申付置ル、

一御守殿方添御用達貳人、壹人宛定府申付置ル、右御用人御用達名書之儀、先達而差上置申ル、

一御鎖口添番拾貳人、(ママ)八人ツヽ定府申付置ル、

一御守殿大番目附六人、三人宛定府申付置ル、

一右同大番廿四人、拾貳人ツヽ定府申付置ル、

一右同御包丁人頭貳人、壹人宛定府申付置ル、

一右同御包丁人四人、貳人ツヽ定府申付置ル、

一右同御包丁役拾貳人、六人宛定府申付置ル、

一御守殿方御用人書役四人、貳人ツヽ定府申付置ル、

一右之外輕士貳拾人程定府申付置ル、

一足輕百人程定府申付置ル、

(朱)「御張紙

右之通　御守殿方勤申付置ル、尤松平加賀守様御方承

右之通たるへき儀ニ候、併此上人数減少有之不苦分者、可有減少候」

合ル上、此方ニ而勘弁仕、人數相究申ル、右人數ニ而

御不足ル ハヽ、見合次第人數相重申積ニ御座ル、右之

外小人・人足類茂段ゝ相詰申筈ニ申付置ル、此段申上

置ル様ニ、大隅守申付ル、以上、

(朱)「享保十四年」十一月「十三日」　松平大隅守内

土岐半助

2398

全御譜中

享保十四年己酉十一月十五日、被ゝ掛ニ執政連名之條書於

守殿玄關勝手方一也、事詳ニ于後一、

2399

扣正文在家老座

條ゝ寫

一姫君様御爲第一に奉存、松平大隅の守儀是又おろそかに不存、御奉公油斷あるまじき事、
一表方の面〻と申分なと仕へからす并表方にむつかしき儀申間敷事、
一奥方より大隅守一人のわひこと、惣して訴訟の儀申まじき事、
一寺社の輩并諸職人・町人以下、奥方へ進物さゝくへからす、又は子とも・女房御禮いたすへからす、若御禮不申上して不叶ものハ、とみ・岡田・藤え相談の上、差圖いたすへき事、
一女房衆上下ともに、一年に二度の外、宿へ出すへからす、其上さきもたしかならさる所へ、つかハすへからす、わかき衆の事ハ、とみ・岡田・局・藤え念を入申付らるへし、若不叶儀有之時ハ、とみ・岡田・局・藤えより相談の上さしついたし、宿へ出すへき事、
附 男女不行儀有之におゐては、其身ハ勿論親兄弟まて、御かゝりなさるへき事、
一臺所かたへみたりに用事申ましき事、
一火の用心の儀、所〻に不寢の番を申付、念を入らるへし、并おく方いろりの事、ゆるしの外一切有へからさる事、
右此旨を相守らるへき者也、
享保十四年十一月十五日

讃岐守
左近將監
和泉守

2400 仝上
正文在文庫
覺
一御通筋に出り親類之事、
一勝手詰親類之事、
一御臺所頭・御同朋頭・御同朋其外坊主勝手に呼り事、
右加賀守時被承合り哉、無其儀りハ、、承合書付可被出り、
(朱)「享保十四年十一月十六日」

2401 仝上
正文在文庫
御入輿相濟り爲御祝儀

(朱)「御張紙」
一位様より
一位様より者女中御使たるへく候、其外御女中様方よりハ御用人御使たるへく候、料理ニハ不及候、吸物・酒計ニ可被致候」
竹姫君様ハ御使被進、大隅守ハ為御使被下置儀ニハ、、
御取持之次第、常式大隅守方ハ　上使御出之節之通仕、
其節熨斗・三汁十菜之料理・嶋臺差上、大隅守御盃事致
度ハ、加賀守様御方承合ハ處、其節ハ
御臺様より御女中衆を以、當加賀守様ハ為御拜領物有之、
於御守殿御頂戴被成ハ、此時之御饗應ハ相知不申ハ、
御簾中様よりハ、堀源左衛門様を以、御拜領物御頂戴被
成、鰭之御吸物被仕之、當加賀守様御盃御取替御座ハ由、
承ハ、此段得御差圖ハ様ニと、大隅守申付ハ、以上、
(朱)「享保十四年」十一月「十三日」　松平大隅守内　土岐半助(賀通)

2402

仝上
御入輿相濟御禮申上候當日、家老共之内　御目見被仰付
被下度奉存ハ、於松平加賀守殿方為、右之節家老兩人
御目見爲被仰付由ハ、其通被仰付儀御座ハハ、家格之通
獻上物等爲仕度存ハ、此旨左近將監殿ハ御物語被成給度
ハ、以上、
(朱)「享保十四年」十一月「十三日」　松平大隅守

2403

仝上
御守殿方ハ相勤ハ役ゝ書付差上ハ内、左之人數相洩ハ付、
書付差上申ハ、
一茶道坊守(主)六人、三人宛定府申付置ハ、
一通坊守拾人宛定府申付置ハ、
右之通御座ハ、以上、
(朱)「享保十四年」十一月「十四日」　松平大隅守内　堀萬右衛門(貞紀)
(朱)「御張紙」
右令承知ハ、

2404

御入輿翌日、五百八十之餅拜領之
上使ハ、大隅守より五百八拾之餅獻上之使者、中途ニ而
參合ハ様可有御座哉之旨、相伺ハ處、小笠原平兵衛様ハ
御尋可申上旨、御張紙を以被仰渡ハ付、御尋申上ハ處、
中途ニ而參合事御座ハ、其節ハ御式對為有之儀ハ旨、承
知仕ハ付、其通相心得罷在ハ、依之　上使被下置ハ御刻
限・御道筋等之儀、承知仕置度御座ハ、此段奉伺ハ様ニ
と申付ハ、以上、
(朱)「享保十四年」十一月「十四日」　松平大隅守内　相良彌一兵衛

（朱）「御張紙」
御入輿翌日五百八十之餅
上使戸田喜右衛門、辰上刻御本丸より罷越ル、道筋之儀ハ別紙ニ相達ル、
御入輿之節御道筋之通ニ可被心得ル、本宅ハ
上使可相勤ル、猶又其節之儀ハ、加賀守方ハ可被承合ル、

2405

仝上
御入輿翌日五百八拾之餅
上使を以拜領、此方より及五百八拾之餅獻上之使者、中途ニ而參合ル様可有御座ル哉、加賀守様御方承合ル處、中途ニ而參合ル儀、舊記ニ不相見得ル得共、途中ニ而參合ル様覺ル由、申來ル、此節之儀何様可被仰付ル哉、弥參合ル様被仰付儀ハ、、御刻限・御道筋前以被仰渡度ル、尤參合ル様被仰付ルハ、上使之御方様ハ此方使者參合ル節、致下乘、御時宜申上罷通ル様可仕ル、此段得御差圖ル様ニと、大隅守様申付ル、以上、
（朱）「享保十四年」十一月「十四日」　松平大隅守内　堀萬右衛門
（朱）「御張紙」
令承知ル、御祝儀御使と參合ル儀、小笠原平兵衛ハ可被承合ル、

2406

仝上
御入輿付御醫師衆之儀、御供被成ニ而可有御座と奉存ル、
（朱）「御張紙　只今迄竹姫君様江御出入之医師有之候間、此以後と而茂御出入候様」
御供之御女中方御病養ニ、此方手醫師之内より相勤ル筋ニ可御座ル哉、加賀守様御方承合ル處、御本宅より
（有脱カ）
ニ可相達候間、手医師差分候ニ不及候、然其手医師江見せ申度女中病用有之候ハ、、御用人より可相達候、其節病用相達候様ニ可被致候」
御守殿ハ御手醫師被相付ル儀無之旨、申來ル、此節之儀何様可仕ル哉、御女中方爲御病養、手醫師之内　御守殿方ハ差分相勤させ申儀ルハ、、幾人程相勤ル様可申付ル哉、若又差分相勤申ニ不及、時〻本宅より御用之節　御守殿ハ罷出、御女中方御病養相勤申儀ルハ、、其段ニ及被仰渡度奉存ル、此段相伺ル様ニと、大隅守申付ル、以上、
（朱）「享保十四年」十一月「十四日」　松平大隅守内　相良彌一兵衛（良主）

2407

仝御譜中
正文在文庫　（朱）「在口裏」　松平大隅守ハ
來月十一日就吉辰
竹姫君様可爲　御入輿旨、被仰出之、

十一月十五日

2408

仝上　　（朱）「在口裏」松平大隅守ハ

來月三日就吉辰

竹姫君様御道具被遣ハ初日ニ相極りハ間、可被得其意ハ、

尤刻限等之儀ハ、大久保下野守ハ可被承合ハ、

（朱）「享保十四年」十一月十五日

2409

仝上

來月十一日吉辰ニ付　御入輿之旨、今日鳥居丹波守ハ被

（朱）「御張紙」仰渡ハ、依之隙居上（吉貴）総介御禮之儀、如何相勤可申ハ哉奉

伺ハ、以上、　不及其儀候」

（朱）「享保十四年」十一月「十五日」　松平大隅守内　相良彌一兵衛

2410

仝上

來月十一日吉辰ニ付

御入輿御日限、今日鳥居丹波守ハ於

御城被　仰渡、承知仕ハ、大隅守風氣故、名代を以御老

中様方ハ御禮申上、登

城不及旨、是又丹波守承知仕ハ由、申聞ハ付、丹波守を

（朱）「御張紙」以御禮申上ハ、大隅守快氣仕ハ砌、爲御禮御　本丸　西

御丸ハ登　不及登城候、病気快気次第各扨書可被相廻候」

城仕、尤御老中様方ハ相勤可申ハ哉、此段奉伺ハ様申付

ハ、以上、

（朱）「享保十四年」十一月「十五日」　松平大隅守内　相良彌一（長主）兵衛

3411

仝上　　（朱）「在口裏」松平大隅守ハ

御輿請取　　嶋津但馬守

御太刀・馬代銀壹枚

御貝桶請取　　鳥居丹波守

同斷

竹姫君様御入輿以後御禮被申上ハ節、右兩人ハ書面之通

以御太刀馬代　御目見可被　仰付ハ間、其段可被相達置

ハ、

大隅守

家老兩人

右同斷之節　御目見可被　仰付ハ間、可被差出家老之名、

可被書出ル、
御目見之節、獻上物ニハ不及ル、
(朱)「享保十四年十一月十六日」

2412

仝上

覺

一御道具納所爲御見分、來月三日前以御出被成御方様
可有御座儀奉存ル、其御役々之事、
(朱)「御張紙」
一御道具被遣ル當日、爲御取捌何御役之御方様幾人程、
御道具三日・四日・五日御留守居番戸田喜右衛門「罷越、御道具相渡候、宰領
被成御出候哉之事、
御徒目付・御小人目付差越候」
一御道具參ル初日より終迄、御附被成御出ル御役々之事、
「御道具取扱之儀御用達竹内十郎右衛門ニ御備仕へく差添初日より罷越取扱致
候」
一御道具幾日程ニ被遣御賦ニ御座ル哉之事、
「三日・四日・五日ニ相残候御道具ハ、六日・八日・九日ニ添番御道具之書
付持參、伊賀守差添參候」
一御女中方道具參ル節、被召附ル宰領人之事并幾日程ニ
「女中道具之儀書、九日・十日ニ御小人を附、御下男致宰領參候」
被遣御賦ニ御座ル哉之事、
(朱)「御張紙」
一御道具參ル而御取捌之節、此方ゟ為
御道具參着、其元之者被指出御用達申談次第、取扱候様ニ可被致候」
御守殿方ハ勤ル者指出、御手傳仕儀ニ御座ル哉、又者
不及其儀御事御座候哉之事、
一右之外御道具被遣ル付心得罷成ル儀、具ニ御指圖奉願
ル、以上、

(朱)「享保十四年」十一月十六日　　堀萬右衛門(貞紀)

2413

仝上

松平加賀守殿方ニ而姫君様御名唱ル儀、爲承合ル處
(朱)「御張紙　大隅守殿ニ被申候ニ書
公義ハ被申上ル節　松姫君様、他所ニ而者奥方と被申ル、
公義并他所共ニ奥方と唱可被申候ニ候、書而ニハ奥方と可被聞事ニ候、使者之口
前加賀守殿ゟ者　松姫君様と爲被申由ル、竹姫君様　御
上筆者　竹姫君様と唱可申事ニ候、上總介口上書而ニ者　竹姫君様と可被唱事ニ
候」
入輿以後、同氏上總介并私ゟ、御名唱ル儀如何相心得可
然哉、左近將監殿ハ御物語賴存ル、以上、
(朱)「享保十四年」十一月十六日　　松平大隅守

2414

仝上

御入輿之節本宅勝手ハ被相詰ル様仕度人數
御臺所頭衆
御同朋頭衆
御同朋衆
御數寄屋頭衆
御臺所組頭衆
御老中様於御出者、右御役より御壹人宛相招被申度御
座ル、

表御坊主組頭衆
御坊主衆
一門并心安御廣本様方被相招ハ付、右之内より招被申度御座ハ、
以上
(朱)「享保十四年十一月十七日」

2415

仝上
(朱)「在口裏」
嶋津但馬守(忠雅)ハ
寫
嶋津但馬守
但馬守事、大隅守同姓之内ニ而為近き親類之儀ハ間　竹姫君様御入輿御祝儀、御廣敷ハ參上、御祝儀物為差上、此以後爲伺御機嫌御廣敷ハ參上可被致ハ、尤其段大隅守ハも相達ハ間、可被申談ハ、
(朱)「享保十四年」十一月「十七日」

2416

仝上
一松平加賀守様ハ御入輿之節、御通筋ハ御出被成ハ御親類之儀、承合候處
(朱)「御張紙」
御守殿中之御門外ハ、前加賀守様・松平備後守様御出御輿請取・御貝桶請取計御出向候様ニ可被致候、
被成ハ由、申來ハ、此度之儀、先達而相伺置ハ御通筋此外御通筋江御出候ニ不及候
ニ罷出ハ名書之通、差出申度御座ハ、此儀御差圖次第奉存ハ、
一同斷之節本宅勝手ハ相詰ハ親類之儀付、加賀守様御方
(朱)「御張紙」
承合ハ處、御親類又為御心安御方様并御簾元様御招被成、御出入之御城御坊主被召呼、本阿彌・狩野・町人此儀者　加賀守時之通可被致候」
等相詰候由、申來ハ、
(朱)「御張紙」
一同斷之節、御老中様於御出為、御臺所頭衆・御同朋頭衆・御同朋衆・御數寄屋頭衆・御臺所組頭衆相招申度不及此儀候」
旨、先達而伺置ハ、加賀守様御方承合ハ處、右之御役御招ハ儀無之旨、申來ハ得共、御老中様於御出為、相招申度御座ハ、
右為加賀守様御方ハ承合可申出旨、被仰渡ハ付、彼御方様ゟ右之通申來ハ、此度之儀如何可仕ハ哉、奉伺ハ、以上、
(朱)「享保十四年」十一月「十七日」　松平大隅守内　相良彌一兵衛

2417

仝上

（朱）「在口裏」　松平大隅守江

阿部伊勢守

竹姫君様御入輿相濟、御廣敷江參上御祝儀申上、御祝儀物茂差上、此以後も御祝儀事、御機嫌伺等こも御廣敷迄參上、御祝儀等之節差上物仕ル様こ、伊勢守相伺ル付、可爲伺之通旨申渡ル間、可被相談ル、尤差上物之品・員數等之儀茂、大隅守間柄之儀故、内證被申合ル様可被致ル、此以後茂差圖こ及間敷ル、

嶋津但馬守

但馬守事、同姓之内こも近き親類之儀ル間　竹姫君様御入輿御祝儀御廣敷江參上、御祝儀物茂差上、此以後爲伺御機嫌御廣敷江參上仕ル様こ申渡ル間、可被相談ル、此外之親類茂不及其儀ル段相達ル間、可被得其意ル、

（朱）「享保十四年」十一月「十七日」

2418

仝上

御守殿御作事御見分之儀申出置ル處、來廿日以後日限可申出旨被仰渡承知仕ル、依之今月廿六日御見分有之ル様

（朱）「御張紙」御守殿為見分、来ル廿六日大久保下野守・諏訪若狭守　竹姫君様御用人一人、御用達可差越候間、可被得其意候」

仕度ル、此段申上ル様大隅守申付ル、以上、

（朱）「享保十四年」十一月「十七日」　松平大隅守内

肥後藤（基儁）之丞

2419

仝上

竹姫君様江御附之御役〻様方被仰渡ル旨承知仕ル、依之御入輿前、御用人衆并御臺所頭衆・御用達衆・御醫師衆・御同朋衆相招ル様仕度、大隅守存ル、此段可申上置旨申付ル、以上、

（朱）「御張紙　加賀守時之通可被致候」

（朱）「享保十四年」十一月「十八日」　松平大隅守内

土岐半助

2420

仝上

御入輿相濟大隅守御禮申上ル節、家老兩人　御目見可被仰付旨被仰渡ル付、名書差出置ル、右之節家老衣服之儀茂、かちん熨斗目・同色長袴着用可爲仕ル哉、加賀守様御方承合ル處、右之通御座ル、此段可奉伺旨、大隅守申付ル、以上、

（朱）「御張紙ニ而　加賀守時之通たるへく候」

（朱）「享保十四年」十一月「十八日」　松平大隅守内

土岐半助

2421

仝上

御入輿以後

竹姫君様初ゐ　御城ゟ被爲　入ゟ節、從
(朱)「御張紙　加賀守時之通可被致候、尤大久保下野守可被承合候」
公義御附之御方御供之外、本宅家老壹人　御守殿方ゟ此
方より相勤ゟ、御用人貳人・大隅守近習役壹人　御守殿
方添御用達壹人御供可申付ゟ哉、此外　御守殿方ゟ相勤
ゟ役ゝ、先達ゐ書付差上ゟ者共之内よりも、見合を以御
供可申付ゟ哉、御先御供・御輿廻御供人數之儀、御附之
御方外幾人程可申付ゟ哉、加賀守様御方承合ゟ處、別紙
之通申來ゟ、何分ニ爲御差圖次第可申付ゟ間、此段相伺
ゟ様ニと、大隅守申付ゟ、以上、

(朱)「享保十四年」十一月「十八日」　松平大隅守内(賀通)　土岐半助

2422

継豊公御譜中

同年十一月二十一日、江都芝邸表門造替既就矣、繼豊從二
先規一出レ自二西裏門一(午刻葺二花色熨斗目・水色肩衣袴一、隊二四本道具一、
国老一人・用人近習役一人・納戸奉行一人・小納戸一人・中通目附役二人・
側小姓四人隨從也)、叛通二表門一、著二座于書院一、爲二初通之
壽一、是依二昏期既定一也、

2423

仝上

正文在文庫

竹姫君様御入輿以後、屹立御出又ゟ御慰并出火等之節御
(朱)「御張紙

出之刻、御供廻・御行列何様可仕ゟ哉、御先拂も可有之
(火事等之節御供配り等、御用人申談可被定置候」
哉、且又御挑燈ゟ御紋附相調可申哉之旨、別紙寫之通、
松平左近將監様ゟ相伺ゟ處、御張紙寫之通、右之儀ゟ其
(朱)「御張紙
元様ゟ得御差圖ゟ様と、昨晩被仰渡ゟ、如何可仕ゟ哉、
(御挑燈者御紋附ニ可被致候、員數之儀者兄計次第可被致候」
何分ニ爲御差圖次第可申付ゟ、御挑燈之儀此方ニゐ相調申
儀ゟハ、高御挑燈・其外之御挑燈幾張程調方可申付ゟ
哉、員數共被仰渡度ゟ、此段相伺ゟ様大隅守申付ゟ付、
別紙相添差出申ゟ、以上、

(朱)「享保十四年」十一月「二十三日」　松平大隅守内　土岐半助

2424

仝上

御入輿之節爲御持被遊ゟ御道具之内、左之通相受取又ゟ
御守殿ゟ相運ゟ様ニ可申付ゟ哉、

一御　註目御弓　　受取人　御守殿方ゟ本宅より
　　相勤ゟ御用人　　貳人
　　運人　　同大番

貳人

右御畳目受取御作法之儀、小笠原平兵衛様ハ可得御差圖ハ、

一御守脇差

受取人

御守殿方ハ本宅より

相勤ハ御用人

壹人

右受取之節差添

同御鎖口添番

貳人

一御長刀

受取人

大隅守近習役

貳人

運人

御守殿大番

貳人

右中御門之内ニハ相請取

御守殿ハ相運ハ様ニ可仕ハ哉、

一御貝桶

御守殿御鎖口添番

四人

右御守殿中之御門外ニハ相受取せ、直ニ御受取渡之御座ハ相運、備置ハ様可仕ハ哉、

一御召替御輿

御守殿大番

四人

一御挾箱

同大番

四人

一御輿建

同大番

貳人

一御傘

同大番

壹人

一御茶辨當

同大番

貳人

一御簑箱

同大番

貳人

右中御門之外ニハ相受取せ、直ニ

御守殿ハ相運ハ様ニ可申付ハ哉、加賀守様御方承合ハ

處、左之通申來ル、

新番頭　徒頭　徒　貳人

一御蟇目御弓

受取様御作法之儀、小笠原平兵衛様御差圖有之ル由、

新番頭　徒頭　徒　貳人

一御長刀二振

中御門之内御白州ニ而受取之、右之徒ニ相渡持入ル由、

松姫君様附

御用人　徒　貳人　新番四人　徒　四人　徒　貳人　徒　貳人　徒　壹人　徒　壹人　徒　壹人

一御守脇差
一御貝桶
一御召替御輿
一御挾箱
一御輿建
一御傘
一御茶辨當
一御簑箱

右中御門之外ニ而何れ共受取之、其節徒頭・同小頭壹人罷出差引之ル由、

右之通加賀守様御方より申來ル得共、此方ニ而勘辨仕、

(朱)「御張紙」御蟇目・御長刀請取人、右役之者共ニ可申付と奉存ル、

何之通可被致候」乍然、右役より以下之者ニ茂可申付ル哉、何分ニ茂御差圖次第奉存ル、此段相伺ル様と、大隅守申付ル、以上、

(朱)「享保十四年」十一月「二十四日」　松平大隅守内　相良彌一兵衛(長主)

2425

全上

十一月廿一日

御留守居　大久保下野守(忠位)　諏訪若狭守(頼秋)

大目付　興津能登守

御留守居番　末高半左衛門(政峯)　石原勘左衛門(安種)

御廣敷御用人　本目權左衛門(親良)

御目付
本多彌八郎(正純)
松前主馬(廣隆)
石河庄九郎(政朝)
北條新藏(氏英)
大岡右近(忠任)
山岡五郎作(景久)
大御番頭
小堀備中守(政孝)
組共
御徒頭
朝岡靱負(方喬)
組共
同
小笠原縫殿介(持廣)
組共
同
梶川三之丞(忠榮)
組共
小十人頭
曽我七兵衛(助賢)
組共
同
山岡源右衛門(景恩)
組共

2426

右、來月十一日
竹姫君様御入輿之節御供被　仰付ハ、
(朱)「享保十四年」

仝上　(朱)「在口裏」　松平大隅守ハ

竹姫君様御入輿以後御本丸ハ初ゑ被爲　入ハ節被進物
竹姫君様より
公方様ハ
巻物五
白銀貳拾枚
三種二荷
大納言様ハ
巻物五
三種二荷
一位様ハ

綿貳拾把
二種一荷（家継生母）月光院様ハ
右御同様（綱吉側室）瑞春院様ハ
綿十把
一種一荷（綱吉養女）養仙院様ハ
右御同様（家宣側室）法心院殿ハ
巻物三
一種（家宣側室）蓮浄院殿ハ
同断
（綱吉側室）壽光院殿ハ者、あなた被仰合次第たるへくハ、
右衛督殿ハ
二種一荷
小五郎殿ハ
同断
被下物

老中
安藤對馬守
松平右京太夫（大）
巻物五充
但御祝儀之御使勤ハ老中ハ者、右之外ニ巻物三可被下ハ、
大納言様御使對馬守ハも同断、
同三充
（側用人）石川近江守（總茂）
若年寄
松平能登守（乗賢）
御留守居
大久保下野守
酒井隱岐守
仙石丹波守
諏訪若狭守
同二充
三室
豐岡
高瀬
外山
尾上
表使三人
同三充
同二充

白銀五十枚　惣女中

大納言様女中

白銀三枚充　瀬川　瀧津

同貳枚充　表使二人

同三十枚　惣女中

一位様女中

白銀三枚充　大年寄三人

同貳枚充　小上﨟二人

同壹枚充　中年寄三人

同断　表使二人

白銀貳拾枚　惣女中

養仙院様女中

金五百疋充　大上﨟一人　大年寄二人

同三百疋　小上﨟一人

同貳百疋充　御年寄分五人

同断　表使四人

白銀十五枚　惣女中

一壽光院殿女中ハ之被下物者、あなた思召次第ニハ、

以上

(朱)「享保十四年十一月廿二日」

2427

全上御諸中

御入輿之御當日　御通筋ハ此方家來之者并足輕所々ハ付置

(朱)「御設紙

御入輿之御左右　御守殿又者本宅ハ申通ハ様ニ申付度

此通可被致候」

ハ、加賀守様御方承合候處、大手・神田橋・松平肥後守様新御屋鋪前・正平橋・湯嶋廣小路・本郷三丁目、右之所々ハ徒之者・足輕等段々被付置

御守殿御本宅ハ御注進申ハ旨、申來ハ、此方之儀ハ右之通家來并足輕付置申度ハ、此段得御差圖ハ様ニと、大隅守申付ハ、以上、

(朱)「享保十四年」十一月「二十二日」　松平大隅守内(貞紀)　堀萬右衛門

2428

全上

御入輿以後　竹姫君様初ゟ

(朱)「御張紙ニ而

御本丸ハ被爲　入候節、本宅より御供人數之儀、松平加

竹姫君様初而　御本丸江被為入候節　御供行列之儀者

賀守様御方承合、別紙寫之通松平左近將監様ハ相伺、尤

御用人江可被申談候」

加賀守様御方より申來ハ別紙寫書付ハ相添差出候處、

御張紙を以、加賀守時之通可致ゟ、其元様ニ可得御差圖旨被仰渡ゟ、右御供、本宅より家老一人　御守殿方ニ本宅より相勤ゟ御用人二人・大隅守近習役一人　御守殿方添御用達一人之儀ニ、弥以左近将監様御差圖之通御供相勤ゟ様可申付ゟ、右之外　御守殿方ニ相勤ゟ役〻、別紙之通御座ゟ、爲御見合、役名人數書共ニ相添差上申ゟ、右之内御先御供　御輿廻末〻迄人數之儀

公義より御附之御方外ニ、本宅より幾人程可申付ゟ哉、

(朱)「御張紙ニ而何分ニ茂御差圖次第可仕ゟ、此段相伺ゟ様大隅守申付候」

別紙三通之趣令承知候

付、別紙書付寫三通差上申ゟ、右　御守殿方ニ本宅より相勤ゟ役〻人數書之儀茂、先達而左近将監様ニ差上置申ゟ、此段茂爲御存申上ゟ、以上、

(朱)「享保十四年」十一月「二十三日」　松平大隅守内　土岐半助

2429

仝上

御入輿之當日、御貝桶・御輿御渡之御方様を始　御守殿御勤相濟、於本宅御饗應之儀、奉伺ゟ處、熨斗鮑・吸物・酒計差上、一類之内罷出御挨拶仕ゟ様ニと、御張紙を以被仰渡、奉得其意ゟ、弥御差圖之通、於本宅大書院、右之御方様并御供之若御年寄様ニ、熨斗鮑差上、引次鰭之吸物・木地三方ニ而土器、御銘〻ニ差上、御挾肴・銚子三篇差上ゟ様可仕ゟ、且又

御入輿御供御留守居衆・大御番頭衆・大御目附衆・御目附衆・小十人御頭衆・御徒頭衆・御廣敷番頭衆・御留守居番衆之御方様ニも、本宅於表書院熨斗鮑差上、引次鰭之吸物・木地三方土器・御挾肴・銚子三篇差上、并大御番御組頭衆・小十人御組頭衆、本宅於別座敷右同事之御饗應仕、大御番衆・小十人衆・御添番衆・御徒目付組頭衆・御徒目付衆・御徒衆ニ茂、本宅於別座敷熨斗鮑出之、鰭之吸物・三方土器・挾肴・銚子三篇出之ゟ様仕筈御座ゟ、右御役〻御人數御幾人程御供御勤筈御座ゟ哉、御人數前以被仰渡被下度奉存ゟ、左ゟハ、、其御役〻之御格合ニより承合、座構を茂仕置度御座ゟ、加賀守様御方承合ゟ處

御入輿御供之内、秋元但馬守様・大久保加賀守様・加藤越中守様此御三人様ニ御熨斗差上、追付引之鰭之御吸物・御土器木地三方御人〻前ニ差上之、御肴木具八寸・御銚子三篇被差上ゟ由、且又御供之御留守居衆御貳人・大御番頭衆御一人・大御目附衆御貳人・御目附衆御七人・小十人御頭衆御二人・御徒頭衆御三人・御廣敷御番頭衆御

二人・御留守居番衆御二人御同座ニゐ御饗應右同前ニ御座ハ由、又ハ大御番衆・小十人衆・御徒目付衆・御徒衆、右之分ハ別御座ニゐ、鰭之御吸物・御肴一種・御酒三篇被出之ハ旨、申來ハ、此節之儀ハ、右之通御饗應仕筈ニ相心得罷在ハ付、御人數之儀奉得御差圖ハ樣ニと、大隅守申付ハ、以上、

(朱)「御張紙御供之人數以別紙相達候」

(朱)「享保十四年」十一月「二十四日」　松平大隅守内　相良彌一(長主)兵衛

2430

仝上

(朱)「右口奥」

竹姫君樣御入輿以後　御本丸ニ初ゐ被爲　入ハ節　松平大隅守ニ

一位樣女中ニ被下物之内

中年寄　五人

表使　三人

先達ゐ相渡ハ書付ニハ、中年寄三人・表使二人と有之ハ得共、右之通ハ間可被得其意ハ、

(朱)「享保十四年十一月二十四日」

2431

仝上

一御入輿之當日　御守殿并本宅駒寄門之内、所々番人又ハ立番之者、不殘

御通筋之分ハ引拂せ

御入輿相濟ハ以後、勤番仕ハ樣可申付ハ哉、尤其節家老并頭分之者迄ハ、御差圖之通　御守殿御門外ニ罷出、御通筋ニ蹲踞可仕ハ、且又門外屋鋪外廻立番之者・辻番人等　御入輿之節　御通筋之分ハ引拂ハ樣ニ可申付ハ哉、加賀守樣御方承合候處、御門内之番人等ハ都ゐ引拂、御家老并頭分迄御通節ニ蹲踞仕ハ、御門外堅メ之儀ハ舊記不相見得由、申來ハ、

(朱)「御張紙加賀守時之通可被心得候、屋鋪外廻立番之者・辻番人等、御通筋之分引拂候樣可被致候」

一御入輿以後　御城ニ被爲　入ハ節ゐ、右之所々　御入輿當日之通、番人・立番等申付筈御座ハ、其節ゐ　御通輿之砌ハ右番人等引拂ハ儀、如何可仕ハ哉、加賀守樣御方承合ハ處　御入輿以後御登　城之節ハ　御通筋・小路ニ、徒之者・足輕等差出被置ハ旨、申來ハ、

(朱)「御張紙加賀守時之通可被致候」

右之通御座ハ、何分ニゐ御差圖次第可申付ハ、此段相伺ハ樣、大隅守申付ハ、以上、

(朱)「享保十四年」十一月「二十四日」　松平大隅守内　相良彌一兵衛

2432

重年公御譜中

同年十一月二十五日(重年)善次郎爲二懿親島津兵庫久季之養子一、而同月二十六日移二住久季家一矣、

2433

継豊公御譜中

正文在文庫

一御入輿以後　御本丸ニ始テ被爲　入候節

竹姫君様より

公方様　大納言様ニ被進物、其外右衛門督(田安宗武)様・小五郎(一橋宗尹)様・御女姓様方ニ被進物、并御本丸・西御丸御女中方又ハ御酌・御見送之御女中方被下物之儀相伺ヶ處、委細御書付を以被仰渡趣、奉得其意ヶ、

一右御城ニ被爲　入ヶ朝、御使御勤之御老中様ニ被下物相伺ヶ處、是又御書付を以被仰渡、承知仕ヶ、

一御入輿之節　御輿・御貝桶御渡之御方様、其外御供之(朱)「御張紙」御役人様方ニ　此被下物ニ不及候、併加賀守方被承合、替儀も有之候ハヽ、猶又可被申聞候」御入輿以後被下物之儀、如何可有御座哉之旨、右同前ニ奉伺ヶ處、此儀計御張紙又ハ御別紙ニテ被仰渡ヶ御書面ニ何様ニ茂相見得不申ヶ、右御勤ニ付テハ

竹姫君様より御祝物被下ヶ儀、如何可有御座ヶ哉、重テ奉得御差圖候様と、大隅守申付ヶ、以上、

(朱)「享保十四年」十一月「二十五日」　松平大隅守内(貫通)　土岐半助

2434

仝上

正文在文庫

(朱)「在口裏」　松平大隅守ニ

御入輿之節御道筋、御道具參ヶ節も同斷

内櫻田御門より外櫻田虎御門、藤堂伊豆守屋敷前より相良遠江守屋敷脇、それより土器町通、赤羽橋、有馬中務大輔屋敷前より左ニ、大隅守屋敷御守殿御門より被爲入、

(朱)「享保十四年十一月二十六日」

2435

仝上

正文在文庫

御入輿相濟候以後

公方様　大納言様ニ大隅守・上總介・益之助・上總介奥御禮申上ヶ節獻上物之儀、先達テ被仰渡、上總介より茂一類之内名代ニテ差上、益之助・上總介奥より茂使者を以獻上可仕旨、是又承知仕ヶ、

大納言様ニ御禮、大隅守・上總介名代、阿部伊勢守并益

2436

之助・上總介奥より使者を以獻上物仕候儀、都ゐ　西之御丸ゟ登　城仕こゐ可有御座と奉存ゟ、此段奉伺ゟ様ニ
(朱)「御張紙」
と申付ゟ、以上、
可為伺之通候」

(朱)
「享保十四年」十一月「二十六日」　松平大隅守内　相良彌一兵衛

仝上

正文在文庫

一御入興之當日爲御迎、阿部伊勢守登　城仕筈被仰渡置ゟ、右之節、何時登　城仕、於　御城ゟ何れ之御役人様方ゟ相附、爲御迎登　城仕ゟ段可申上ゟ哉、加賀守様御方承合ゟ處、左之通申來ゟ、爲御迎故加賀守様御名代、御入興當日朝六ツ時、松平長門守様御登城、於御白書院被謁御老中様御口上、今日松姫様爲御迎同姓加賀守より私差上申ゟ由、被仰上候處、目出度思召ゟ、追付可被達　上聞旨、被仰聞ゟ由、暫御扣、御目附衆ゟ御聞合ゟ處、御老中様ゟ御伺之躰こゐ、御勝手次第御退出被成ゟ様と、御挨拶御座ゟ由、加賀守様御方より申來候、

一御入興以後御機嫌能被遊御座ゟ段、松平備前守登　城仕申上筈御座ゟ、右刻限之儀ゟ　御入興被遊早速登城仕可申上ゟ哉、又ゟ御供之御老中様、大隅守本宅ゟ御越御披已後登　城可仕哉、於　御城ゟ何れ之御役人様方ゟ相附、御機嫌能段可申上ゟ哉、

加賀守様御方承合ゟ處、御入興其儘松平故飛驒守様御登　城、御機嫌能被爲入ゟ旨被仰上ゟ由申來ゟ、右兩人登　城刻限之儀、又ゟ何れ之御役人様ゟ可申上ゟ哉、何分ニゟ御差圖次第奉存ゟ、此段相伺ゟ様と、大隅守申付ゟ、

一御入興當日、御守殿并本宅表門通、往還人留可仕ゟ哉、

加賀守様御方承合ゟ處、人留之儀ゟ彼御方より御取捌無御座ゟ由申來ゟ、

右如何可有御座哉、此段ゟ得御差圖ゟ様申付ゟ、

以上、

(朱)
「享保十四年」十一月「二十六日」　松平大隅守内　相良(長)彌(主)一兵衛

(朱)「御張紙」
御入興御當日五時前、阿部伊勢守登　城、謁御奏者番退出ゟ様、可被達候、御入興被遊ゟと早速松平備前守登　城、謁御奏者番退出ゟ様ニ可被達候、

此儀ゟ觸有之ゟ間、加賀守時之通可被心得ゟ、

2437

仝上

正文在文庫

御入輿以後　竹姫君様御守殿ニ、鳥居丹波守より御祝儀御機嫌伺又ハ献上物等仕ル儀、先達ゐ丹波守ゐ相伺ル處、不及其儀旨被仰渡ル由、私方ニ茂申聞ル、尤右願相立ル節茂、内々申談爲申出事ニル、丹波守儀　御入輿付ゐハ、最初　御内意被仰聞候節より、右之御用ニ相係、猶又滞府之願を茂申上、御貝桶請取之勤迄願之通被　仰付、於私茂難有仕合奉存ル、右勤付ゐ　御入輿之節茂　御通筋ニ罷出ル様ニと被　仰渡　御守殿ニ罷通、御貝桶を茂請取申筈ニル、且又此程　御入輿御日限之儀茂、丹波守被爲召被仰渡ル、右段々之次第ニ御座ル得ハ、外之親類共と茂分ケ茂相替ル様ニ存ル、可罷成儀ルハ、丹波守事右之一筋を以、御入輿以後　御守殿ニ罷出、御祝儀又ハ向後御機嫌伺献上物等之儀、阿部伊勢守・嶋津但馬守同前

(朱)「御張紙
丹波守事、此度御貝桶を茂請取候儀ニ候間各別之事故　竹姫君様御實父江為御祝儀参上、御祝儀物茂差上候様ニ可被達候、外ニ親類之筋茂有之儀候間、向後御機嫌伺献上物等之儀、不及其儀候」

被仰付被下度奉存ル、此段私より奉願ル條、何分ニ茂宜御差圖奉賴ル、以上、

(朱)「享保十四年」十一月廿六日　松平大隅守

2438

仝上

正文在文庫

御入輿以後　竹姫君様初ゐ

御本丸ニハ被爲　入ル節、被進物并被下物之儀、先達ゐ奉伺ル處、御書付を以被仰渡趣承知仕ル、右被下物之内ニ、松平右京太夫(大)様ニハ御老中様御同様ニ、巻物五被下筈ニ被仰渡ル、右ニ付ゐハ、大隅守より茂、御老中様方御同様ニ、祝物進達仕ル様可有御座ル哉、只今迄何そ付ゐ祝物等御老中様御同前ニ進達爲仕儀ハ無御座ル得共、　御入輿格別之御儀、殊更　竹姫君様より茂被下物御座ル得ハ、大隅守も祝物進達可仕哉、何分ニ茂御差圖次第奉存ル、

(朱)「御張紙
被贈物ニ不及候」

此段相伺ル様と、大隅守申付ル、以上、

(朱)「享保十四年」十一月「二十七日」　松平大隅守内　相良彌一兵衛(長主)

2439

仝上

正文在文庫

御入輿以後初ゐ

御本丸ニハ被爲　入ル節

竹姫君様より被進物其外被下物之儀、大隅守方ニゐ用意可仕哉之旨、委細書付奉伺ル處、御別紙を以被仰渡趣承

知仕り、右伺之内、御酌又ハ御見送御勤之御女中方末々迄被下物之儀ハ、如何可有御座哉之旨、相伺り處、右御勤之御女中方ニ被下物之儀、何様ニハ不被仰渡り、大隅守より ハ、御酌・御見送御勤之御女中方末々迄、御銘々贈物仕り様ニと、御張紙を以被仰渡り、格別之御勤ニ御座り得ハ、右御勤之御女中方末々迄

竹姫君様よりも被下物可有御座り哉、左りハヽ、其品・員數共御差圖次第ニ用意可仕り、若又大隅守より贈物ニ準、此方ニ而品・員數勘辨仕、御附之御用人衆ニ及御内談、相究被下り筋ニハ可有御座り哉、先達ハ申上り様、加賀守様御方承合り處、右躰之儀相知不申之旨申來り、依之、此程奉伺り書面御張紙寫、且又御別紙を以被仰渡り御書付寫、爲御見合相添差上申り間、何分ニハ御差圖被下度奉存り、此段重而相伺り様ニと、大隅守申付候、以上、

（朱）「享保十四年」十一月「二十七日」　松平大隅守内　土岐半助

2440

全上

正文在文庫

御入輿之節御輿・御目桶御渡之御方様、其外御供之御役人様方ニ、御入輿以後

竹姫君様より御祝物被下り儀、如何可有御座哉之旨、奉伺り處、此被下物ニ不及り、併加賀守様御方承合、替儀ハ御座りハヽ、猶又可申上旨、御張紙を以被仰渡、承知仕り、右被下物之儀付而ハ、先達而加賀守様御方承合り處、右之御方々様ニ被下物之儀不相知由申來り、此段申上り、以上、

（朱）「享保十四年」十一月「二十七日」　松平大隅守内　相良彌一兵衛

（朱）「右口裏」　松平大隅守ニ

2441

正文在文庫

一竹姫君様只今迄被召仕り女中御充行

松姫君様被召仕り女中より御充行高之者ハ、其通之御充行ニ而被差置り事、

一竹姫君様女中御充行

松姫君様女中御充行より少く有之分ハ

松姫君様女中之通増り而被下り事、

一此度被召抱り女中を始、向後被召出り分ハ

松姫君様女中御充行之通たるへくり事、

右向後之定書御用人ニ委細申達置り間、可被得其意り、

以上、

（朱）「享保十四年」酉十一月「二十八日」

2442

継豊公御譜中

同年十一月二十八日　上使堀三六郎使番來二芝邸一、因二先規一、賜下尊鷹所レ攫之鶴於繼豊上也、即日登　レ營欲レ奉レ謝レ之、然　上使饗應畢退出之後過二申刻一、以故繼豊不レ及二登　レ城禮謝一、詣二執政各之第一申二謝之一、

湯之木　九月より四月迄拾五束ノ、五月より八月迄弐拾束ソ、

五菜銀貳百目壹分

小上臈
てり

貳拾五石

金四拾兩

五人扶持内　壱人ハ上ゝ白男扶持　四人ハ中白　女扶持

夏冬共

薪拾五束

炭拾表

右同斷

油貳ケ所内　有明壱　半夜壱

湯之木　九月より四月迄拾三束ノ、五月より八月迄拾七束ノ、

五菜銀百七拾目

大年寄
岡田

八拾石

七人扶持内　壱人ハ上之白女扶持　六人ハ中白　女扶持

夏冬共

薪拾束

炭六俵

右同斷

油貳ケ所内　有明壱　半夜壱

湯之木　九月より四月迄九束ノ、五月より八月迄拾束ソ、

2443

仝上

正文在文庫

竹姫君様附

女中御充行書付寫

大上臈
とみ

九拾石

八人扶持内　壱人ハ上ゝ白女扶持　七人ハ中白　女扶持

夏冬共

薪貳拾束

炭拾五俵

右同斷

油三ケ所内　有明壱　半夜弐

五菜銀百貳拾四匁貳分

貳拾五石

金四拾兩

五人扶持内 壱人ハ上之白男扶持 四人ハ中白女扶持

薪拾五束　夏冬共

炭拾俵　右同斷

油貳ケ所内 有明壱 半夜壱

湯之木 九月より四月迄拾三束ノ、五月より八月迄拾七束ノ、

五菜銀百七拾目

局

年寄 藤え

右同斷

若年寄 岩田

拾五石

金三拾兩

四人扶持内 壱人ハ上白男扶持 三人ハ中白女扶持

薪拾束　夏冬共

炭六俵　右同斷

油貳ケ所内 有明壱 半夜壱

湯之木 九月より四月迄九束ノ、五月より八月迄拾束ノ、

五菜銀百貳拾四匁貳分

同斷 高野

右同斷

同斷 清崎

拾石

金貳拾七兩

三人扶持内 壱人ハ上白男扶持 弐人ハ中白女扶持

薪拾束　夏冬共

炭六俵　右同斷

油貳ケ所内 有明壱 半夜壱

湯之木 九月より四月迄九束ノ、五月より八月迄拾束ノ、

五菜銀百貳拾四匁貳分

御中臈頭 野崎

拾貳石

金貳拾八兩

三人扶持内　壱人ハ上白男扶持　弐人ハ中白女扶持
薪拾束　夏冬共
炭六俵　右同断
油貳ケ所内　有明壱　半夜壱
湯之木　九月より四月迄九束ノ、　五月より八月迄拾束ノ、
五菜銀百貳拾四匁貳分

拾石　御中臈　かん
金貳拾七兩
三人扶持内　壱人ハ上白男扶持　弐人ハ中白女扶持
薪拾束　夏冬共
炭六俵　右同断
油貳ケ所内　有明壱　半夜壱
湯之木　九月より四月迄九束ノ、　五月より八月迄拾束ノ、
五菜銀百貳拾四匁貳分
右同断　同断　りゑ　同断

右同断　るり
同断　つれ
右同断
同断　みを
三拾五石
四人扶持内　壱人ハ上白女扶持　三人ハ中白女扶持
薪拾束　夏冬共
炭六俵　右同断
油貳ケ所内　有明壱　半夜壱
湯之木七束　夏冬共
五菜銀百貳拾四匁貳分
右同断　同断　すわ
右同断　同断　れん

三拾石
四人扶持内 壱人ハ上白女扶持 三人ハ中白女扶持
薪拾束
炭六俵
油貳ケ所内 有明壱 半夜壱
湯之木七束
五菜銀百貳拾壹匁貳分

御小姐
ちさ
夏冬共
右同断

三拾石
四人扶持内 壱人ハ上白女扶持 三人ハ中白女扶持
薪拾束
炭六俵
油貳ケ所内 有明壱 半夜壱
湯之木七束
五菜銀百貳拾壹匁貳分

同断
さゑ
夏冬共
右同断

三拾石
四人扶持内 壱人ハ上白女扶持 三人ハ中白女扶持
薪拾束
炭六俵
油貳ケ所内 有明壱 半夜壱
湯之木七束
五菜銀百貳拾壹匁貳分

表使
森田
夏冬共
右同断

八石
金貳拾兩
貳人扶持内 壱人ハ上白男扶持 壱人ハ中白女扶持
薪拾束
炭六俵
油貳ケ所内 有明壱 半夜壱
湯之木七束
五菜銀百貳拾壹匁貳分

同断
早川
夏冬共
右同断

貳拾五石
四人扶持(内脱) 壱人ハ上白女扶持 三人ハ中白女扶持
薪拾束
炭六俵

同断
成海
夏冬共
右同断

御右筆
りさ

油貳ケ所内 有明壱 半夜壱
湯之木七束
五菜銀百弐拾壱匁弐分

夏冬共

右同断

同断 りを

右同断

同断 こま

八石
金弐拾兩
貳人扶持内 壱人ハ上白男扶持 壱人ハ中白女扶持
薪拾束
炭六俵
油貳ケ所内 有明壱 半夜壱
湯之木七束
五菜銀百弐拾壱匁弐分

夏冬共

右同断

夏冬共

御次頭 浅野

御次

八石
金拾七兩
貳人扶持内 壱人ハ上白男扶持 壱人ハ中白女扶持
薪八束
炭 冬五俵 夏三俵
油有明壱
湯之木六束
五菜銀百目

夏冬共

夏冬共

同断 はま

七石
金拾七兩
貳人扶持内 壱人ハ上白男扶持 壱人ハ中白女扶持
薪八束
炭 冬五俵 夏三俵
油有明壱
湯之木六束
五菜銀百目

夏冬共

夏冬共

同断

右同断　　ろく

右同断　　同断　つや

七石　　呉服之間　さわ

金拾七兩

貳人扶持内　壱人ハ上白男扶持　壱人ハ中白女扶持

薪八束　　夏冬共

炭　冬五俵　夏三俵

油有明壱

湯之木六束

五菜銀百目　　夏冬共

右同断　　同断　とも

同断　りう

右同断

貳拾貳石

三人扶持内　壱人ハ上白女扶持　弐人ハ中白女扶持

薪八束

炭　冬五俵　夏三俵

油有明壱

湯之木六束　　夏冬共

五菜銀百目

右同断　　同断　さと

同断　たみ

六石

金拾三兩

貳人扶持内　壱人ハ上白男扶持　壱人ハ中白女扶持

薪八束　　夏冬共

炭　冬五俵　夏三俵

同断　つよ

油有明壱
湯之木六束
五菜銀百目
夏冬共

七石
金貳拾兩
貳人扶持内 壱人ハ上白男扶持 壱人ハ中白女扶持
薪八束
炭 冬五俵 夏三俵
夏冬共

油半夜貳
湯之木六束
五菜銀百目
夏冬共

六石
金拾三兩
貳人扶持内 壱人ハ上白男扶持 壱人ハ中白女扶持
薪八束
炭 冬五俵 夏三俵
夏冬共

三之間
ふさ

油有明壱
湯之木六束
五菜銀百目
夏冬共

右同斷
同断 きん

拾九石
三人扶持内 壱人ハ上白女扶持 弐人ハ中白女扶持
薪八束
炭 冬五俵 夏三俵
夏冬共

油有明壱
湯之木六束
五菜銀百目
夏冬共

右同斷
同断 とま

同断 かな

右同断

六石
金拾兩
貳人扶持内　壱人ハ上白男扶持　壱人ハ中白女扶持
薪八束
炭三俵
油有明壱
湯之木六束
五菜銀四拾目

御末　貳人
夏冬共
右同断　充
夏冬共

五石
金六兩
貳人扶持内　壱人ハ中白男扶持　壱人ハ中白女扶持
薪六束
炭弐俵
油半夜壱
湯之木六束
五菜銀弐拾五匁

御中居　三人
夏冬共
右同断　充
夏冬共

四石
金弐兩弐分
壹人扶持中白女扶持
薪三束
油半夜半分
湯之木弐束
五菜銀拾弐匁

使番　三人
夏冬共　充
夏冬共

五石
壹人扶持中白女扶持
薪三束
油半夜半分
湯之木壹束七分
五菜銀拾弐匁

御右筆間小間遣　三人
夏冬共　充
夏冬共

三石

御はした　拾貳人

金弐兩
壹人扶持中白女扶持
薪三束　夏冬共
油半夜半分　充
湯之木弐束　夏冬共
五菜銀拾弐匁
一竹姫君様只今迄被召仕ゟ女中御充行、
松姫君様被召仕ゟ女中ゟ御充行高之者ハ、其通之御充行こゝ被差置ゟ事、
一竹姫君様女中御充行
松姫君様女中御充行ゟ少く有之分ハ
松姫君様女中之通、増ゟゝ被下ゟ事、
一此度被召抱ゟ女中を始、向後被召出ゟ分ハ
松姫君様女中御充行之通たるへくゟ事、
以上
(朱)「享保十四年」酉十一月「二十八日」

2444

仝上
正文在文庫　(朱)「在口裏」　松平大隅守ゟ
御入輿之節御供人數

老中二人
若年寄一人
御留守居二人
大御番頭一人
大目付一人
御留守居番二人
御廣敷御用人一人
御目付六人
御徒頭三人
小十人頭二人
御廣敷番〻頭二人
大御番三十人組頭共
小十人三十九人組頭共
御徒目付九人組頭共
御廣敷添番十人
御徒押四人
御徒七十五人組頭共

右之分ゟ吸物・酒計御出し可有之ゟ、
(朱)「享保十四年十一月二十八日」

2445

仝上

正文在文庫

御入輿以後

公方様　大納言様より御老中様御使被進ル節者、御鎖口内御客座ニ、其元様御案内被成儀ニ御座ル哉、尤御祝物等ハ右之御座ニ御備被成、御口上者其元様御承知被成儀ニ御座ル哉、又者大御年寄衆・御局抔之内御承知之儀ニ御座ル哉、右之節御饗應之儀者、如何被仰付儀ニ御座ル哉、尤右御使御勤之御老中様ニ者、巻物三巻被下候様と、松平左近將監様より被下物御一紙之内ニ相見得申ル付ヲ、本宅ニヲ用意仕筈御座ル、右御使被進ル付ヲ、委細之儀御差圖被成可被下ル、右之當日本宅ニハ　上使被成下筈御座ル、其節者本宅ニヲ鰭之御吸物・嶋臺差上、御盃御取替被申、御道具進達被致筈御座ル、

御守殿ニヲ之御饗應之儀、如何可有御座哉と、得御差圖申ル、以上、

（朱）「享保十四年」十一月

（朱）「御張紙」

上使之節、此方共出向ルヲ、御鎖口内御客座ニ御案内申、御祝儀物右之御座敷ニ居り、御口上者大上﨟承被申ル、早ヲ御吸物出ル已後、御請相濟申ル、

大納言様上使同斷、

被下物之儀承知申ル、

2446

仝上

正文在文庫

御内々得御差圖ル覺

一御入輿之節御貝桶御請取渡相濟、御鎖口ニ御女中之内ヵ被相通ル儀者、其元様ヵ御差圖被成ニヲ可有御座と、存申候、

一御輿御請取渡相濟ルヲ、右御請取渡之御方、其御座を御披キ候以後、御鎖口ニ御供御女中之内より奉守御入輿被遊ニヲ可有御座ル、此儀も其元様より御差圖被成儀ニヲ可有御座と存申ル、右之御輿御用相濟、御鎖口ニ御女中より被持參ル以後者、いつれ之御座ニ相直置可申ル哉、

一御入輿以後　竹姫君様御本丸ニ初ヲ被爲　入ル節

公方様　大納言様を始、被進物之儀并被下物之儀、大隅守方ニヲ用意仕儀ニ可有御座哉之旨、松平左近將監様ニ相伺ル處、以御書付品・員數被仰渡、大隅守方ニ

ゐ用意仕筈ニ御差圖有之ゟ、右被進物・被下物之内
壽光院様（綱吉側室）ハ之御祝物ハ、被仰合次第ニ可有御座ゟ、尤
壽光院様御方御女中衆ハ之被下物ハ　竹姫君様思召次
第可有之儀ゟ由、左近將監様より被仰渡ゟ、依之　壽
光院様ハ被進物品・員數、又ハ御召仕之御女中衆ハ被
下物品・員數、共ニ被仰聞度ゟ、左ゟハヽ御差圖之通
用意可仕ゟ、此段得御内意申ゟ、
一御入輿相濟、初ゐ御　本丸ハ被爲入還御之節　竹姫君
様ハ大隅守より御祝物被差上、御膳をも差上被申度被
存ゟ、且又右之節、其元様を始御附〻之御方ハ及、祝
ゟゐ料理進、祝物を及御贈被申心得ニ御座ゟ、
一御入輿之當日又ハ　御入輿以後、御城より御女中方御
使ニ御越且又御參上之節ハ、何方御鎖口より可被爲入
ゟ哉、御下乘所之儀被仰聞度ゟ、尤御下乘所ハ御乘物
建ゟハヽ、御附之御女中方之内誰そ御出會、御案内ニ
ゐ御通被成儀ニ及可有御座ゟ哉、此方爲心得、委細之
儀共被爲仰聞置被下度ゟ、且又此方一門又ハ脇方ゟ爲
伺御機嫌、年寄・女中抔差上ゟ節、此方家格之通、御
勝手口板之間下薄緣ニゐ下乘仕、御鎖口ハ罷通扣居、
御奥ハ申通ゟハヽ、御案内次第御差圖之所迄罷通ゟ様
可仕ゟ哉、
一御入輿之時分、御先御供之御女中方乘物、何方御座ハ
居置下乘可有之哉、其御格〻委細御差圖可被下ゟ、
一御入輿以後、御附之御方ハ大隅守逢可被申事ゟ、其節
ハ、其許様を始何御役迄逢可被申ゟ哉、且又年頭其外
折目ニ、於本宅逢被申ゟ御役〻之儀、いつれ之御役迄
と御差圖被下度ゟ、
一御三家様・御家門様方之内、爲伺御機嫌御參被成儀及
御座ゟ哉、且又此方一門之衆、爲伺御機嫌參上之節ハ、
いつれ之御座迄御通可被成ゟ哉、右之節ハ、其元様又
ハ御用達之御方、御出會被成儀御座ゟ哉、御會釋之程
被仰聞度御座ゟ、
一御三家様・御老中様・若御年寄様方御參被成儀も御座
ゟ哉、其通御座ゟハヽ、上御鎖口内御客座ハ御通被成
ニゐ可有御座哉、右之節、此方家老共　御守殿御玄喚
前ハ罷出儀ニ及可有之哉、且又御留守居衆・御醫師衆
御參上之節ハ、上御鎖口内御客座ハ御通被成儀ゟ哉、
此等之儀及委細被仰聞置被下度御座ゟ、
一御本丸・西之御丸又ハ何方ハも被爲　入、若夜ニ入
還御之節ハ、御紋付之大丸御挑灯ハ　御守殿御玄喚兩

脇迄相燈可申哉、

一御城ニ被爲　入ル節ハ

御守殿御玄喚前くり石ニ、本宅より家老計可罷出ル哉、

其外用人・近習役も可罷出ル哉、何分ニ茂御差圖次第可仕ル、

一御鈴之間ニ御用之節ハ、此方家格ハ、側用人・近習役之内出會、御用承儀御座ル、此以後之儀茂、右之通可有御座ル哉、

一御入輿以後年頭・諸節句御規式之儀ハ、都而此方家格之通可仕ル哉、尤御規式御道具ハ、白木相用申心得御座ル、右御規式之儀ハ、此方より　御守殿ニ相勤ル料理方之者請込ニ而、家格之通調方仕、御附之御方申談差上ル様、可有御座ル哉、

一御入輿相濟ル以後、本宅ニ被爲成ル様被申上、御膳差上、御慰物等備　御覽ル様可有之ル哉、尤此儀ハ不急成儀御座ル、何分ニ茂思召之程、追而被仰知被下度御座ル、

一折目其外誰そニ御盃被下ル節、都而白木御三方差上、御熨斗受も白木差上ル心得ニ御座ル、此段も爲御存申上置ル、尤右之段ハ兼而添御用達ニ茂申含置ル、

一御入輿以後　竹姫君様より御三家様ニ、御祝物被遣儀共ハ無御座ル哉、

一阿部伊勢守・嶋津但馬守事ハ

御守殿ニ御祝儀御機嫌伺參上仕、獻上物茂可仕旨、左近將監様ゟ被仰渡ル、右兩人參上之節ハ、いつれ之御方御取次被成事御座ル哉、尤御廣敷迄參上仕、御祝儀伺御機嫌等申上置、退出仕ニ而可有御座と存申ル、此御模様も御内々被仰聞被下度御座ル、

一上總介・益之助・上總介奥方・御待上蓮伊勢守奥・嶋津淡路守奥ゟ　御入輿之當日、家老使者を以差上物仕筈ル、何方ニ相附右使者相勤可申哉、且又右使者ニ被下物も可有御座ル哉、何分ニ茂御差圖被下度ル、尤被下物本宅ニ而用意仕儀ルハ、、品・員數共ニ被仰聞被下度御座ル、

一阿部伊勢守・嶋津但馬守ゟも　御入輿當日、御祝儀獻上物仕筈御座ル、右兩人ゟ以使者差上物仕ル節も、いつれ之御方ニ相附差上可申哉、

但伊勢守・但馬守使者ニも、御祝儀被下儀御座ルハ、、前條同前御差圖被下度ル、

右之段々、御内々得御差圖ル様ニと、申付ル、萬端無

案内之儀而已御座ハ、右之外思召寄之儀ハ、無御遠慮御助言被下度御座ハ、先差當りハ儀共、荒増得御差圖申ハ、此外存付之儀共ハ、時々得御内意可申ハ、右之段々得と御了簡被成、御付札を以御差圖被成可被下ハ、此段私共より御沙汰申上候之様ニと、申付ハ、何分ニ茂宜様御了簡奉賴ハ、以上、

(朱)「享保十四年」十一月　　小笠原郷左衛門
　　山澤十太夫(盛香)

全上

正文在文庫

御内々御尋申上ハ覺

一御常調之御膳ハ、御附之御方より御調被差上儀御座ハ哉、尤此方より茂料理方之者段々　御守殿勤申付置ハ、何分ニ茂御差圖之通可仕ハ、

一御附之御用人衆其元様を始　御入輿之當日其外年頭・折目ニハ、御用人衆其元様并御附々之御方、料理等進被申筈御座ハ、其砌御同席ニ而進被申ハ御人數、夫々之應御役其席々御座分ケ等之儀、委細仰知せ被置度御座ハ、且又　御入輿之當日ハ御三ツ目迄ハ、御附之御方ハ於

御守殿、料理進申筈御座候、尤末々迄も料理進申心得ニ御座ハ、御用人衆を始是又御座席等之儀末々迄、御座分ケ被成被下度御座ハ、

一平日御附之御方、いつれ之御役迄掛合進可申候哉、御人數幾人ニ而可有之哉、且又御菜數等、夫々之御格合ニ應し相調可進ハ間、思召之程、又ハいつれ之席々ニ而進可申哉、無御心置御助言被下度ハ、

一御供之御女中之内

御城又ハ脇方ハ御越之節相付參ハ人數之儀、末々迄其御役々ニ應し幾人と御究被下度ハ、尤只今迄之御格合可有御座ハ間、御供人數等之儀委細被仰聞被下度ハ、いつれ之筋ニ茂御差圖次第可仕ハ、

一御侍衆御使者御勤之節ハ、借シ人馬此方ハ出ハ儀茂可有之候哉、其外此方心得ニ罷成儀ハ、不依何色、無御遠慮御助言被成被下度候、

一御守殿ハ本宅家老・用人・益之助守役・近習役より歳暮・年頭・諸節句・月次御禮日ニ御祝儀申上儀ニ茂可有御座ハ哉、且又右役々ハ、歳暮・年頭其外折目ニハ、御目錄又ハ品物等獻上仕儀ニ而ハ御座有間敷ハ哉、此

方家格を以ゝ、右役ゝ又ゝ國許より及家老を始差立ゝ役ゝ之者ゝ、目錄等年頭其外何そ屹立ゝ祝儀事等之節、大隅守・益之助・上總介奥ゝ遣來ゝ、且又御當地ゝ相詰ゝ家老、其外重立ゝ役ゝ致出府ゝ節、又ゝ爰元交替仕ゝ節も、目錄・品物等遣來ゝ、此儀家格之儀ニゝゝ得共、御守殿ゝ獻上物等仕ゝ儀ゝ重キ儀ゝ得ゝ、屹と相願ゝ樣ニゝ難仕ゝ、家法之儀ゝ御沙汰申上置ゝ樣ニと、役人共申付ゝ、得と御了簡被成、何れ之筋ニ及思召之旨、御助言被下度御座ゝ、

右之段ゝ、御内ゝ得御差圖候樣ニと申付ゝ、萬端不案内之儀而已御座ゝ、右之外思召寄之儀ゝ、無御遠慮御助言被下度御座ゝ、先差當りゝ儀共、荒増得御差圖申ゝ、此外存付ゝ儀共ハ、時ゝ得御内意可申ゝ、右之段ゝ得と御了簡被成、御付札を以御差圖被成可被下ゝ、此段私より御沙汰可申上旨、役人共申付ゝ、何分ニ及宜樣ニ御了簡奉頼ゝ、以上、

(朱)「享保十四年」十一月　　新納悠(詩)右衛(巻)門

(朱)「在口裏」

此御書付之通御手當濟、十二月二日朝、

2448

全上

正文在文庫

御道具參ゝ刻限

三日　朝巳刻頃　夕未中刻

四日　朝辰刻前　夕午中刻

五日　右同斷

(朱)「享保十四年十二月朔日」

2449

全上

正文在文庫

(朱)「在口裏」

松平大隅守ゝ

竹姫君樣初ゐ　御本丸ゝ被爲入ゝ節、大奥女中ゝ被下物之内、

巻物二充　　御客あひしらい　二人

同斷　　御中臈　七人

白銀三枚充　　御錠口　二人

右之通被下筈ゝ間、其用意可有之ゝ、尤大奥大年寄・表使・惣女中ゝ被下物之儀ゝ、最前相達ゝ通ニ可被心得ゝ、

大納言樣女中之内　　表使三人

白銀貳枚充

右、最前ゟ二人と相達ゝ得共、三人こゝゝ間、可被得其意ゝ、

一種五百疋　　清心院（綱吉側室）

右之通被下ゝ間、是又用意可有之ゝ、

「享保十四年十二月朔日」（朱）

2450

繼豐公御譜中

正文在鄕原金太夫

享保十四酉　　鄕原金太夫（兵雄）

十二月朔日　　樺山主計（久初）

雄

吉貴公於

御前、御判物頂戴被仰付置候處、同年巳十月、嶋津助之丞より、金太夫別立之願申上ゝ節、寄合並之家ニ被仰付、其節久之御字御免被　仰付、最前拜領之兵之字ゟ下之字ニ用、久兵と名乘、金太夫二男よりハ、兵之字を通字ニ可用旨、被仰付置ゝ、然處、たけと唱ゝ文字遠慮被仰渡ゝ付、内意被申出趣有之、達

貴聞ゝ處、金太夫實名之儀、先年從

總州樣拜領爲被　仰付置譯を以、今度別紙折紙之通、雄之字拜領被仰付ゝ、左ゝゐ金太夫二男よりハ、雄之字を雄（カリ）と唱、通字相用ゝ樣被仰付ゝ、

右之通、今日於御家老座直ニ申渡ゝ條、御記錄奉行ニ書留置ゝ樣、可申渡ゝ、以上、

「享保十四年」（朱）十二月朔日　　樺山主計（久初）

2451

全上

寫正文在文庫

寫

鄕原金太夫

右ゟ、正德三年巳七月、實名兵雄と可相改旨

2452

全御譜中

正文在文庫

今度　御入輿付ゐゟ

竹姫君樣ニ信證院并私實母又ゟ於菟・嶋津淡路守妻・同但馬守妻より御祝儀獻上物之儀、且又以後共御機嫌を爲

奉伺ゟ様仕度存ゟ付、其段相伺ゟ處、祖母信證院并實母・叔母よりゟ、御祝儀獻上物之儀、且又此以後奉伺御機嫌ゟ様ニ可有之ゟ、差上物品ゝ儀ゟ御差圖ニ不及ゟ間、相應ニ可差上ゟ、但馬守妻よりゟ不及其儀旨、御張紙を以被仰渡趣承知仕ゟ、此上又ゝ願相立ゟ儀如何奉存ゟ得共、但馬守妻事ゟ、鳥居丹波守娘ニゐ、私又從弟之積ニ御座ゟ得共、但馬守儀私末家ニゐ無據儀御座ゟ、但馬守ニ嫁ゟ譯を以、此節之御待上萠代ニ爲申出置事ニ御座ゟ、右之次第御座ゟ得ゟ、御取分を以可罷成儀ゟゟ、何とそ淡路守妻同前ニ、御祝儀獻上物、且又以後共御機嫌をも奉伺ゟ様ニ仕度存ゟ、此段重ゐ奉願ゟ條、何分ニゟ宜御差圖奉賴ゟ、以上、

(朱)「御張紙
願之通ニ可被致候」

(朱)「享保十四年」十二月「二日」　松平大隅守

2453

仝上

正文在文庫

(朱)「在口裏」
松平大隅守ゟ

御入輿相濟ゟ以後、御女中様方・右衞門督殿・小五郎殿よりも、以御使御祝儀被遣ニゐ可有之ゟ、其節、右衞門督殿・小五郎殿よりの御使ゟ會釋之儀、御女中様方より御使之通可被致ゟ、爲心得申達ゟ、

(朱)「享保十四年十二月三日」

2454

仝上

正文在文庫

(朱)「在口裏」
松平大隅守ゟ

御入輿相濟ゟ以後

一位様より御祝儀御使、女中たるへき旨、先達ゐ伺書ニ以附札相達ゟ得共

一位様よりも、御用人御使被遣筈ゟ間、可被得其意ゟ、

(朱)「享保十四年十二月三日」

（表紙）

竹姫君様

御入輿之件　享保十四年十二月

追録　舊記雜録　巻七十

継豊公御譜中

扣正文在家老座

十二月十一日ゟ七ツ目迄押通し

御入輿ニ付御本宅御座飾

大御書院

一御床御掛物三幅對中東方朔　両脇鶴　王若水筆

三具足

立花

香爐かね獅子蓋　大卓青貝

香合唐銀彫物

香匙火箸

鶴臺

左右立花　臺

御棚

撰句抄六册　中院大ゟ言爲家卿筆

籠飯青貝文鎮かね　盆青貝

手鑑古筆　文鎮

押板

喚鐘

執木

拂子

硯未央宮瓦

硯屏青磁

水入かね鯉

筆洗青磁

筆軸染付

筆架かね蟹

墨唐丸

軸物舜擧筆人形之繪　盆

表御書院

一御床御掛物二幅對山水之絵　高然暉筆
立花二瓶　臺
御棚
軸物一巻八畳之絵雪舟筆詩歌　青蓮院尊應親王筆
腰高香爐青磁　盆かね
料紙箱唐籠　盆堆朱印袋作
御附書院
一御床御掛物一幅栗子之絵　趙昌筆
活華花入青磁飛入　臺堆朱
御棚
御伏見院宸翰御詠歌二百首
軸物二巻　盆古青貝
香爐焼物赤絵　盆古青貝
盆石雪舟　鉢唐古銅銘有
次之間
一御掛物一幅人丸之絵近衛龍山公自賛自讃
正親町院宸筆御歌
硯伊勢之海水入祐乗作　筥軸さんとし
御勝手之間
一御床御掛物一幅松ニ人形之絵　小僊筆
活華花入京筒せんし臺
御棚
料紙箱古蒔絵
御勝手書院
一御床御掛物一幅龍之絵　所翁筆
立花　臺
御棚
續古今和歌集一部甘露寺親長卿筆外題智仁親王御筆　文鎮
仙香立かね人形　盆堆朱
硯箱沈金　文鎮沈
奉書美濃紙短尺卦さん
次之間
一御床御掛物一幅四季竹之絵　檀芝瑞筆
活花花入古銅　高臺
御取附之間
一御床御掛物一幅竹林七賢之絵　趙仲穆筆
砂物　臺
新座
一御床御掛物一幅鐘馗之絵　典章筆
活花花入せんし　高臺

次之間

一御床 御掛物一幅山水之絵　雪舟筆

活花花入焼物経筒　高臺

御家老座

一床 御掛物一幅壽老人之絵　祐意筆

立松　臺

御用人座

一床 御掛物一幅鶴之絵　沈周筆

活華花入契付　高臺

御臺子之間

一床 御掛物一幅梅之絵　相阿彌筆

活花花入かね

以上

（朱）「享保十四年」酉十一月

仝上

扣正文在家老座

酉十二月十一日　御入輿ニ付ゐ

御守殿御座飾

御上段

一御床 御掛物三幅對中壽老人 兩脇鶴　孫子昌筆

中花瓶水たゝへ臺梨子地蒔絵

但此水たゝへけ御花瓶ニ餅御拜領之日より立花相調左右共ニ三瓶ニゐ御棚飾惣様七ツ目迄押通ニ御飾仕け、

左右立松　臺黒柿ふち蒔絵

御棚

軸物二巻探雪筆　盆梨子地蒔絵

香爐梨子地蒔絵

香合梨子地蒔絵　盆右同

香匙火箸・箸共銀

御硯箱梨子地蒔絵　御文臺梨子地蒔絵

卦さん銀

御寢所

一御掛物一幅壽老人之絵　古信筆

立松　臺梨子地

御棚

軸物一巻孫信筆　盆青貝

重香合堆朱

香爐錦手

香合　右同　　盆へっこう
焚から入同
香はし銀
御料紙箱梨子地蒔絵
御化粧之間
一御床御掛物一幅論老人之絵　古信筆
立松　臺梨子地
御棚
三部集公家衆寄合書　文鎮
御料紙箱蒔絵
御客座
一御床御掛物二幅花鳥之絵　古信筆
立華二瓶　臺
御棚
腰高香爐焼物　盆へっかう
香合白焼
焚から入同　盆青貝
料紙箱青貝
次之間
一御床御掛物一幅唐子之絵　古信筆

活華花入焼物　薄板
御棚
香爐白焼獅子ふた
御客部屋
一御掛物一幅耕作之絵　探信筆
立松　臺
御使者之間
一御床御掛物一幅福禄寿之絵　古信筆
立松　臺
御用人衆御座
一御床御掛物一幅霧之絵入付　古信筆
立松　臺
以上

2457

「享保十四年」（未）
仝上
正文在家老座
十二月十一日就　御入輿御本宅こゐ之次第
一御入輿御刻限之儀　御城ゟ御迎御勤阿部伊勢守（正福）様、御
待上崩右之奥方様、御輿御請取嶋津但馬守（忠雅）殿、御貝桶

御請取鳥居丹波守様(忠利)、　御入輿以後御機嫌之御左右被仰上ル御勤松平備前守様(定章)、右之外先達ゐ及御伺ニ被相究置ル御手替之御方様ハ御刻限被仰出候間、御當日弥御勤之儀御賴被成ル旨、御使者を以前以被仰進ル、

一御入輿ニ付ゐ御本宅ハ御詰被成候様ニと被仰進置、及御伺ニル御人數へも、以御使者　御入輿之御刻限被仰遣、當日弥御本宅ハ御越被成ル様ニと、以御使者被仰遣候、

一同斷ニ付、嶋津式部殿(久芳)・山元縫殿殿(正延)・御同姓大膳殿(正方)・御城坊主與頭衆并御坊主ハ衣、御家老又は御留守居ゟ、以手紙案内申越ル、

一御入輿前日阿部伊勢守様ハ、御留守居御使者を以、弥明日　御入輿被遊筈ル間、先達ゐ申達置候通五ツ時前御登　城被成　御迎御勤可被下旨被仰遣ル、尤其御屋敷　御城御最寄之儀ル間、本宅ハ御越ニ不及、直ニ御屋敷より御登　城被成可然旨被仰遣ル、

右之通被仰遣ル處、尤彼御方御屋敷ゟ直ニ御登　城可被成ルへ共、格別之御勤之御事ル間、明六ツ時芝御屋敷へ御越、夫より御登　城可被成旨被仰進、當日未明ニ御出被成ル付、御熨斗御茶差上、夫ゟ御登　城被成、左ルゐ御屋敷ハ御越被成ル、

但　右御使者を以直ニ　於喜代様御方ハ、明日　弥御入輿被遊筈ル間、早刻ゟ芝御屋敷ハ　御入被成候様ニと被仰進ル、其節伊勢守様御城より御退出之砌、直ニ芝御屋敷ハ御越被成ルハヽ、西裏御門より御入被成ル様ニと被仰進ル、　お喜代様ニ衣東裏御門より御入被成ル様ニ被仰遣ル、

一伊勢守様(阿部正福)御迎御勤相濟、直ニ御屋敷へ御越被成ル節、御座之間ハ御通御着座之節、御家老之内御挨拶申上、今朝御迎御勤之御禮

太守様ゟ御口上之趣申上、白木三方御熨斗上ル、引次御茶上ル、右相濟御湯漬差上ル、

一鳥居丹波守様(忠利)・松平備前守様(定章)・嶋津但馬守殿(忠雅)右之外御役御手替之御方、又衣御本宅ハ被仰入ル御人数様、前日十日弥明日　御入輿之筈ル間、御刻限を以御越被成ル様ニと、以御使者御案内被仰遣ル、

但　御入輿付ゐ衣表御門通　御入輿前衣通融差留置ル間、東西南裏御門ゟ御越被成、本宅表玄喚より御入被成ル様ニと、右御使者より御取次迄致挨拶置候様ニと申付ル、尤御屋敷内御案内之者ゑ付置ル

旨申達ル様ニ申付ル、

一式部殿・縫殿殿・大膳殿・御城坊主與頭并御坊主へも、弥明日　御入與之筈ル間、早朝ゟ御越御取持被成候様こと、御家老又は御留守居ゟ以手紙案内申越ル、

一御入與之當日遠見被附置候儀、左近將監(松平乗邑)様へ被相伺ル處、弥遠見可被附置旨被仰渡ル付、下馬ハ御留守居付貳人、外足輕御兵具所付足輕見合召列、早朝ゟ差越御入與之御左右御屋敷へ申上ル節、御守殿御本宅ハ及時々申上ル、

一御城より御屋敷迄　御通筋之儀ハ、先達て申渡置ル、依之右遠見外櫻田・虎御門・天德寺前・土器町・赤羽橋・松平土佐守様御屋敷西之角、右六ケ所ハ遠見として御歩行壹人并足輕兩人ツヽ被附置、

御入與之御左右時々　御守殿御本宅へ申上ル、尤御通之節ハいつれ共右之場所ハ不罷居早々御屋敷之様ニ罷越御左右申上ル、

但右勤之御留守居付支度、かちん熨斗目同色之半袴、御歩行花色不洗物かちん半袴、足輕かち花色之不洗物、同色之小紋付麻上下御借物ニて着用仕ル、

一御屋敷東御拜領之御添地角ゟ御屋鋪御本門通西裏御門角迄、飾桶且又御馬廻新御番御歩行足輕立番之儀并掃除爲差引、御普請方檢者足輕人足等召列、右之所々ハ罷出ル儀、都て十二月三日御道具參ル初日之通、可申付ル、且又外廻り締方掃除爲見分、御普請奉行御普請方御目附見廻り、尤御屋敷内も致見分掃除等之儀致差圖ル、

但右勤之御馬廻新御番之儀、手鑓家來等召列ル儀、又は御歩行草履取召列ル儀、都て三日同前ニ申付ル、

一駒寄御門より表御本門迄之間、左右御馬廻新御番之内四人、御歩行兩人足輕立番飾桶之儀并掃除差引として、御普請方檢者相詰候儀都て三日御道具參ル初日同斷、

但右場所へ相詰ル人數、供召列ル儀ハ一切無用、尤駒寄番所ハ足輕六人、兩御本門同前相勤ル、

一警固番所上番御歩行四人、下番足輕四人相詰ル、

一警固番所へ臺子仕掛、表坊主之内兩人相詰ル、

但右番所脇へ半切貳ツニ水をたゝへ、半切一ツニ柄杓貳拾本ツヽ添置、晒長手拭廿筋程手拭掛ニ仕合差置ル、

一御屋敷外廻西北辻番所ハ、御留守居付壹人ツヽ、御徒

目付壹人ツヽ相詰、臺子仕掛、表坊主壹人相詰ゟ、

一御守殿御本門押番所へ御馬廻新御番之内兩人御歩行兩人相詰、御門番足輕八人相詰ゟ、尤右之當日　御守殿大御門小門共ニ開キ置申ゟ、

一御守殿中之御門張番所、物頭兩人御兵具所付士同足輕三日同前ニ相詰ゟ、

一御守殿裏御門上番御歩行四人、下番足輕八人、三日同前ニ相詰候、

一御守殿御勝手口ハ、御徒目付壹人、横目壹人、足輕四人召列、爲締方立番申付ゟ、

一表御本門押番所、御馬廻新御番之内三人御歩行兩人相詰右之當日若

公義衆又ハ御供之御方風與御越もゟハヽ、致御挨拶時宜次第御茶進、右番所へ臺子仕掛置、表坊主壹人相詰ゟ、

一表御玄喚前張番所、物頭兩人御兵具所付士下番足輕其外之儀ハ例之通申付ゟ、

一駒寄御門之内所〻番人、又ハ立番等之者、其外御屋敷外廻立番辻番人等

御入與之節　御通筋之分は、其場引拂　御入與相濟ゟ以後本〻之通勤番仕ゟ、

一表御玄喚前掛障子又ハ薄緣等敷付ゟ儀、其外右御門地幅より御玄喚迄之間、稻巻敷付之儀、先頃御老中樣御招請之節之通相調申ゟ、

一表御玄喚脇大半切貳ツニ水をたゝへ、柄杓貳拾本ツヽ半切壹ツニ添置、其脇ニ晒長手拭貳拾筋程手拭掛ニ仕合差置ゟ、

一右之當日張番所脇御中門開置、足輕立番兩人申付、新座玄喚脇へも半切柄杓手拭取揃差置ゟ、

一西東南裏御門押番并足輕之儀、三日同前ニ相勤ゟ、

一御守殿中之御門より御玄喚迄之内、三日同前ニ掛障子又ハ薄緣敷付、御玄喚左右ニ表御玄喚之通致掛障子置ゟ、

一中之御門より　御守殿本御門迄之内掛障子いたし、尤右御門地幅右中之御門迄之内表　御本門より御玄喚迄之内之通稻巻敷付申候、

一御守殿御玄喚脇へも表御玄喚脇同前ニ半切・柄杓・手拭取揃差置ゟ、

但　御守殿御勝手口ハ表半切・柄杓・手拭取揃差置ゟ、

一右所〻勤之御馬廻新御番御留守居付支度、褐衣熨斗目

同色之半上下着、御歩行小役人都ゐ花色不洗物かちん半上下着、表坊主花色不洗物十徳着、御屋敷内外所々番人立番足輕辻番共ニ都ゐかち花色不洗物同色之小紋付半袴、御借物ニゐ着仕ル、

一御屋敷内爲火用心、御馬廻新御番之内兩人、御歩行并足輕人足火羽織着用ニゐ例之通外廻相勤ル、

一新座入口又ハ内玄喚之邊ニ及足輕立番等申付置、其外御屋敷中不掃除無之樣ニ申付、横目御普請方檢者足輕人足等召列相廻、致見分見苦敷場所は時々掃除申附ル、

一太守樣御支度褐衣子持筋御熨斗目同色御長袴、

一御家老・御用人・御近習役・御留守居・御守殿添御用達支度、かちん子持筋熨斗目同色長袴着、

但此支度加賀守樣御方御聞合之上、本行之通被仰付、尤都ゐ之支度加賀守樣御方之通被仰付ル、

一右外之諸御役人、表小番人、御包丁人頭、御腰物札付、御守殿大番目附、同大番御文使褐衣熨斗目同色之半袴、

一表大番人、小役人花色不洗物かちん半袴着、

一御側醫師、かちん熨斗目十徳、御側表御茶道表坊主、花色不洗物十徳着、

一大書院御配膳御側表御小姓、

一表御書院御配膳表御小姓并寄御小姓右支度、かちん熨斗目同色之半上下、

一御取付之間新座御給仕廣間小姓支度、花色不洗物褐衣半上下、

一御守殿御本宅御座御床御棚飾等之儀ハ、別紙御飾書之通申付ル、

一御入輿ニ付ゐ御本宅ハ被仰入ル御客人樣御越之節、御正客樣ハハ遠見付置時々御屋敷ハ御左右申上ル、

一御正客樣御越之節、西裏御門より御入被成、表御玄喚ゟ御入被成筈ニ前以被仰進置ル付、御案内として御歩行西裏御門ハ相扣居御案内仕ル、右之外御客人樣御越之節ハ同前ニ御案内申上ル樣ニ申附、御兵具所付足輕西東南裏御門ハ扣居、時々表御玄喚ハ御案内申上ル、右御歩行并足輕支度前條同斷、

一御正客樣御入之節、御家老御用人御近習役御留守居御玄喚くり石ハ早晩之通扣居ル、

一嶋津式部殿・山元縫殿殿・同大膳殿・嶋津八郎兵衛殿時々御玄喚板之間邊へ御迎、御勝手之間又ハ御座之間ハ御案内有之ル、

但御座之間、御勝手之間へ被仰入ル御方ハ別紙御名

書を以御座相分ケ申ル、

一御正客様を始、外之御客人様方御越之節、御腰物表御小姓表御書院角之間へ扣居、御腰物相請取時々札相付、御腰物掛ニ相掛申ル、尤御腰物札付役早晩之通表御書院三之間ニ相詰居ル、

一御本宅御式臺小番大番表御書院取付之御座へ相詰ル小番人、前條之支度ニゐ、屹立ル御祝之節之通相詰ル、

一御客人様御越之節、時々見合御座之間又ハ於御勝手之間ニ御湯漬差上ル、此請込御納戸奉行御小納戸役目并兒玉怡阿彌ニ被仰付ル、

但御城坊主與頭并御坊主へハ於御取付之間御湯漬出（朱）「御長紙　鳥居丹波守様御家老鳥居頼母右

ル、座見舞挨拶御留守居御使番中通御目付、相詰候様と丹波守様へ被仰付候由ニ而参上終日相詰候」

一諸方より御附使者有之ルニ付、北東南裏御門より罷通（朱）「松平宋女正様

新座玄喚ゟ呼入御家老座へ案内いたし、茶たはこ盆見御附使者」

合出、御留守居御使番挨拶中通御目付座見舞被仰付ル、（朱）「柳生飛騨様御附之人御附使者」

但新座御玄喚ニ御馬廻新御番之内五六人、御歩行四（朱）「松平隠岐守様御附使者御家老」

人相詰居ル、尤右之當日御使者等ハ都ゐ新座御玄

喚ニゐ小番致取次ル、（朱）「水野壱岐守様御附使者御家老」（乗邑）

一御入與付ゐ　御與御渡松平左近將監様、御貝桶御渡酒井讃岐守様御勤、御供若御年寄本多伊豫守様（忠統）　御守殿（忠彦）

（朱）「京極修理様御附使者御家老」

御勤相濟、御本宅ニ被仰入ル付ゐ御取持小野次郎（忠一）右衛

門様・大井新右衛門様・田村主馬様・三宅彌一郎（徳恩）様御（朱）「幾田美濃守様御付使者御用人」

賴被成ル、（朱）「松平中務太輔様御附使者御留守居」

一御入與之儀段々御左右申來

公義ゟも御徒目付被差越、時々御注進有之　御守殿御（朱）「松平越中守様御附者御家老」

本宅ニ被相通ル付ニ　御守殿中之御門張番御本門番人（朱）「右御家老久松式部御在所より

又ハ警固番所番人、駒寄番所番人立番之御馬廻を始、御入與ニ付態と被差越候」

都ゐ御目通りニゐ無之所ニ引取らせ申ル、左ルゐ御本（朱）「立花出雲守様御附使者御家老」

宅御本門ハ大門小門共ニ　御入與相濟ル迄ハ閉之、差（朱）「阿部伊勢守様御附使者、御用人」

圖無之内ハ相開不申ル、此儀ハ御馬廻新御番ゟ締方之

儀御本門押番所へ罷在致下知ル、

一御屋敷外廻り御馬廻新御番を始立番之人數且又辻番人

迄

御入與之節、御通筋之分ハ都ゐ御目掛ニゐ無之所へ相

迦し、　御守殿本御門内へ　御入與有之候以後、早速

本々之通勤番仕ル、

一御入與之御左右段々有之ニ付

御守殿御門外へ鳥居丹波守様・嶋津但馬守殿御迎

御與を御見上ケ直ニ

御守殿御玄喚蒲縁へ御先達ゐ御越御扣被成　御守殿御

廣敷上之間ハ

御入輿　御輿御貝桶御請取渡之御作法有之ハ、

但　右御作法之儀ハ別紙繪圖面之通ニ御座ハ、

一御玄喚御入口之まいら戸夫より御廣敷内御縁頰之障子上之間二之間御襖不殘取拂、御玄喚御入口ゟ御勝手口之方ふすまハ相付、御廣敷後通之廊下間之まいら戸ニ相付、二之間之外角迄幔幕を引

御入輿前は右之幔幕をしほり

御入輿被遊ハ節不殘相下ケ申ハ、

一左近將監様・讃岐守様・伊豫守様御受取渡之節　御守殿御廣敷上之間ハ　御入被遊ハ付ゐ、右之御三人御供之御留守居衆并御附之御用人衆迄まんまく之内ハ御通被成ハ、

一御持せ之御發目御弓、其外之御道具請取渡之儀、且又御供之御先御跡女中　御守殿ハ被罷上ハ次第之儀ハ、委細　御守殿御次第書ニ相記ハ、

一御入輿被遊ハ節ハ　御守殿御本門外警固番所之前ニ御家老・御用人・御近習役・御留守居・御守殿添御用達

一同ニ並居　御通之節蹲踞仕ハ、

但　此儀ハ前以左近將監様ハ御伺之上右役〻罷出ハ、

一御入輿被遊ハ節　御本宅大御門小門共ニ早速相開、諸番人共最前之通相勤ハ、

但　右時節之儀は御家老ゟ致差圖ハ、

一御守殿御廣敷上之間ニゐ

御輿・御貝桶御請取渡之御作法相濟ハニ付、左近將監様・讃岐守様・伊豫守様ハ、丹波守様・但馬守殿御挨拶有之、右御兩人様御案内ニゐ御本宅ハ　御入被成ハ、其節御家老御先立仕ハ、尤　御通筋之面〻ハ惣下座仕ハ、

一御本宅御門ハ御入之節、右御門外ハ御家老・御用人・御近習役・御留守居罷在ハ、

一御玄喚御本門間中程迄阿部伊勢守様御迎、御式對有之大御書院ハ御案内有之ハ、

但　伊勢守様御迎之所ゟ、御門之方ハ寄りハゐ嶋津式部殿・山元縫殿殿・同大膳殿御迎有之ハ、

一雪降ハ付、御手笠御馬廻之内

御守殿御玄喚脇へ持相扣居差上ハ、御木履・御草履之儀は御草履取三人右同所へ扣居差上ハ、

一御玄喚拭緣脇入口之邊ハ、表御小姓三人扣居、左近將監様・讃岐守様・伊豫守様御玄喚御入之節、御跡ゟ附

參、御腰物御渡被成ル節、相請取御老中様御腰物ヲ一様ニ相掛、伊豫守様御腰物ヲ右御腰物掛之下疊之上ニ置之ル、

一御本宅御勝手詰之御方、別紙御人數様御老中様御入之節、御玄喚兩御使者之間を一座ニ構御列座被成御式對有之ル、

但 御老中様大御書院ニ御通被成ル節、右之御方様表御書院後之御廊下御通、御近習番所上御廊下ゟ御座之間へ御通被成、御老中様御披之節ヲ最前之通兩御使者之間へ御列座御式對有之ル、

一御老中様御腰物掛御上段脇御廊下ニ相直置申候、

一御座ニ御着座、伊勢守様・丹波守様・但馬守殿御挨拶有之、白木三方御のし上ル、

一御取持之御方様　御入輿付ヲ　御城ニ御詰被成ル故、此時御越無之、右御三人ニヲ御挨拶被成相濟ル、

一鰭之御吸物上ル、

一白木三方御土器御銘〻差上候、

一同御挾肴御銘〻ニ上ル、

一御銚子上ル、

一御三人様御土器御取上之節、但馬守殿より御銘〻右之御肴被進ル、御銚子御加へ、御取持之御方様御挨拶有之、御銚子三篇ニヲ相下ル、

一御入輿御供之御留守居衆大久保下野守(忠位)様・諏訪若狭守(頼秋)様、大御番頭小堀備中守(政峯)様、大御目付興津能登守(政安)様、御留守居番末高半左衛門(政峯)様・石原勘左衛門(政安)様、御廣敷御用人本目權左衛門(親良)様、御目付本多彌八郎(正庸)様・松前主(広隆)馬様・石川庄九郎(政朝)様・北條新藏(氏英)様・大岡右近(忠征)様・山岡五郎(景久)作様、御徒頭朝岡靱負(方喬)様・小笠原縫殿助(持廣)様・梶川三之丞(忠榮)様、小十人頭曽我七兵衛(勘賢)様・山岡源右衛門(景思)様右御役〻之御方、御老中様御本宅ニ御入、引次ニ　御守殿御玄喚前より御家老御用人御留守居御案内申上、表御書院ニ御入被成ル、其節但馬守殿御玄喚板之間ニ御迎、式部殿・縫殿殿・大膳殿、御家老薄縁迄、御用人御近習役御留守居繰石ニ扣居申ル、

一右之御人數御腰物、表御書院角之間ニ表御小姓相詰、受取之銘〻御名承屈札相付、御腰物掛ニ相懸申ル、左ルヲ表御書院上之間ニ御扣被成御座、御老中様御立以後大御書院ニ御通左之通御饗應有之ル、

一いつれも様御座ニ御着、伊勢守様・丹波守様・但馬守殿御取持之御方御挨拶有之、白木三方御熨斗上ル、

一鰭之御吸物上ル、

但 御取持御方 御老中様 御披キ之節 御屋敷ニ 御越被成、諸事御取持被成ル、

一白木三方兩頰御上座之御方ニ上ル、

一同御挾肴兩頰ニ續ゐ上ル、

一御銚子上ル、此時御取持之御方御挨拶有之、御上座之御方御土器御取上之節、丹波守様・但馬守殿より御肴被進、夫より御順々ニ相廻り、御銘々ニ右御兩人様ゟ御肴被進ル、御加へ有之左ルゐ末之御方被召上、御取持之御方御挨拶有之、右之御土器御銚子三篇ニゐ相下ル、

一御廣敷番頭衆御二人、大御番衆三十人、御與頭共ニ小十人衆三拾九人、御與頭共ニ右 御守殿御勤相濟、前條之御人數御本宅ニ御越、引續ゐ御用人・御近習役・御留守居之内御案内 御本宅ニ御越被成ル、其節式部殿・縫殿殿・大膳殿・御家老之内御玄喚板之間迄、御用人・御近習役・御留守居薄縁ニ控居、直ニ表御書院二之間三之間ニ御案内、御腰物前條之通、表御小姓相受取御銘々御名承札相付、御腰物掛ニ相懸申ル、

但 御腰物札付役表御書院後御廊下ニ相詰居ル、

一御老中様御立以後、右御座上之間ニ被成御座ル、御人數大御書院ニ御通以後、間之襖取拂、上之間ニ御通兩頰ニ御着座有之ル、

一右御座ニ御着座式部殿・縫殿殿・大膳殿之内御挨拶有之、白木三方御のし上ル、

一鰭之御吸物上ル、

一白木三方御土器兩頰御上座之御方ニ上ル、

一同御挾肴兩頰ニ立、

一御銚子上ル、

一御上座之御方御土器御取上之節、式部殿・縫殿殿より御肴被進、御加へ有之、夫ゟ末御順々ニ御抑御加へ有之、末之御方被召上、御銚子三篇ニて御土器相下ル、

一御徒目付衆九人、與頭共御廣敷添番衆十人、御徒押衆四人、御徒衆七拾五人、

右御人數も前條之御方ニ引續

御守殿押番所ニ相詰ル、御取次番之内ゟ致案内 御本宅御玄喚ゟ被罷通ル、此時御用人・御近習役・御留守居之内薄縁ニ扣居、御取付之間より新座ニ掛御案内申ル、

一御座ニ被相着ル節、御家老之内罷出挨拶引次、

一鰭之御吸物塗木具、
一白木三方土器上座之衆兩頰ニ立、
一同挾肴兩頰ニ立、
一御銚子
一御用人・御近習役・御留守居之内挨拶いたし、上座之衆御土器取上之節、右之内ゟ御肴進之、加へ有之、順〻ニ相廻し御肴銘〻ニ進加へ有之、銚子三篇ニ而末之方ニ而相納ル、
一雪降ル付手笠・木履應御人數前以致用意置、　御守殿御玄喚前ニ置之進ル、此請込御普請奉行御普請方御目付へ被仰付、檢者并御普請方付足輕ニ申付置致首尾ル、
一御老中様・若御年寄様御披前、伊勢守様・丹波守様・但馬守殿御挨拶有之、御披之節最前之所迄御送り、式部殿・縫殿殿・大膳殿も最前之所迄御送り、御家老を始いつれも御門外ニ罷出ル、
一右外之御方様御立之節、最前御越之節之通但馬守殿を始御送申ル、
一今日　御入輿御祝儀首尾好相濟、
竹姫君様益御機嫌能被遊御座難有思召候旨
太守様　大御前様より
公方様　大納言様　一位様ニ御文を以御禮被仰上ル、
右御文前日より御手當被仰付置　御入輿相濟ル以後被差上ル、
一御老中様・若御年寄様御披以後、一通之御禮御馬廻御使者を以早速被仰遣ル、
一御供之御留守居衆・大御番頭衆・御目付衆・御留守居番衆・小從人頭衆・御徒頭衆・御廣敷番頭衆右之御人數ニ及、一通り之御禮以御使者則日被仰進ル、
一御入輿相濟、早速松平備前守様御登
城被謁、御奏者番井上河内守様御機嫌能段被仰上、直ニ御退出被成、御屋敷ニ御越之節御座之間ニ御通、御家老之内御挨拶申上　太守様ゟ右御勤被成ル、御禮之御口上同人より申上、引次白木三方御熨斗并御茶上ル、尤御座同前之御料理差上ル、
一御刀大小　　松平左近將監様
右今日　御入輿ニ付　御輿御渡御勤被成ル付、御祝被成被進ル由ニ而、御家老藏人御使者を以被進候、案内御留守居、
一同御大小　　酒井讃岐守様
右同斷ニ付御貝桶御渡御勤被成ル付同斷之御口上ニ

ゐ、同人御使者ニゐ被進ル、案内同人、
一御太刀金馬代壹枚　本多伊豫守様
右同斷ニ付御供御勤被成候ニ付、御祝被成被進ル由ニゐ、御口上御用人木脇賀左衛門(祐盛)御使者を以被遣之ル、
一竹姫君様今日　御入輿御規式首尾能相濟、益御機嫌能被遊御座ル段、御老中様若御年寄様方御側衆、又は大久保下野守(忠位)様・小笠原平兵衛(常春)様ニ、以御使者御届被仰遣ル、右御人數之内御側衆平兵衛様ニ茂、表方御使者ニゐ被仰進ル、其外様は御留守居御使者ニゐ御届被仰進ル、
一御入輿相濟御老中様方を始、御供之御方々御披キ以後、於御本宅御祝之次第、
一御正客様を始御客様方大御書院ニ御着座、
一但馬守殿御挨拶有之、白木三方御熨斗上ル、
一三汁拾菜之御料上ル、御配膳御側表御小姓、
一御膳二三御向迄續ゐ上ル、
一御引物　但馬守殿、
一御料理相濟御向下ル、
一御引盃上ル、
一御銚子上ル、
一御引盃請八寸計下ル、
一御引肴　式部殿、
一御銚子上ル、
一三ノ御膳下ル、
一二ノ御膳下ル、
一御吸物上ル、
一島臺上ル、
但客居主居御上座之御方様ニ御銘々二通上ル、
一同御挾肴御雙方ニ上ル、
一御銚子上ル、
一但馬守殿御取持之御方御挨拶有之、御上座之御方様御土器御取上之節、但馬守殿ゟ御肴被進、御客居之御正座より御土器但馬守殿ニ被遣御肴迄被遣、右之御土器又御正座之御方ニ被遣、其御土器御順々ニ被進ル、尤御肴も御順々ニ御押被成ル、今壹通之島臺主居御上座之御方御取上之節、但馬守殿より御肴被進、其御土器但馬守殿ニ被遣御肴迄被進、右之御土器又御上座之御方ニ被遣、夫より御順々ニ御廻し御肴迄茂御銘々ニ御押被成ル、
一右兩御土器末之御方ゟ御上座之御方御雙方ニ被進候、

其節但馬守殿御挨拶有之、客居主居共ニ御肴被進、右之御土器但馬守殿ハ被遣、御雙方共ニ御納、

一御湯上ル、

一御吸物下ル、

一御本膳下ル、

一御茶菓子上ル、

一御濃茶上ル、

一御後くわし上ル、

一御薄茶上ル、

一時宜次第御たはこ盆差上ル、

一御城坊主與頭并御坊主表御書院二之間三之間一圍ニいたし、木具ニゐ御座同前之御料理出ル、

一引物并肴廣間小姓吸物御座同前、

一三篇目白木三方兩側上座ハ相立ル、

一同挾肴立、

一銚子御土器取上ル節、御留守居肴挾之順〻ニ相廻り、銘〻肴挾之末之方ニゐ銚子持下ル、

一御濃茶御薄茶都ゐ御座同前、

一右之人數ハ御家老罷出致挨拶ル、

一次郎右衛門(小野忠一)様・新右衛門(大井政長)様・主馬(田村顕哉)様・彌市郎(三宅德恩)様・但馬(島津忠[illegible])守殿・式部(島津久芬)殿・縫殿(山元正延)殿・大膳(山元正方)殿表向御挨拶相濟、御座之間ハ御揃、白木三方御熨斗上ル、御座同前之御料理上ル木具、

一御引物御家老、

一御引盃上ル、

一御銚子上ル、

一御引肴上ル、

一御銚子上ル、

一御吸物上ル、

一三篇目島臺上ル、

一同御挾肴立、

一御銚子上ル、

一次郎右衛門様御土器御取上之節、御家老御肴差上御順〻ニ御廻し、御肴ゑ御銘〻御家老より差上、大膳殿御納、

一御湯上ル、

一御茶くわし上ル、

一御濃茶上ル、

一御後菓子上ル、

一御薄茶上ル、

一諸方ゟ之御附使者、於御家老座二汁七菜之御料理塗木具肴吸物銚子三篇茶くわし薄茶迄於御家老座被下之、
挨拶御留守居座見廻御目附給仕御兵具所附士、
一御附使者ハ御家老之内罷出挨拶いたしハ、
一御勝手御詰御客人様御披之節、萬石以上之御方計、但馬守殿御玄喚板之間迄御送り御式對有之、其外ハ拭縁ニ而御式對有之ハ、式部殿・縫殿殿・大膳殿・八郎兵衛殿ニも萬石以上之御方計薄縁ニ而御式對、其外は板之間ニ而御式對有之ハ、御家老并御用人御近習役御留守居常式之御格合ニ而薄縁又は繰石ハ罷出ハ、
一御客人様御披以後差立ハ御方様迄ハ則日御禮使被遣、其外之御方様ニハ翌日御禮使被遣ハ、尤御家老又は御留守居ゟ以手紙御禮申達ハ衆ハ、吟味之上御付屆有之ハ、
一御入輿相濟ハ付而ハ、當日之御祝儀御役人限ニ其席々ニ而御家老逢ハ上、御祝儀申上ハ、
一右ニ付翌日翌々日ニ掛り御屋敷之面々御祝儀申上、御帳ニ相附ハ、
一御入輿被遊、御祝等首尾能相濟
竹姫君様益御機嫌能被遊御座候、御左右　御入輿之則日御國元ハ海陸二手極々急飛脚を以被仰進ハ、前以飛脚等之手當申渡置ハ、
一御刀一腰ツツ、　鳥居丹波守様
右御使者
木村四郎左衛門（時央）
嶋津但馬守殿
右ハ御使者
諏方甚左衛門（輝兼）
右ハ御近習役御使者を以
御入輿ニ付　御輿御貝桶御請取之御勤首尾能御仕廻、
御祝ゟ首尾能相濟御滿悦被成ハ、依之御祝被成、右之御道具被遣ハ由ハ、御口上ニ而翌十二日被進之ハ、
一御太刀金馬代（ママ）ツ、　阿部伊勢守様
一二種五百疋ツ、　松平備前守様
一紗綾五巻ツ、
右ハ表方御使者を以昨日
御入輿付而御迎并御機嫌之御左右御勤忝思召ハ、御祝ゟ首尾能相濟、御滿悦被成ハ、依之御祝被成御目錄之通被進ハ由之御口上ニ而翌十二日被進ハ、
一御太刀金馬代（ママ）ツ、　堀田出羽守様

一二種五百疋ッヽ　酒井右京亮様
松平筑後守様
柳生飛騨負様

一ちりめん十巻
一二種五百疋　阿部伊勢守様
奥方様

右同斷ニ付御手替之御人數へも御使番しらへの通、翌十二日表方御使者ニゐ御祝物被進、且又阿部伊勢守様奥方様御待上臈御勤付ゐ、御使番しらへ之通御祝物御側廻之内御使者を以翌十二日被進ゟ、

右之通ニゐ何そ間違之儀も無御座御祝相濟申ゟ、

「享保十四年」十一月　「十二月ノ誤カ本ノマヽ」

2458

緝豊公御譜中

豫因二吉辰一、自二享保十四年十二月三日一至二同月五日一將軍家遣二竹姫君之器財諸具於芝守殿一也、徒目附小人目附等宰二領之一、戸田喜右衛門（忠位）留守居番先二於諸具一來二于守殿廣敷一、而以二目次一所レ引二渡之一、家臣平岡内匠之品受二取之一、

扣正文在家老座

御入輿御道具參初ニ付ゐ、御祝御本宅御座飾十二月三日より十日迄押通、

大御書院

一御床御掛物二幅　霸之絵　養朴筆
立華二瓶　臺
棚
千載集二冊　青蓮院尊道親王御筆　文鎮
香爐　青磁　盆
香合　堆朱
香匙　火箸
料紙箱　青貝
押板
喚鐘
執木
拂子
硯唐
硯屏　虎物
水入　かね
筆洗　めのふ

2459

筆架 焼物龍
筆 象牙軸
墨 唐丸
古今序註
表御書院
一御床御掛物一幅 近衛禎家卿御筆 文鎮
砂之物 龍之絵 探幽筆
臺
棚
沈箱 曲輪
仙香立 かね人形
盆曲輪
料紙箱 鶴亀箱
御附書院
一御掛物一幅 默庵筆
活花華入古銅
香壺
棚
香爐 青磁
盆 唐蒔絵
重香合 堆朱
盆 堆朱
繪鑑 唐筆
文鎮 唐子
次之間
一御床 硯文臺 青貝

奉書美濃紙卦さん
御勝手之間
一御掛物一幅 壽老人之絵 秋月筆
立松
臺
棚
料紙箱 籠
奉書美濃紙
御勝手書院
一御床御掛物一幅 壽老人 唐筆
立松
臺
棚
軸之物二巻 歌近衛尚嗣公御筆
盆 堆朱
香爐 かね獅子ふた
絵探幽筆
盆 籠
料紙箱 占蒔絵
同所次之間
一御床御掛物一幅 布袋之絵 尚信筆
香呂(炉)
香臺
御取付之間
一御床御掛物一幅 壽老人 唐筆
立松
臺

新座

一御床御掛物一幅　鯉之絵　呂記筆

活花　華入青磁　臺

同所次之間

一御掛物一幅　耕作之絵　探信筆

活華　花入古銅　薄板

御家老座

一御床御掛物一幅　壽老人　御用人座　臺

立松

一御掛物一幅　鶴之絵　沈周筆

活花入焼物　香臺

御入輿ニ付御座飾

御休息所

一御床御掛物一幅　壽老人　秋月筆

立松　臺

新御書院

一御床御掛物一幅　壽老人之絵　常信筆

立松　臺

御棚

2460

歌書　勅撰名所和歌集一部　正親町實有卿筆　文鎮かね

腰高香爐かね　盆堆朱

敷壹枚

緋木壹ツ

手鑑石摺　文鎮

以上

（朱）「享保十四年」

仝上

扣正文在家老座

十二月三日より同十日迄押通し

御入輿御道具參初ニ付ゐ

御守殿御座飾

御上段

一御床御掛物二幅對　孫子昌筆　蠟之絵

立花二瓶　臺黒柿

御棚

軸物二巻　探雪筆　盆梨子地蒔絵

香爐　梨子地蒔絵

香合　梨子地蒔絵　盆梨子地蒔絵

香匙 火箸銀
御文臺 梨子地蒔絵
御硯箱 右同
卦さん 銀
御寢所
一御床御掛物一幅 壽老人之絵 古信筆
立松 臺梨子地
御棚
軸物一巻 孫信筆
重香合 堆朱 盆青貝
香爐 鉛手
香合 右同 盆へつかう
焚から入 右同
銀香はし
御料紙箱 梨子地蒔絵
御化粧之間
一御床御掛物一幅 壽老人之絵 古信筆
立松 臺梨子地
御棚
三部集 公家衆寄合書 文鎮

御料紙箱 蒔絵
御客座
一御床御掛物一幅 壽老人之絵 常信筆
立松
棚
腰高香爐 焼物 盆へつかう
香合 白やき
焚から入 白やき 盆青貝
香はし
料紙箱 青貝
次之間
一御床御掛物一幅 唐子之絵 古信筆
活花 華入焼物 薄板
御棚
香爐 白やきしゝふた
御使者之間
一御床御掛物一幅 福禄壽之絵 古信筆
立松 臺
御用人衆御座
一御床御掛物一幅 東方朔之絵 古信筆

立松　臺

御用人座

一御床御掛物一幅（鶴之絵 古信筆）

立松

以上

（朱）「享保十四年」

2461

継豊公御諧中

扣正文在家老座

十二月廿一日

御能組

翁　三番叟　仁右衛門

高砂　金剛太夫　久右衛門（清太郎 次郎 惣右衛門 正兵衛）

東北　観世太夫　彦太郎（新三郎 九郎右衛門）　市右衛門

祝言　十太夫　茂右衛門（辰三郎 權九郎 權八郎 安兵衛）

末廣　八右衛門

鶴亀　賣生太夫　新次郎（九郎兵衛 喜右衛門 左吉 忠次郎）

祝言　丹次郎　新之丞（助五郎 惣次郎 政次郎 小八郎）

2462

扣正文在家老座

十二月廿二日

御能組

翁　三番叟　彌右衛門

老松　観世太夫　新次郎（三郎右衛門 五郎次郎 惣右衛門 忠次郎）

八島　丹次郎　茂十郎（辰三郎 清五郎）　清左衛門

間　那須與市　傳右衛門

江口　十太夫　源七郎（九郎兵衛 喜右衛門）　正兵衛

橋辨慶　七太夫　彦六（三郎 蔵）　安兵衛

亂　賣生太夫　新之丞（三太郎 新九郎 左吉 市右衛門）

三本柱　八右衛門

花子　仁右衛門

2463

扣正文在家老座

十二月三日

御囃子組

高砂　賣生太夫　九郎兵衛 五郎次郎　惣右衛門 庄兵衛

東北　観世太夫　三郎右衛門 善右衛門　又六郎

祝言　十太夫　助五郎 六蔵　惣次郎 忠次郎

猩々

2464

仝上

正文在文庫

十二月三日　一番

一御黒棚　一

一御厨子　一

一御呉服　二

一御書棚　一

一御簾　一箱

一御小袖簞笥　一

一御屏風　九箱

一御行器　十荷

一御長持　黒塗御紋付　十棹

一御長持　溜塗御紋付　二十棹

一御長持　溜塗　二十棹

以上

(朱)「享保十四年」

2465

仝上

正文在文庫

十二月三日晩　二番

一御衣桁　三箱

一御屏風　大小　九箱

一御空焼棚　一

一御かろうと　二箱

一御小袖簞笥　一

一御葛籠　五荷

一御長持　三拾棹

以上

(朱)「享保十四年」

2466

仝上

正文在文庫

十二月四日　一番

一御甚目御弓　一箱

一御行器　五荷

一御臺子　一

同御小道具入

一御長持　一棹

一御衣桁　三箱

一御簾　一箱

一御屏風　五箱
一御とり　一箱
一押かね　二箱
一御長持　二十棹
一御匂唐櫃　二箱
一御にない　二箱
一大御食籠　二箱
以上
（朱）「享保十四年」

2467
仝上
正文在文庫
十二月四日晩　二番
一御呉服箱　二箱
一御にない　二箱
一大簞笥　御右筆間　一
一御とり　一箱
一大御食籠　二箱
一御行器　三荷
一御ほんほり　二箱

一御燭臺　五箱
一御呉服箱　二箱
一御畳衣桁　一脚
一御戸棚　御右筆間　二
一御燭臺居御三方　二箱
一かね大丸火鉢　五箱
一御盤立　五
一御燭臺笠　一箱
一御長持　十棹
以上
（朱）「享保十四年」

2468
仝上
正文在文庫
十二月五日　一番
一御幕　二箱
一御呉服箱　二
一御簞笥　御右筆間　二
一黒塗膳　三箱
一同膳　五箱

一御入湯桶　四箱
一御手洗　二箱
一御長持　二十棹
一御うわさし袋　一箱
一御書棚　一
一御掛棹　一箱
一御簞笥　二

以上

（朱）「享保十四年」

2469

仝上
正文在文庫

十二月五日晩　二番

一御琵琶　一箱
一御和琴　一箱
一御琴　一箱
一御純帳　二箱
一御蚊帳　二箱
一夏御褥　一箱
一御臺子　二箱

同御小道具入

一御長持　一棹
一御幕　二箱
一御衣桁　一箱
一御火燵蒲團　一箱
一御菓子蠅帳　三箱
一御次つくし琴　一箱
一御長持　二十棹
一大御火鉢　一箱
一御匂棚　一

以上

（朱）「享保十四年」

2470

仝上
正文在文庫

覺

一御入輿以後　竹姫君様ニ年中御入用何程可差上ヤ哉、
（朱）「御張紙　加賀守時之通可被心得候」
何分ニ茂御差圖被成被下度奉存候、
（朱）「御張紙
一御附之御用人衆を始末〻迄之御人數ニ、大隅守より御
御用人江は千俵充、醫師御用達御台所頭江者弐百俵充、合力可被致候、持高ニ

合力如何可進ハ哉、尤御供之御女中方ハ御宛行之儀ハ無構向後も右之通可被心得候、御同朋以下は只今迄之御切米御扶持方並御足高御足扶持之通被相渡候様可被致候」
此程被仰渡ハ横折御帳を以、委細御用人衆ハ御尋申上置ハ、

右之段相伺ハ様ニと大隅守申付ハ、以上、

(朱)「享保十四年」十二月「四日」　松平大隅守内　堀萬右衛門(貞紀)

2471

仝上

正文在文庫

(朱)「御張紙」

來十一日　御入輿可被遊旨被仰渡置ハ、依之御刻限之儀承知仕度奉存ハ、此段可奉伺旨大隅守申付ハ、以上、
御供ハ五時ニ候間可被得其意候」

(朱)「享保十四年」十二月「五日」　松平大隅守内　堀萬右衛門(貞紀)

2472

仝上

正文在文庫

御道具目錄

一御合具　一箱
一御屏風　二箱
一御長かもし　二箱
一御掛物　一釣り臺　一箱
一御茶壺　二
一御褥　一箱
一御行器　二荷
一御重箱臺　二箱
一御雛道具　三
一御雛壇　一箱
一御長持　十六棹

以上

(朱)「享保十四年十二月六日」

2473

仝上

正文在文庫

目錄

女中衆

長持　八拾三棹

以上

(朱)「享保十四年」十二月六日

2474

仝上

正文在文庫

御入興翌日五百八拾之餅并御樽肴、使者家老嶋津中務を以獻上仕筈こゝ、於
(朱)「御張紙」
御城ゟ獻上之品〻御玄喚より差通ゝ様可有御座ゝ哉、
使者江謁者中ニ而可有之候、五百八拾之餅十種十荷如先格塩重
加賀守様御方承合ゝ處、五百八拾之餅・御樽肴御獻上
御門より上之柳之間江御徒之者運候間可被得其意候」
御使者御家老前田美作守　御城ゟ罷上、御獻上物ゟ御玄喚より通之、御受込之御目付衆御差引こゝ於柳之間、秋元但馬守様御逢被成、御奏者番鳥居播磨守様御目錄御請取、則口上但馬守様ゟ申上、御挨拶有之退座、追付奥ゟ可罷通旨御目付衆御差圖こゝ、於躑躅之間久貝因幡守様(正順)・折井淡路守様(正辰)御挨拶、御吸物御肴兩種御酒三篇頂戴之、早ゝ但馬守様御逢可被成之旨被仰聞、重ゝ柳間ゟ罷出候様こ獻上物被遂御披露、御機嫌之御様子こ候旨被仰聞、御時服十、廣蓋二こ載、播磨守様御差引こゝ頂戴仕、但馬守様ゟ御禮申上ゝ由、右こ付ゝ加賀守様ゟ御老中様方・若御年寄様方ゟ御禮、御留守居御使者を以被仰上ゝ由申來ゝ、此節之儀於　御城何れの御方様ゟ相付獻上物可差上候哉、何分こゝ及御差圖被成被下度奉存ゝ、此段相伺候様こと大隅守申付ゝ、以上、

2475

(朱)「享保十四年」十二月「六日」　松平大隅守内　堀萬右衛門(貞紀)

継豊公御譜中
正文在文庫
今朝蜜柑二箱炙鮎一箱被獻之ゝ、遂披露候處一段之御仕合ゝ、恐〻謹言、
(朱)「享保十四年」十二月六日　乘邑判
(朱)「在口裏」
〃　松平大隅守殿　乘邑
松平左近將監

2476

仝上
正文在文庫
御入興之御禮申上ゝ朝
公方様　大納言様より　上使被下候節、鰭之吸物、嶋臺差上申筈御座ゝ、其節大隅守こゝ及吸物御相伴可仕候哉、加賀守様御方承合候處、
公方様より之　上使井上河内守様
大納言様より之　上使小笠原佐渡守様御越被成、鰭之

御吸物・嶋臺被差上、當加賀守様御吸物御相伴ニゟ御
取替御座ゞ旨申來ゞ、此節之儀弥致御相伴御取替可仕
ゞ哉、此段相伺候様と大隅守申付ゞ、以上、
（朱）「御張紙ニ而
加賀守時之通可被致候」

（朱）「享保十四年」十二月「八日」　松平大隅守内
堀萬右衛門（貞紀）

2477

仝上
正文在文庫
目錄
女中衆
長持　貳拾貳
釣臺　五拾九
以上
（朱）「享保十四年」十二月八日

2478

仝上
正文在文庫
目錄
女中衆
長持　拾
簞笥　壹
釣臺　七拾
以上
（朱）「享保十四年」十二月八日

2479

仝上
正文在文庫
目錄
女中衆
長持　拾
簞笥　壹
釣臺　七拾
以上
（朱）「享保十四年」十二月八日
（補註　本文書ハ前文書ニ同シ、誤入カ）

2480

仝上
正文在文庫
御入輿相濟ゞ爲御祝儀
一位様其外之御女中様方、右衛門督様（田安宗武）　小五郎様（一橋宗尹）より

御使を以御祝儀物可被下置之旨先達ゐ被仰渡置ゟ、
右御使御越之當日　一位様ゟ茂女使を以御禮申上　右
（朱）「御張紙
衛門督様　小五郎様ゟ之御禮は則日　御本丸ゟ登　城
御禮被致候當日、何茂之内ゟ右衛門督殿・小五郎殿より御使之御禮
仕儀ゟハ、、其節申上ゟ様可有御座ゟ哉、左ゟハ、何
可被申上候、外之御女中様方ゟ之御禮も可為其通候」
れの御役人様方ゟ相付可申上ゟ哉、且又、其外之御女
中様方之御禮如何可仕ゟ哉、何分茂御差圖次第可致ゟ、
此段相伺ゟ様と大隅守申付ゟ、以上、
（朱）
「享保十四年」十二月「九日」　松平大隅守内
土岐半助（賀通）

2481

仝上
正文在文庫
覺
一獻上物上りゟ所
堺重御門より入り申ゟ、堺重御門之際ニゐ黒鍬之者な
と罷出請取ゟゐ、白洲之内ゟ入レ申ゟ、御縁ノ上より
御徒衆取次申ゟ事、
一右獻上物之世話
御目付（大森半七郎殿（時長）、石河庄九郎殿（政朝））
右兩人衆差引被致ゟ事

一御使者御老中御逢被成ゟ席、柳之間、
御吸物被下ゟ席、躑躅之間、
右之通ニ御座ゟ、左様御心得可被成ゟ、以上、
（朱）
「享保十四年」十二月九日

2482

正文在文庫

一御長持	七棹
一御幕	二箱
一御雨傘	一箱
一御琴	一箱
一御膳御道具	一箱
一同御鍋	一箱
御鍋床二ツ	
一御居臺二ツ	
同蠅帳二ツ	
一御盤立三面	二釣
一御水桶十五荷	五釣
一御火鉢四箱	四釣
同網蓋四箱	
一鐵行燈二拾	三釣

一御水垂桶　一釣
以上
(朱)「享保十四年十二月九日」

2483
仝上
正文在文庫
一御召御輿　一挺
同棒共
一網代御輿　一挺
一御長持　拾棹
一御蒸籠　一釣
一御茶臼二ツ　一釣
一挽臼二ツ　一釣
一石臼　一釣
一御蕎麥切道具　一釣
一白木臺六ツ　二釣
以上
(朱)「享保十四年十二月九日」

2484
仝上
正文在文庫
目錄
御長持　五拾三棹
以上
(朱)「享保十四年」十二月九日

2485
仝上
正文在文庫
目錄
女中衆
澁紙包　三ツ
釣臺　四拾六
簞笥　拾ヲ
長持　八ツ
以上
(朱)「享保十四年」十二月九日

2486
仝上
正文在文庫
目錄

女中衆
たんす　七ッ
つり臺　拾七
長持　拾七
以上

(朱)「享保十四年」十二月九日

2487

全上
正文在文庫
目錄
御用
御簞笥　五ッ
大御文庫　貳ッ
御琴箱　貳ッ
御幕箱　貳ッ
御しとね箱　壹ッ
釣たい　拾ヲ
御屏風　八雙
内貳雙油簞なし
以上

(朱)「享保十四年」十二月十日

2488

全上
正文在文庫
目錄
女中衆
長持　拾壹
簞笥　七ッ
釣臺　拾六
以上

(朱)「享保十四年」十二月十日

2489

全上
正文在文庫
目錄
急御用
黒塗御簞笥　壹ッ
溜塗御小簞笥　貳ッ
御臺乗黒塗大箱　壹ッ

御紋付御長持　五棹
油たんなし
御長持　三棹
油たんあり
以上
(朱)「享保十四年」十二月十日

2490

仝上
正文在文庫

來十一日　御入輿相濟、十三日御三ツ目ニ相當申ㄟ、其日御禮被申上ㄟ得ㄊ勿論、御三ツ目之御祝有之筈ㄟ、若十三日之御禮相延ㄟハ、、何日ニ而ㄊ御禮被申上ㄟ日、(朱)「御張紙」御三ツ目御祝可有之ㄟ哉、又ㄊ御禮被申上ㄟニ無構　御三ツ目五ノ目御祝之儀は　御入輿相濟御礼被仰上候有無ニ　御入輿當日より三日五日相當候日、御三ツ目五ツ目御祝有之事御座ㄟ哉、此段前以御尋申上ㄟ様と申付ㄟ、御樽は有之間敷事ニ被遊候、右之祝儀は當日ニ世以祝申儀ニ御座候」

(朱)「享保十四年」十二月　松平大隅守内　土岐半助(賀通)

(朱)「右小笠原平兵衛様ㄟ被得御差図ㄟ處、張紙を以朱書之通被仰聞ㄟ由半助申出ㄟ」

2491

仝上
正文在文庫

蜜柑二箱、炙鮎一箱被獻之ㄟ、遂披露ㄟ處、一段之御仕合ㄟ、恐〻謹言、

(朱)「享保十四年」十二月十一日　信友判

(朱)「在口裏」〆　松平大隅守殿　信友
安藤對馬守

2492

宗信公御譜中

同年十二月十一日竹姫君整ニ婚儀於芝邸守殿一、是故同月十五日繼豐應レ教登レ營、而於ニ黒書院一奉レ禮ニ謝竹姫君之雕輿入婚儀成一焉、阿部伊勢守正福亦應レ教代ニ吉貴一奉ニ禮謝一與ニ繼豐一同矣、時於白書院執政班列吉宗公使ニ執政松平左近將監乘邑述ニ　台命一、拜ニ領御刀一腰(包永)於益之助(宗信)一而正福代レ之件々、詳ニ于繼豐之譜中一

同月二十七日竹姫君養ニ益之助一爲レ子(以生妾腹、故及于此)